

大正十一年

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

2

498.15

三九

和  
二  
〇  
三  
六  
號

# 衛生調查書

(基本調查の四)

## 臺灣マラリア統計

(記述の部)

臺灣總督府警務衛生課

大正十五年刊行

2

498
20036
222

# 衛生調査書

(基本調査の四)



臺灣總督府警務局衛生課

大正十五年刊行

## 凡例

- 一 本編は、本島に於けるマラリアに因する死亡と、マラリア防遏成績とを記述したるものなり。
- 二 記述の資料としたる統計は、既刊「臺灣マラリア統計」原表の部と、之に依りて算出したる比例とに據りたり。
- 三 記述文は主として、大正六年より同十年に至る五箇年の現狀を叙したるも、特に其の變遷推移の狀態を説明するの要ある事項に就ては、既往の事實又は最近の統計を援用して考察の便にせり。
- 四 本編の主眼とするところは、マラリアの過去、現在を闡明するに在りと雖も、亦本病制遏の對策に資する基調たらしむるに外ならず。

目次

緒言

一 本調査の使命.....	一
二 材料蒐集の範圍.....	二
イ 時 間.....	
ロ 地 域.....	
ハ 性 別.....	
ニ 種 族.....	
ホ 年 齢.....	
ヘ 季節.....	
三 本記述の範圍.....	四
第一章 マラリア死亡.....	
第一 總數.....	四
第二 改練以來のマラリア死亡實數.....	五
第二章 マラリア死亡率.....	
第一 總數.....	七
第二 種族とマラリア死亡.....	一〇
一 内地人の状態.....	一〇
二 本島人の状態.....	一三
第三章 總死因より觀たるマラリア.....	
第一 總數.....	一四

目次

一

第二 總死亡原因とマラリア

- 一 總數..... 一
- 二 種族に依る差異..... 二
- イ 内地人の状態..... 一
- ロ 本島人の状態..... 一
- ハ 外國人の状態..... 一

第四章 マラリアの分布

第一 州廳別とマラリア

- 一 總數..... 三
- 二 死亡率..... 三
- 三 累年比較..... 三
- 四 總死亡百中の割合..... 三
- 五 最多死因をマラリアとする地方..... 三
- 六 最多死因の第二位をマラリアとする地方..... 三
- 七 マラリアを最多死因の第三位以下とする地方..... 三

第二 郡、支廳及市とマラリア

- 一 人口千に對するマラリア死亡の割合..... 三
- イ 全島..... 三
- ロ マラリア系..... 三
- ハ 臺北州..... 三
- ニ 新竹州..... 三
- ホ 臺中州..... 三
- ヘ 臺南州..... 三
- ト 高雄州..... 三
- チ 臺東廳..... 三
- リ 花蓮港廳..... 三
- ル 花蓮廳..... 三
- レ 花蓮廳..... 三

- 二 總死亡百中のマラリア死亡の割合..... 四
- 三 總死亡中のマラリアの順位..... 四

一 臺北州

- イ 臺北市..... 四
- ロ 七星郡..... 四
- ハ 淡水郡..... 四
- ニ 基隆郡..... 四
- ホ 宜蘭郡..... 四
- ヘ 羅東郡..... 四
- ト 蘇澳郡..... 四
- チ 文山郡..... 四
- リ 海山郡..... 四
- ル 新莊郡..... 四

二 新竹州

- イ 新竹郡..... 五
- ロ 中壢郡..... 五
- ハ 桃園郡..... 五
- ニ 大溪郡..... 五
- ホ 竹東郡..... 五
- ヘ 竹南郡..... 五
- ト 苗栗郡..... 五
- チ 大湖郡..... 五

三 臺中州

- イ 臺中市..... 六
- ロ 大屯郡..... 六
- ハ 豐原郡..... 六
- ニ 東勢郡..... 六
- ホ 大甲郡..... 六
- ヘ 彰化郡..... 六
- ト 員林郡..... 六
- チ 北斗郡..... 六
- リ 南投郡..... 六
- ル 新高郡..... 六
- レ 鹿港郡..... 六
- ロ 鹿港郡..... 六
- ハ 鹿港郡..... 六
- ニ 竹山郡..... 六

四 臺南州

- イ 臺南市..... 三
- ロ 新營郡..... 三
- ハ 新化郡..... 三
- ニ 曾文郡..... 三
- ホ 北門郡..... 三
- ヘ 新營郡..... 三
- ト 嘉義郡..... 三
- チ 斗六郡..... 三
- リ 虎尾郡..... 三
- ル 北港郡..... 三
- レ 東石郡..... 三

五 高雄州

- イ 岡山郡..... 三
- ロ 鳳山郡..... 三
- ハ 旗山郡..... 三
- ニ 屏東郡..... 三

六 臺東廳……………ホ 潮州郡 ……ヘ 東港郡 ……ト 恒春郡 ……ニ 鹿港郡 ……ハ 大武壠支廳……………イ 臺東支廳……………

七 花蓮港廳……………イ 花蓮支廳……………ロ 玉里支廳……………ハ 研海支廳……………

第三章 街庄區とマラリア……………

第五章 季節とマラリア……………

第一 マラリア死亡百分比……………

第二 全年を通し平均一日の死亡を百とし、各月平均一日死亡の割合……………

第三 氣温とマラリア……………

第四 蚊族とマラリア……………

第五 原蟲保有率とマラリア……………

第六章 性とマラリア……………

第一 女性百に付き男性の割合……………

一 總説……………

二 總死亡との比較……………

三 種族に依る差異……………

第二 人口千に付き兩性の割合……………

一 全島……………

二 州廳別……………

三 月に依るマラリア死亡の順位は兩性中孰れを確率高しとするや……………

第七章 年齢とマラリア……………

第一 實數よりの觀察……………

一 總説……………

二 州廳別……………

三 一般死亡との比較……………

第二 人口よりの觀察……………

一 全島……………

二 州廳別……………

第八章 統計に現れたるマラリア患者……………

一 總説……………

二 全島……………

三 官立醫院別……………

四 公醫別……………

五 總括……………



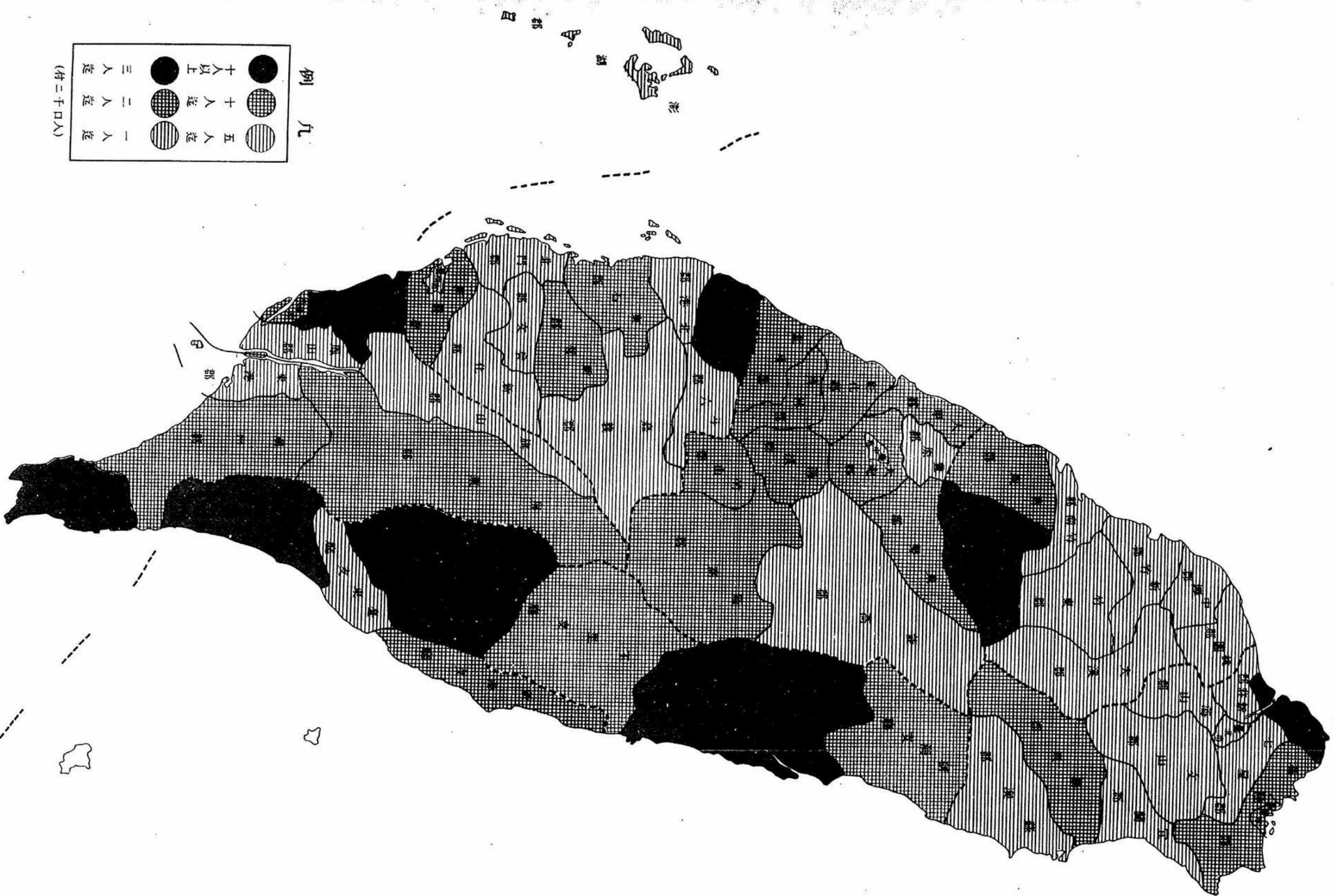
第九章 マラリア防遏成績

- 一 總數.....一四
- 二 州廳別.....一五
- 三 種族別.....一六
- 四 防遏成績.....一七
- 五 人口の移動と原虫保有者.....一八



圖布分了リラマ

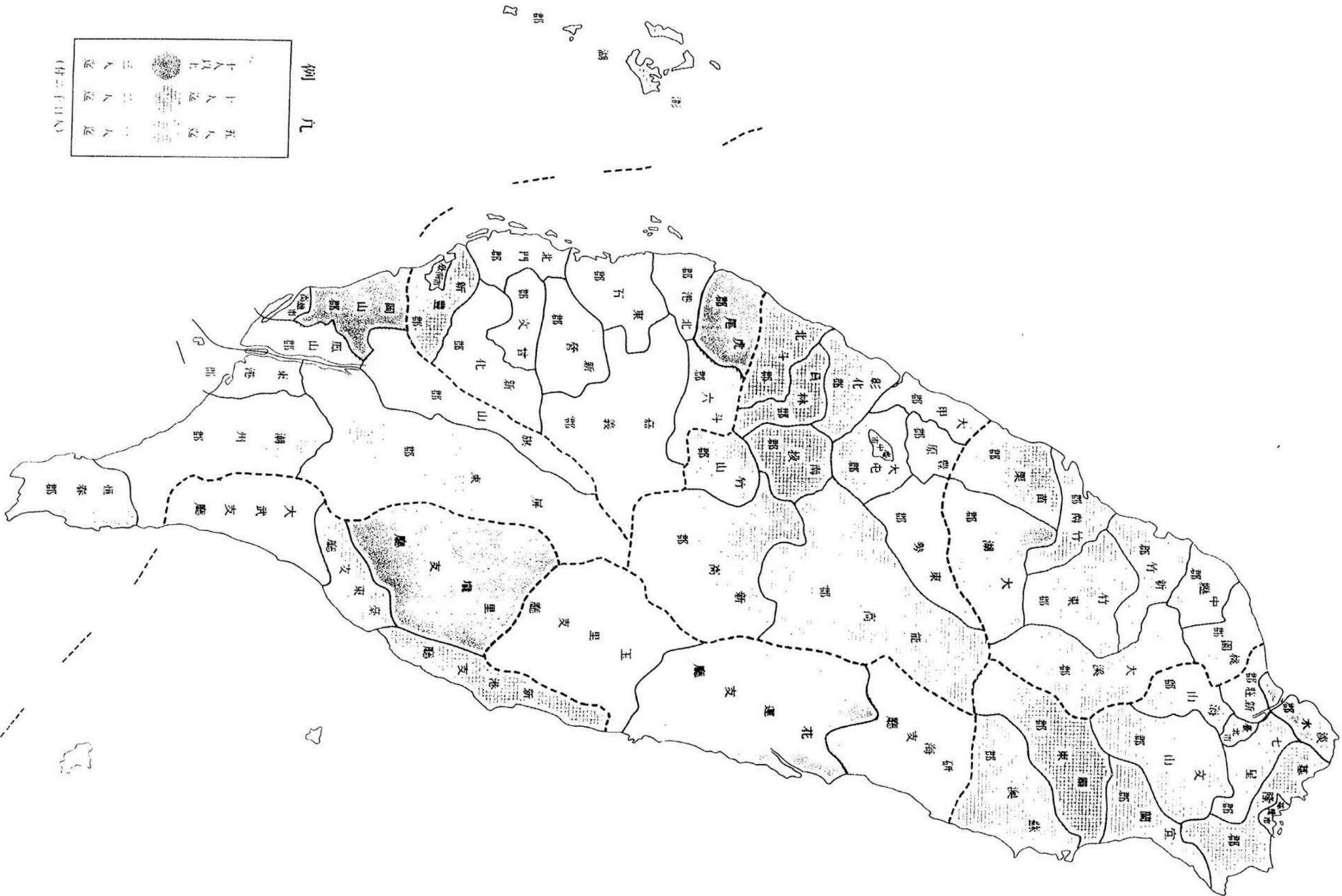
圖一第



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

# 圖布分了リラマ

圖一第

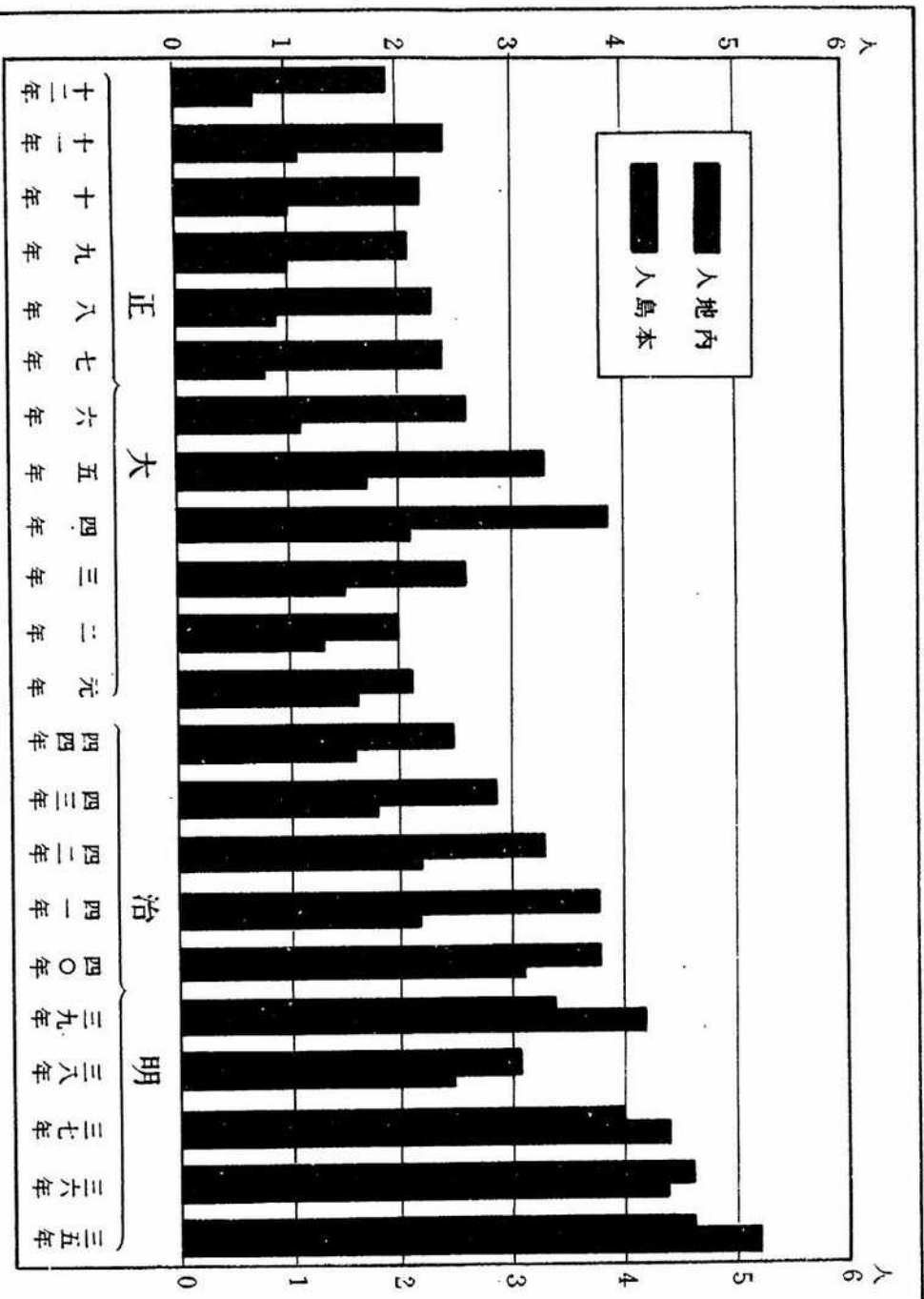


例 九

十人以上	十人以上	五人迄
五人迄	五人迄	五人迄
五人迄	五人迄	五人迄

(市二千以上)

アフリカ死亡率 (人口千二付)

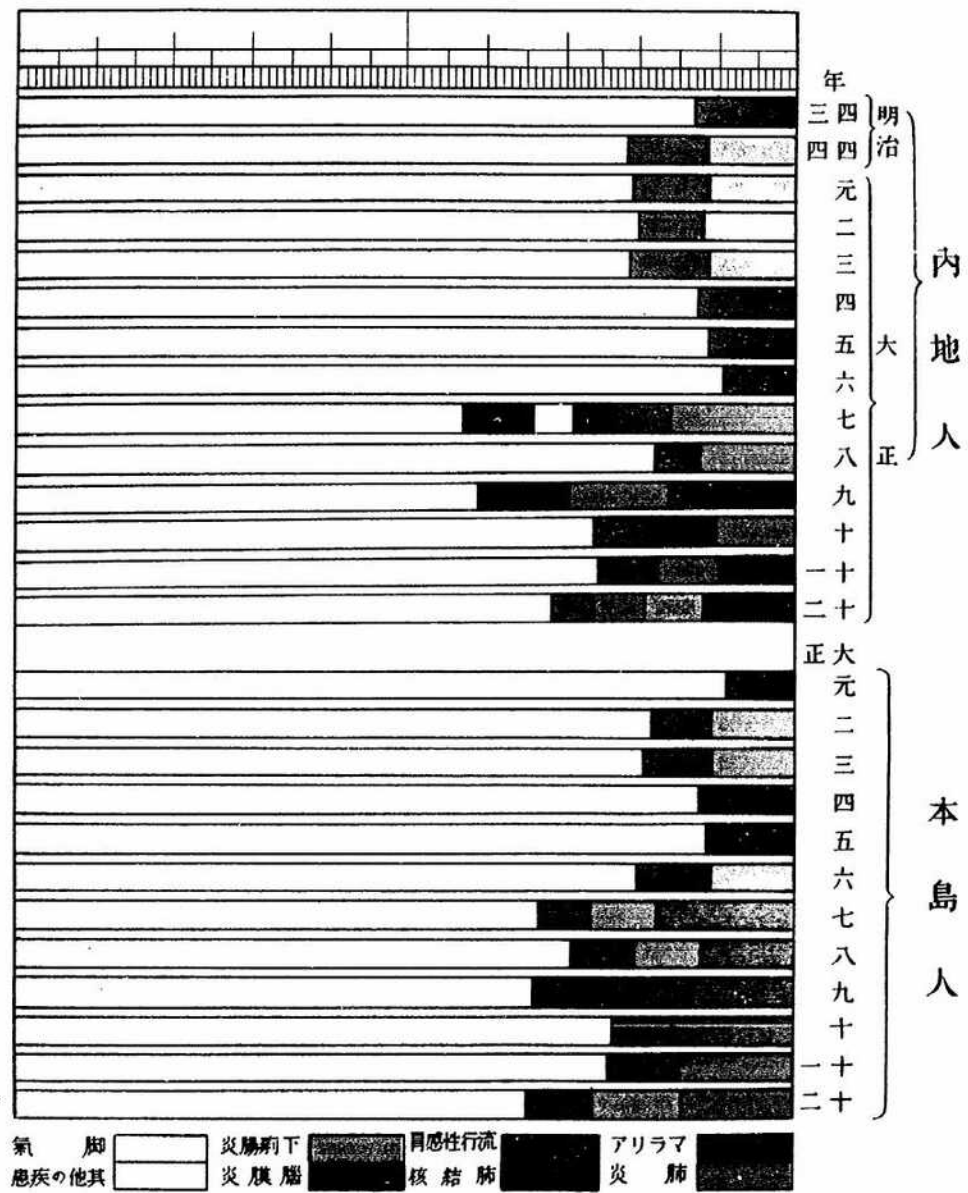


第二圖

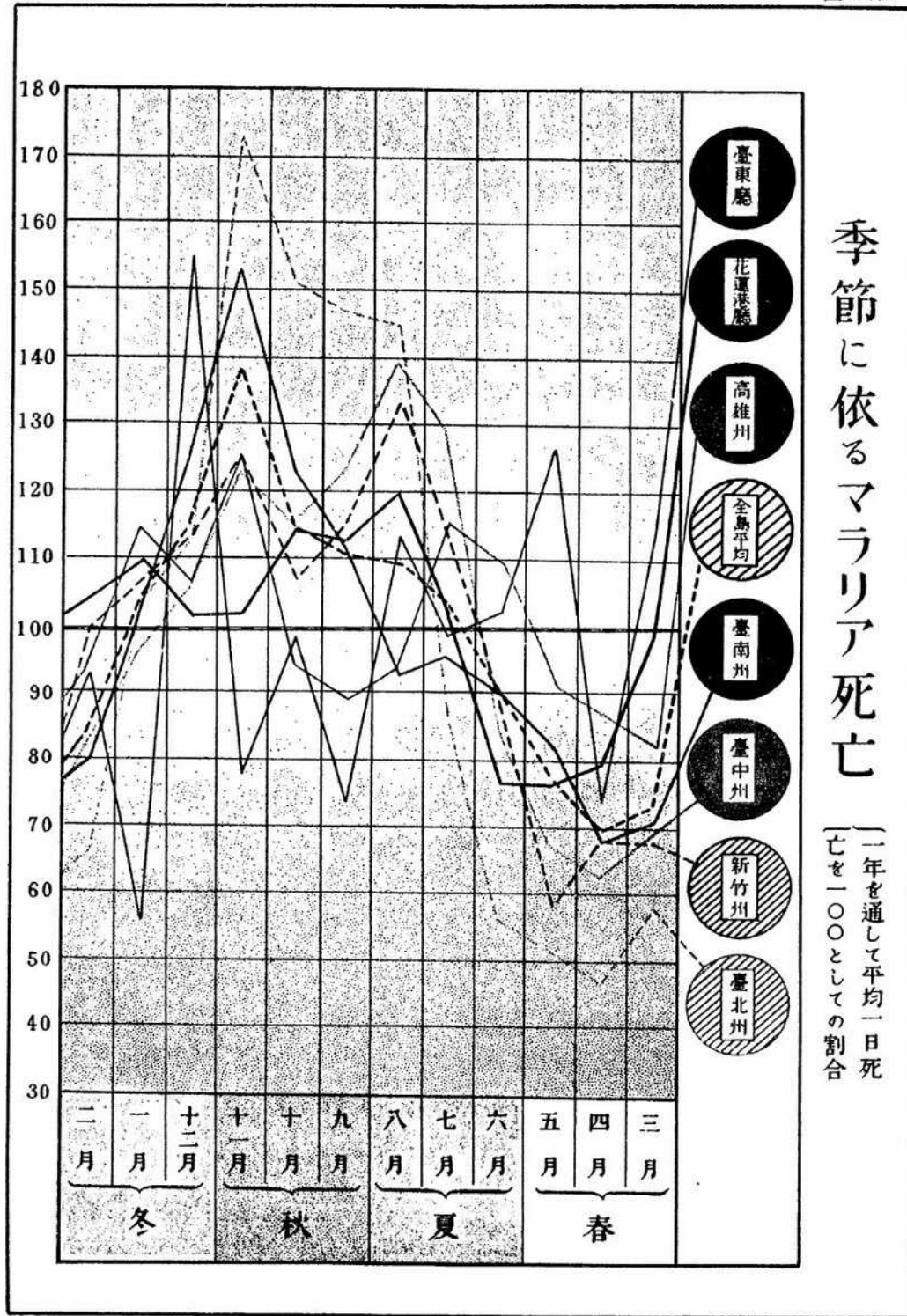
率亡死及位順のアリラマ中亡死總

(人島本 人地内)

(中百亡死總)



圖四第

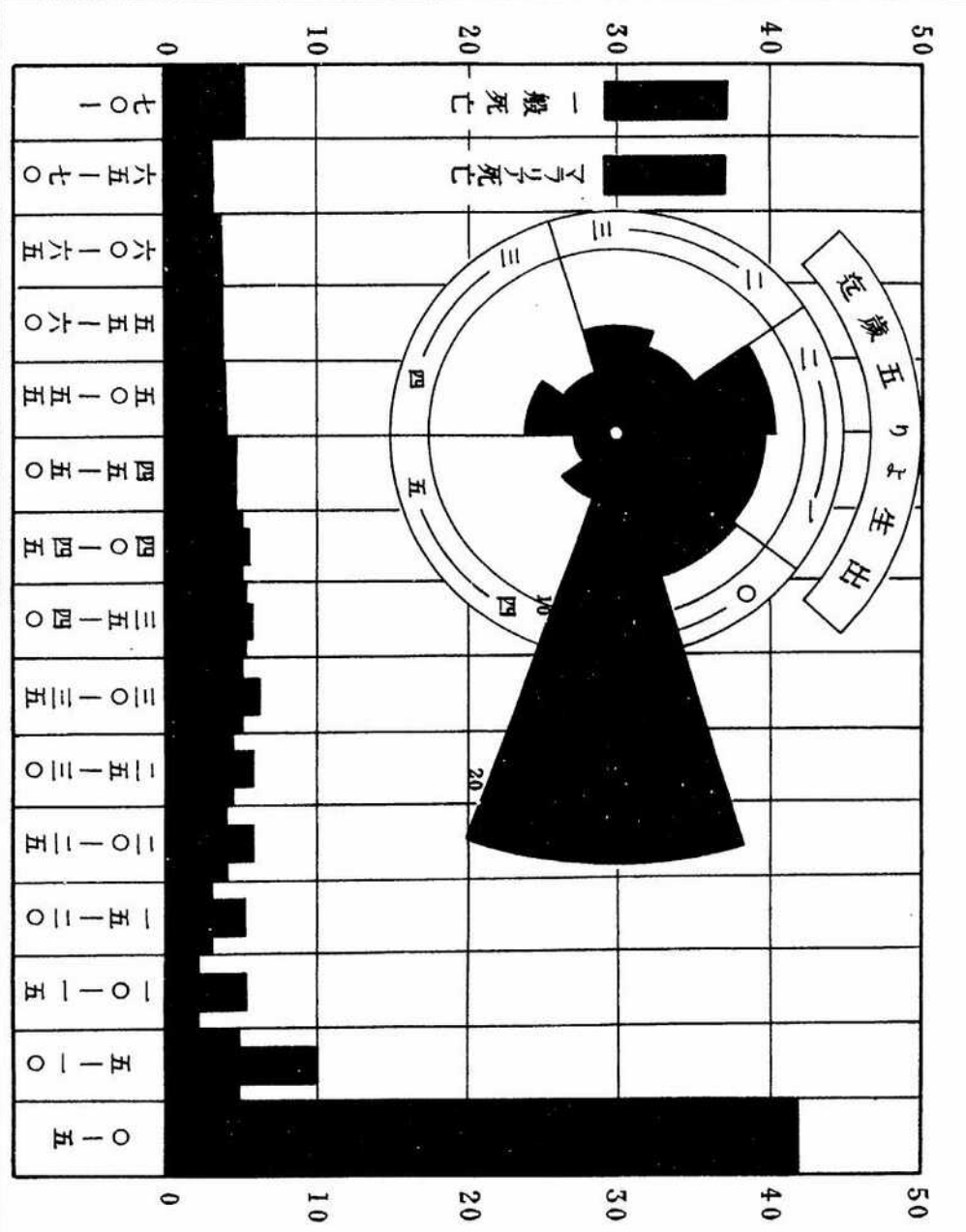


# 季節に依るマラリア死亡

一年を通して平均一日死亡を100としての割合

マラリア死亡と一般死亡との年齢別比較

(百分算)



## 臺灣マラリア統計(記述の部)

### 緒言

一 本調査の使命 マラリアは有形、無形に本島の保健衛生上至大の關係あるは勿論、惹ては殖産工業上大なる影響を及ぼしつゝあるは言を俟たざる所なり。抑々國家事業中に在りて衛生の施設より急なるはあらず、併かも風土病の對策の樹立に於て殊に然りと爲す。凡そマラリアは熱帶地帯に於ける通有の疾患なり、さりとて、常套的の防止策にては、苟も萬全を期し難し、須く島民か本病の苛殃より離脱すへき、對策を講せしむはあらず。便ち本病の防遏に關しては、既に、業に研鑽せられたりと謂はむも、百尺竿頭更に一步を進め其の病勢の推移を仔細に探討し、専ら數量的に事實を推究し、更に社會的、自然的の連鎖事象をも闡明し、以て萬遺漏なきを期せざるへからず。蓋し本編の使命たるや他なし、本病の歸趣を究明し、其の對策を企圖せんとする場合に於ける基礎材料たらしむるに外ならず。

由來、醫學は歷史上最古の科學にして、人類疾病の本源を極め、如何にして之を治癒すへきか、の實際方面を攻究するを以て主とせしか、科學の進運は峻々乎として其の畛域を擴め、從來個人の疾病を對象として研究せしもの、外、現今に於ては人類か一の團體として生活する上に呈露する所の各種の事實をして、其の集合的の事象に對合し、茲に其の因



果關係を考察して、以て疾病の豫防を達成せむとするに在り。即ち個人的醫學に對するに、群衆集團を對象とするところの、國家醫學の勃興なりと謂ふへし。

遮莫、本島に於けるマラリアの現勢や如何、既往を回顧するに、其の慘狀たるや、鬼哭啾々、轉た悽愴の感なき能はざりしか、現狀や昔日の比にあらずと雖も徒に樂觀視して、鼓腹擊壤を准すへきにあらずして前途尙望洋の感なき能わす。最近數年間の數字に就て、其の趨勢を窺知するに、好況を保続しつゝあるは事實なるも、妄りに現狀を過信し絶對的の對策を講せざれば、百年清河を俟つの悔あらんとす。將に攝るべきの途は、事實の歸嚮に直面して探尋し、其の對策には積極的施設の實現を提唱して歌文さる所以なり。

二 材料蒐集の範圍 本編記述の資料は、主として埋葬許可原簿に據りたるも、又人口動態統計を引照せしもの勘からず。其の材料蒐集に關する範圍を擧ぐれば

イ 時 調査の時期は最近五箇年の事實としたり、調査時期の餘りに永きに失する場合には現代と乖離するの嫌あるを以てなり、又兩三年の短期間なるに於ては或は常型を捕捉する能はざる弊あるを慮り、其の中庸五箇年間を以て考察上の價値を具備すへきものと爲せはなり。即ち大正六年より以降同十年迄を調査の時期とせり。但し對照上の關係によりては、遡つて數年前を參照せしもの、又は極めて最近の調査に依れる大正十一年、十二年分をも引用したるものあり。

ロ 處 マラリアを分量的に致査せむとするには、必らず地域による影響を觀察せざるへからず。即ち地方の異なるに従つて風雨乾濕等に相違あるを以て可及的小區域に分

割して調査する要あり。故に之を市、街、庄及區の地域に分割して表章せり。

ハ 性 男女兩性は是れ天然的の差異なる而已にあらず、後天的に於ても特異なる傾向あるを以て、疾病又は死亡統計上に在りては意義ある調査項目たるは否むへからざるへし。

ニ 種族 従前より土著の本島人と、領臺後母國より移住の内地人との種別に依り、著しき差異あるは又免れ難き事實なりとす。其の他種族中に外國人を認めたるも、其は主として對岸支那籍民にして本島種族と同一なるに依り、殆ど告朔の餼羊たる觀あるも、國籍の差異に依りて區分せしに過ぎず。然れども又微細の差異あるは、恰も内地に於ける内地人と、本島居住の内地人とに幾分の差異ある事實と髣髴たるものなり。

ホ 年齢 年齢と疾病、又は死亡の關係は、最も重要な項目なり。特にマラリア統計に在りては、如何なる年齢に影響ある乎、之を知らざるへからず。由來統計學上に於ては、小兒の死亡と生産級年齢者との死亡に關しては、例外なく問題として研究すべき所になれはなり。

ヘ 季節 季節に依りて、マラリア原蟲の消長に影響あるは言を俟たず。寒暖又は氣温の高低は、直ちに患者の多寡又は死の轉歸に影響あるを以て、季節と本病との關係は攷究上緊要の事項なるは勿論なり。併かも本病の胚子たる、原蟲の媒介者たるアノフェレス蚊族との關係も忽諾に附すへからざる事項なるを以て、同蚊族の發生期との對象は又肝要なりとす。

三 本記述の範圍 記述の事實たる統計は、既刊臺灣マラリア統計、原表の部を基礎としたる結果、其の範圍を出づる事なし。さり乍ら、最近の事實は人口動態統計に據りたるものあれども、統計以外の事實を解説したる事なし。

由來統計とは社會的決算を目的とする一種の會計法なり、故に正確に論せざるべからず、併かも社會的生活に屬する凡百の現象は多岐に流れ、新舊交代して間斷あることなく、其の間に何等法則なきやの觀あるも、所謂物あれば法ありに支配せられざるものなし。即ち社會的事實は個人的事實より構成せらるるものなるを以て、個人關係よりは寧ろ濃厚に散見せらるるに依り、實際の法則を忖度するに適すべきを知るべし。然れども統計の任務たるや終局の目的に向つて直に斷案を下すべきものにあらす、則ち事實探究の二法又は一種の要具たる性質なれば其の範圍を超えざる程度内に於て記述せむとするものなり。

### 第一章 マラリア死亡

#### 第一節 總 數

改隸以來、春風秋雨茲に三十年の星霜を閱し、本島は全く文化燦然たる樂土と化し、太平の餘澤を謳歌するの時、衛生方面に在りても、其の善處せる施設と、高唱せし改善とは、著しく民衆衛生觀念の向上となり、更始正に一新、逐年好果を齎らしつゝあり、彼の臺灣マラリアを聯想したる時代は今や過去に屬せりと謂ふべし。然れども本島の亞熱帶圈にある、地理的關係上、風土病として其の頭角を形はしつゝあるを觀は、未だ考慮を要すへ

き問題なるを痛感せざるを得ず。

従前の事實は姑く措き、最近大正六年より同十二年に至る七箇年間の一年平均マラリア死亡數を算出するに、八一〇九人に該り、就中六年の八九四〇人を最高とし、同七八九の三箇年は順次に遞減の歩調を持續し、甚だ好勢を呈せしか同十年に至り俄然前年に比し八〇三人を増加し、同十一年は更に八、九一六に上り、最近最高なりとせし同六年に匹儔したり。越えて同十二年には再轉大減少を告げ、前年に比し約二千を減して七、一六四人に低下したるは、實に領臺以來の好成績なり。

次に累年の死亡實數を擧げむ。

#### □大正六年乃至同十二年の現住人口、マラリア死亡及指數

年	現住人口	マラリア死亡	指數
大正六年	三、五六〇、〇五〇	八、九四〇	一〇〇
同七年	三、五八三、三九五	八、一九七	九二
同八年	三、六三〇、三八五	八、一一四	九一
同九年	三、六七三、二九〇	七、三三三	八二
同十年	三、七五一、二一七	八、一一六	九一
同十一年	三、八二一、五二八	八、九一六	一〇〇
同十二年	三、八九一、九二一	七、一六四	八〇

#### 第二節 改隸以來のマラリア死亡實數

改隸以來のマラリアに因する、死亡實數を觀るに、明治三十年迄は百事草創の時代とて醫院と公醫との取扱に係るものよみの記録に止まり、又翌三十一年は上記の外、警察官吏の調査せしものよみにして、是れ又全島マラリア死亡の全部を網羅せしものにあらす、亞て同三十二年、三年兩年間の記録も一見過少の觀あるも、過渡期に於ける調査なるを以て、參考に止めむとす。然して累年のマラリア死亡數を通過するに、其の一萬人を超えたるは三十五年乃至四十二年の八ヶ年間に在り。但し三十八年は九千人臺を示せり。爾來八千人臺に低下し、又七千、六千臺と引續き遞減して、逐歲好況を呈せしか、大正四年、五年の兩年に至り逆轉して一萬人臺に上れり。勿論現住人口との關係ありて、明治四十年代の一萬人と大正四年代の一萬人とは均しく同位にあるも人口の多寡より之を觀るときは前者の死亡率甚た高きは當然なり。左に領臺以來の現住人口對マラリア死亡と、之に配するに指數を以てせば次表の如し。

□改隸以來の現住人口對マラリア死亡及指數

年	現住人口	マラリア死亡	指數
明治三〇年	二、七九九、五四三	一、二三六	?
同 三一年	二、六九〇、〇九六	二、六七七	?
同 三二年	二、七五八、一六一	五、〇五五	?
同 三三年	二、八四〇、八七三	七、五二八	?
同 三四年	二、九二五、〇六四	九、四五二	一〇〇

同 三五年	三、〇〇〇、〇九六	一三、四四四	一四〇
同 三六年	三、〇二五、五六四	一三、五〇四	一四二
同 三七年	三、〇七三、六八三	一一、八八〇	一三六
同 三八年	三、〇四六、八五九	九、四四七	一〇〇
同 三九年	三、〇八〇、五四五	一〇、五八二	一一二
同 四〇年	三、一〇八、七二三	一一、七一五	一一四
同 四一年	三、一三二、三三五	一一、七四〇	一二四
同 四二年	三、一六八、二〇五	一〇、三三三	一〇九
同 四三年	三、二一九、一一一	九、一〇四	八八
同 四四年	三、二八八、八七九	七、九四九	八四
大正元年	三、五五三、九四三	六、九〇九	七三
同 二年	三、四一八、二七〇	六、五七二	七〇
同 三年	三、四六八、七一九	八、八八五	九四
同 四年	三、四八三、二六六	一三、三五〇	一四一
同 五年	三、五一〇、一一〇	一一、三四六	一二〇

### 第二章 マラリア死亡率

#### 第一節 總 數

本島に於ける一年平均のマラリア死亡實數は、最近大正六年より同十二年間に在りては八千人内外なる事は前述の如し、然らば人口千人に對して何人の死者あるかを觀察するに

二人一分九厘に該る。即ち人口四百五十六人に就き一人のマラリア死亡ある割合となり、奈何に本島のマラリアが真に恐怖すべき時代は経過せりとは謂へ、未だ防遏方法の緊張を要する新時代なるを痛感せざるべからず。

大正六年以来のマラリア死亡率を観察するに、六年は人口千中二人五分一厘即ち本島居住者四百人中一人はマラリアにて瘞れたる割合なりしか、次年には二人三分二厘に減少し、同九年迄は追年遞減し一人九分九厘てふ好成绩を上げたるも、同十年は一轉して二人一分六厘に増加し、翌十一年は更に遞増して二人三分三厘に上れり、超えて十二年には前年に比し著しく遞減して一人八分四厘に減少したるは領臺以来の好成績なる記録なりとす。

改隸當初の數字は未だ我文明醫師の本島人間に普遍せざる過渡期なるを以て、正確なる統計を得んこと困難なるを以て姑く之を埒外に措きて、先づ明治三十五年以来の人口千に對するマラリア死亡率を観察するに、三十五年は勿論最高率の四人四分八厘、即ち人口二百二十三人毎に一人のマラリア死亡ある割合を示し、當時の慘狀を追憶するに全く臺灣と謂へば、マラリアを聯想せざるべからざる状態なりしを首肯するを得へし。併して四十二年迄は千分の三臺に在りしか、大正元年は千分の一・九臺に減少し、同三、四年は逆轉して千分の二及三に増加し、同五年より又減少して好況を持續せしか、同十年に至り上述の如く再轉上昇したるを観るに、本病の死亡は五年を週期として後二箇年間宛上昇する傾向あるを認めたり。

今左に明治三十五年以降のマラリア死亡率と、之に配するに前年との比較及指數を表章

すべし。

□ マラリア死亡率

年	人口千に付マラリア死亡率	前年に比し減少せし率	指數(大正六年を100とす)
明治三十五年	四・四八	—	一七九
同 三十六年	四・四六	〇・〇二	一七八
同 三十七年	三・八七	〇・五九	一五四
同 三十八年	三・一〇	〇・七七	一二四
同 三十九年	△三・四四	△〇・三四	一三七
同 四〇年	△三・七七	△〇・三三	一五〇
同 四一年	三・七五	〇・〇二	一四九
同 四二年	三・二六	〇・四九	一三〇
同 四三年	二・八三	〇・四三	一一三
同 四四年	二・四二	〇・四一	九六
大正元年	一・九四	〇・四八	七八
同 二年	一・九二	〇・〇二	七七
同 三年	△二・五六	△〇・六四	一〇二
同 四年	△三・八三	△〇・二七	一五三
同 五年	三・二五	〇・六〇	一二九
同 六年	△二・五一	△〇・二八	一〇〇
同 七年	二・三三	〇・一九	九二
同 八年	二・二四	〇・〇八	八九

大正九年	一九九	〇・二五	七九
同 一〇年	△二・一六	△〇・一七	八六
同 一一年	△二・三三	△〇・一七	九二
同 一二年	一・八四	〇・四九	八三

△は前年に比し増加

第二 種族とマラリア死亡

一 内地人の状態 種族を通して全島總數のマラリア死亡率を通観するに、前叙の如く明治三十五年の最高記録に在りても、人口千人に付四人臺に止まりしか、之を内地人側より窺ふに明治三十二年は一・六二人を示して種族平均の三倍に昂り、三十三年は八・〇九人に減し、亞て三十九年には四・一五人に減し、而して四十三年以來は大正四年を除けば急轉直下一人臺に暴減し、爾來逐年規則正しく遞減を示し、大正七年以降は十一年を除けば一人に達せざる少數に過ぎず。蓋し内地人は比較的醫療機關の充實地に居住すといへ、個人衛生の自覺向上せるに基因せしものと謂はざるを得ず。然れども過渡期に於ける内地渡臺者は遠く母國を離れ、氣候の劇變、飲食物及び住居等全く相異し、從て心身に衰耗を來せるところに、マラリア原蟲の侵襲となれば病勢の熾烈となりて、終に死の轉歸を見るは寧ろ當然にして、土著の本島人に比較すへからざる多數を出すは其の所なりと謂ふへし。然るに現今の内地人死因としてのマラリアの位置や如何、明治三十九年迄は總死因中の五分の一以上を占め、死因中の隨一たりしマラリアは、第三位又は第四位に降り、今

や其の歸結として多衆内地人の腦裡よりマラリアは憚るへき疾患中より芟除せられたるやの觀を呈せり。

今内地人の累年現住人口と、マラリア死亡實數竝に同死亡率を擧ぐれば左掲の如し。

□内地人現住人口竝にマラリア死亡及同死亡率累年比較

年	現住人口	マラリア死亡	マラリア死亡率(人口千に付)
明治三〇年	一六、三二一	三九〇	?
同 三一年	二五、五八五	二八六	?
同 三二年	三三、一一〇	三八五	一一・六二
同 三三年	三七、九五四	三〇七	八・〇九
同 三四年	四二、一一六	二六四	六・二七
同 三五年	四七、〇六二	二四六	五・二三
同 三六年	五〇、九四四	二二二	四・三六
同 三七年	五三、三六五	二三四	四・三八
同 三八年	五九、六一八	一五〇	?
同 三九年	七一、〇四〇	二九五	四・一五
同 四〇年	七七、九二五	二四四	三・一三
同 四一年	八三、三二九	一八三	二・二〇
同 四二年	八九、六九六	一九七	二・二〇
同 四三年	九八、〇四八	一八〇	一・八四

明治四十四年	一〇九、七八六	一七八	一六二
大正元年	一二二、七九三	一九五	一五九
同二年	一三三、九三七	一七八	一三三
同三年	一四一、八三五	二一六	一五三
同四年	一三七、二二九	二八五	二〇八
同五年	一四二、四五二	二四八	一七四
同六年	一四五、三三二	一六四	一三三
同七年	一四八、八三一	二二一	〇八一
同八年	一五三、三三〇	一三二	〇八六
同九年	一六六、六二一	一六一	〇九七
同〇年	一七四、六八二	一七三	〇九九
同一年	一七七、九五三	一八七	一〇五
同二年	一八一、八四七	二三三	〇七三

二 本島人の状態 本島に於ける、人口構成は本島人を以て主成分子とすること勿論なり、即ち大正十二年の事實に依れば内地人は四分七厘、外國人(主として支那人)は僅かに八厘に過ぎざるを以て、殘餘の九割四分五厘は凡て本島人なり。故に人口關係の現象は總數と本島人との傾向は略は同一なるに歸着す。便ちマラリア關係も總數に於て述べたる如く、領臺當初に對比し約半減せしに止まりて、其の減少率の遅々たるは内地人に比倫すべくもあらず。之を數年前に較すれば、衛生上の施設に伴ひ、又は半強制的改善に促され逐次減少を來せりと雖も、尙千分の二人臺に在りて、最近大正十二年は最も好成绩を挙げた

るも、未だ一・九人を示して漸く二人臺を削りたるを謂ふに過ぎず。恰も内地人の明治四十三年頃の狀態に伯仲し、之を同年の内地人〇・七三人と比較するに一・一七人の著差を存せり。斯くの如く風土病たるマラリアの威力は逼塞したるものにあらす。是れ常に衛生界の問題のみにあらずして、實に本島施政の大綱目たらずして何ぞ。本病の防遏に就ては其の地域を擴大し、一面個人的衛生觀念を徹底的に涵養せしむるを喫緊事とす。左に本島人の現在人口並にマラリア死亡及同死亡率率累年比較

□本島人の現任人口並にマラリア死亡及同死亡率率累年比較

明治三〇年	現任人口	マラリア死亡	マラリア死亡率(人口千に付)
同三一年	二、七八一、三三二	八四六	〇・三〇
同三二年	二、六六四、五一	二、三九一	〇・九〇
同三三年	二、七二五、〇四一	四、六七〇	一・七一
同三四年	二、七〇七、三三二	七、三二一	二・六八
同三五年	二、七八八、六三三	九、一八八	三・二九
同三六年	二、八五五、〇八四	一三、一九八	四・六二
同三七年	二、八七一、六四一	一三、二八二	四・六三
同三八年	二、九一五、九八四	一一、六四六	三・九九
同三九年	二、九七九、〇一八	九、二九七	三・一一
同四〇年	二、九九九、二一四	一〇、二六七	三・四二
同四一年	三、〇一九、四〇二	一一、四四一	三・七七
同四二年	三、〇三六、八五五	一一、五一九	三・七九

明治四十二年	三、〇六四、九一七	一〇、一一五	三、三三〇
同 四三年	三、一〇六、二二三	八、九〇一	二、八七
同 四四年	三、一六二、七八七	七、七五三	二、四五
大正元年	三、二二三、二二一	六、六八一	二、〇八
同 二年	三、二六五、一六九	六、三七九	一、九五
同 三年	三、三〇七、三〇二	八、六四〇	二、六一
同 四年	三、三二七、八二二	一三、〇四五	三、九二
同 五年	三、三四九、〇三五	一一、〇六九	三、三一
同 六年	三、三九五、六〇五	八、七六三	二、五八
同 七年	三、四一三、四一四	八、〇六七	二、三六
同 八年	三、四五四、一六七	七、九六六	二、三一
同 九年	三、四八一、八三三	七、一三四	二、〇五
同 一〇年	三、五四八、〇五三	七、九〇二	二、二三
同 一一年	三、六一四、二〇七	八、六八五	二、四〇
同 一二年	三、六七九、三七一	七、〇〇五	一、九〇

第三章 總死因より觀たるマラリア

第一總數

本島に於ける最近七箇年間の死亡實數を觀察するに、一年平均死亡數は一〇、一七二七人にして、就中大正七年はかの暴威を逞せし流行性感胃の影響は最も甚大にして、其の結果

同年は最高死亡記録たる十二萬四千を算ふるの慘狀を呈露し平均位を突破すること約二萬五千に及へり、亞いて大正九年の約十二萬を以て最高第二位とす。最寡なるは同十二年の八萬四千なりとす。然してマラリアに因する死亡か此の一般死亡との間に處して幾何なりやを考察するに、第一章に於て述べたるか如く一年平均マラリア死亡數は八、一〇九人にし

て、總死亡の八分に該れり。

最近七箇年の事實左表の如し。

□大正六年乃至同十二年の總死亡數にマラリア死亡及百分比

大正六年	總死亡	マラリア死亡	總死亡百中
同 七年	九七、九四九	八、九四〇	九・一
同 八年	一二四、六七七	八、一九七	六・六
同 九年	九八、九九一	八、一一四	八・二
同 一〇年	一一九、四七七	七、三二三	六・五
同 一一年	九一、五一三	八、一一六	七・七
同 一二年	九五、三七二	八、九一六	九・三
平均	八四、一〇八	七、一六四	八・五
平均	一〇一、七二七	八、一〇九	八・〇

第二 總死亡原因とマラリア

一 總數 明治四十四年迄は例年マラリア死亡は、總死因中の第一位を占め來りしか、

大正元年乃至同三年は乾坤一擲第二位に下りて、下痢腸炎第一位に代り、同四年、五年の兩年には又反撥してマラリア第一位に復し、同六年以降は第二位又は第三位に墜ち、爾來第一位に座せし事なし。

大正六年以降七箇年間の死因としてはマラリア第一位に復せし事なく、而してマラリアを凌駕せしは肺炎、氣管支肺炎(以下單に肺炎と稱す)、下痢腸炎(以下單に腸炎と稱す)及流行性感胃の三死因なり。併かも肺炎は六年以來累年第一位を占め、マラリア第三位に降りし年に在りては腸炎第二位となれり、斯くしてマラリアは肺炎の次に第二位を占むるか、肺炎及腸炎の下に第三位を占めたり。但し大正九年にはマラリア腸炎を伏して第三位を墨守し、第二位は流行性感胃となり、腸炎は本年よりマラリア以下に墜下し、茲に於てか常型に變異を認むるに到れり。

大正六年以降の事實を左に表示する所あるへし。

□大正六年乃至同十二年に於けるマラリア死亡の位置(括弧中の数字は百分率)

年	第一位	第二位	第三位
大正六年	肺炎及氣管支肺炎(一〇・五)	マラリア(九・九)	
同七年	同 (二七・八)	下痢及腸炎(八・〇)	マラリア(六・七)
同八年	同 (二二・二)	下痢及腸炎(八・二)	同 (八・二)
同九年	同 (二〇・〇)	流行性感胃(八・〇)	同 (六・五)
同十年	同 (一五・二)	マラリア(七・七)	

同十一年	同 (一四・六)	同 (九・三)	
同十二年	同 (一四・五)	下痢及腸炎(二・六)	マラリア(八・五)

二 種族に依る差異 本島に在りて疾病の種族に依りて著しき偏差を示すものに二あり。其の一は急性傳染病中の腸チフスと、其の他の一は地方病としてのマラリアなりとす。

次に種族別より考察したるマラリアと總死因との關係を叙述せむとす。

イ 内地人の状態 マラリアの總死因中の順位を内地人に就て之を觀るに、明治四十三年迄は第一位を獨占せしか、同四十四年以降大正三年に至る四箇年間は腸炎第一位を占め、マラリア第二位となれり、亞て大正四年より同六年の三箇年間はマラリア又逆勢を辿りて第一位に復歸せり。爾來第二位(大正八年)より第六位(大正七年)の間を彷徨す。

如上の事實を觀察するに、明治四十四年より大正三年に至る四箇年間のマラリア死亡が腸炎に一蹴せられ、第二位にあるは頗る考慮を要すへし。即ち領臺以來大正六年迄は右の四箇年を除けば、マラリア第一位なるに其の中間に在りて、而かも四箇年間繼續して腸炎を第一とするは、容疑なき能はざるも之を糾さざることをせり。

最近大正十二年の状態を觀るに、マラリアは總死亡の六・三%を示して第四位なり。之を第一位の肺結核に比して三・八%低く、腸炎に比して二・六%、又肺炎に較へ〇・八%低し。而してマラリアの次位にある先天性弱質及幼兒に固有なる疾患に比するに、僅かに〇・三%の差あるに過ぎず。如上の推移より豫測するに、マラリアは爾來更に下降する傾向にあるものと謂ふへし。次に内地人の死因中、マラリア迄の順位を表章すへ



し。

□内地人總死口中マラリア迄の順位(括弧中は百分率)

年	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位	第六位
明治四三年迄	マラリア					
同 四四年	下痢腸炎(一〇・五)	マラリア(一〇・五)				
大正元年	同 (一〇・三)	同 (一〇・一)				
同 二年	同 (一一・五)	同 (八・七)				
同 三年	同 (一〇・八)	同 (一〇・一)				
同 四年	マラリア(一一・二)					
同 五年	同 (一一・〇)					
同 六年	同 (九・三)					
同 七年	肺炎及氣管支肺炎(五・八)	流行性感冒(七・八)	肺結核(六・二)	脚氣(六・〇)	腸膜炎(五・九)	マラリア(四・八)
同 八年	同 (二・〇)	マラリア(六・九)				
同 九年	流行性感冒(六・二)	肺炎及氣管支肺炎(三・五)	肺結核(五・九)	マラリア(五・八)		
同 一〇年	肺炎及氣管支肺炎(一〇・〇)	肺結核(八・二)	マラリア(七・八)			
同 一一年	肺結核(九・四)	肺炎及氣管支肺炎(八・二)	同 (七・九)			
同 一二年	同 (一〇・二)	下痢腸炎(八・九)	肺炎及氣管支肺炎(七・二)	マラリア(六・三)		

ロ 本島人の状態 本島人の死因としては、大正元年迄はマラリア第一位を固守せしか、同二、三年の兩年は腸炎第一位となりてマラリア第二位に下り、次に大正四年、五年は内地人の趨勢と同しくマラリア又捲頭して第一位を占め、爾來同六年以降は第二位にあらされは第三位として優勢を張り、曾て第四位に下りたる事なし。

之を最近大正十二年の事實に徴するに、肺炎、腸炎に亞て第三位を維持し、第二位の腸炎に比し三・一の低く、マラリアの次に位する肺結核に較へ一・五の著差あれば、暫らくは第三位を動かさるものと信せんとす。其の詳細は左表の如し。

□本島人總死口中マラリア迄の順位(括弧中は百分率)

年	第一位	第二位	第三位
大正元年	マラリア(八・一)	マラリア(七・六)	
同 二年	下痢腸炎(一〇・三)	同 (九・一)	
同 三年	同 (一〇・二)		
同 四年	マラリア(一一・九)		
同 五年	同 (一一・二)		
同 六年	肺炎及氣管支肺炎(一〇・六)	マラリア(一〇・〇)	
同 七年	同 (七・九)	下痢腸炎(八・一)	マラリア(六・七)
同 八年	同 (一一・九)	同 (八・三)	同 (八・二)
同 九年	同 (九・五)	流行性感冒(七・八)	同 (六・五)
同 一〇年	同 (一五・五)	マラリア(七・七)	
同 一一年	同 (一四・九)	同 (九・四)	
同 一二年	同 (一四・七)	下痢腸炎(一・七)	マラリア(八・六)

ハ 外國人の状態 明治三十九年以來の外國人の總死因中に於けるマラリアの順位を観察するに、第一位を占めたるは明治四十一年、同四十三年及び大正元年の三箇年にし、第二位を示したるは同三十九年、四十年及四十二年の三箇年とし、其他は第三位よ

り第六位の間に在り。而して外國人の死因順位は犬牙錯綜の觀ありて常型に乏じきも、其の大勢を總括するに(一)マラリア死亡は大正元年迄は一〇%以上を示したるも、大正二年以降は九・二%より三・七%の間に在りて一〇%に上らず(二)マラリアを凌駕せし死因は例年肺炎、肺結核の二類にして、年に依り上記の外に腸炎、脚氣、胃の疾患等の超過せる傾向あり(三)大正七年以降は肺炎、肺結核、マラリアの順位にして其の間著しき較差を認むるを以て、今後の順位も流行性の疾患等なき限りは之をして常型と見做し得へし。但しマラリアは幾分低下すべき傾向あり。

左に明治三十九年以降に於ける、總死亡中のマラリア死亡の順位と其の百分比を表章せむとす。

□外國人の總死因中に於けるマラリアの順位(括弧中の數字は百分比率)

年	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位	第六位
明治三十九年	肺結核(二八・九)	マラリア(二五・八)				
同 四〇年	ヘマト(二〇・五)	同 (一五・〇)				
同 四一年	マラリア(二〇・〇)					
同 四二年	肺結核(一四・四)	マラリア(九・五)				
同 四三年	マラリア(一三・三)					
同 四四年	肺結核(一四・〇)	肺炎(八・八)	肺炎(八・〇)	マラリア(七・六)		
大正元年	マラリア(一一・九)					
同 二年	肺炎(一一・七)	肺炎(一〇・三)	肺結核(七・五)	マラリア(六・〇)		

同 三年	肺結核(一三・三)	肺炎(一〇・五)	肺炎(八・六)	同 (七・六)
同 四年	同 (一四・九)	同 (一〇・七)	同 (八・二)	胃の疾患(五・九)
同 五年	肺炎(一五・七)	肺結核(九・三)	マラリア(九・二)	
同 六年	肺結核(一五・〇)	肺炎(一四・七)	同 (六・五)	
同 七年	肺炎(一一・〇)	肺結核(一一・八)	肺炎(四・六)	胃の疾患(三・九)
同 八年	コレラ(一四・〇)	肺炎(一四・〇)	肺結核(一一・一)	マラリア(五・九)
同 九年	肺炎(一三・三)	肺結核(一一・四)	流行性感冒(六・五)	同 (五・八)
同 一〇年	同 (一八・九)	同 (一一・三)	マラリア(八・四)	
同 一一年	同 (一五・三)	同 (一〇・七)	同 (七・七)	
同 一二年	同 (一八・八)	同 (一四・〇)	肺炎(五・七)	肺炎(五・七)

第四章 マラリアの分布

マラリア分布状態の考究は最も留意すべき緊要事項なり、而してマラリアの分布状態を闡明せむとせば、患者統計に頼るを本則とするも、同統計は資料として完備せしものなく、又患者統計なるものは單位觀察に於て甚だ交錯する弊あり、即ちマラリアは間歇熱なるか、故に、發病より治癒迄の期間は服薬日數に依るか、或は事實マラリア症状の現出せし日數を謂ふ歟、其の計算に於て他の一般症状と異なるあり、或は延日數を計上するに於ても頗る複雑なるを免れず、寧ろ歸納的に反面死亡統計より考察してマラリアの分布状態を叙述せむとす。但し死亡統計を資料としたる關係上、以下述ふるに當り死亡の饒多なる地方を

マラリアの濃厚地とし、其の死亡の寡少なる地方を鮮少地とすへし。マラリアと地理的關係との差異を、州廳別、郡市支廳別及び街庄區別に略叙せむ。

### 第一 州廳別とマラリア

マラリアは州廳に依りて、著しき差異を認めたり。即ち地方を異にするに従つて、自然界の現象に支配せられ、其の分布の度合に厚薄の影響あるや論なし。

一 總數、最近大正六年より同十二年に至る七箇年間の全島一年平均のマラリア死亡實數は八一〇九人にして、若し之をベツテンコーフェル氏の罹病率推算 $\parallel$ 死亡數に三十四を乘したる積 $\parallel$ をして信なりとせば、我が臺灣に於ける一年平均マラリア患者は無慮二七五七〇〇人を算すへき筈なり。之より一箇月の平均患者數を算出するに二三、〇〇〇人に該り更に一日平均患者を觀るに七六〇〇人を得へし。而して一人當り患者か三日間宛熱發の状態にありとせむか、一年を通して平均一日に約二、三〇〇人宛の病患者となる割合となりて、獨り保健衛生上のみの問題に止まらず、産業界の生産能力に迨はず影響の甚大なるに驚かざるへからず。

今州廳別マラリア死亡實數の累年比較を表示せむに次の如し。

□州廳別マラリア死亡實數累年比較

州	廳	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	以上七ヶ 年平均
---	---	------	------	------	------	------	-------	-------	-------------

全島	八、四〇〇	八、七〇〇	八、一〇〇	七、三〇〇	八、一〇〇	八、二〇〇	七、五〇〇	八、一〇〇	八、一〇〇
臺北州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
新竹州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
臺中州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
臺南州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
高雄州	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
臺東廳	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
花蓮港廳	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
澎湖廳	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
金門島	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
馬祖島	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

二 死亡率 如上七箇年間の一年平均マラリア死亡率を算出するに、人口千に付二・二人に該れり、即ち本島居住者は四五〇人毎にマラリアにて殞るゝもの一人宛ある割合となりて、如何に憎惡なる地方病なる歟を察知する事を得へし。

而してマラリア死亡の首位を占むるは花蓮港廳の八・四人（人口千に付、以下同し）にして、同廳下に於ける住民は百十九人毎に一人のマラリア死亡に該る割合なり。亞て臺南州の三・四人、高雄州の三・一人及臺東廳の二・三人の順位なり。以上二州二廳は全島平均位より高率なるを以てマラリア地方と稱せん歟。次に一人に達せざる地方あり、今之を非マラリア地方と稱せん歟。即ち新竹及臺北の兩州之に屬す。即ち前者は〇・九一人の最寡を示し、後者は〇・九七人にて新竹州と軒輊なし。以上二州の非マラリア地方は最多花蓮港廳に比し、迥かに低下して約十分の一に過ぎず。亞て臺中州は全島平均より約〇・五人低く、非マラリア地方の約倍數を表はすを以て、之をマラリア中位地方と謂はむとす。

大正六年乃至同十二年の七箇年間に於けるマラリア死亡率を州廳別に表章するに次の如し。

□最近七箇年間に於ける州廳別マラリア死亡率 (人口千に付)

地 方	大正六年							大正七年							大正八年							大正九年							大正十年							大正十一年							大正十二年							平 均
	花蓮港廳	臺南州	高雄州	臺東州	中位地方(臺中州)	非マラリア地方(臺北州)	平 均	花蓮港廳	臺南州	高雄州	臺東州	中位地方(臺中州)	非マラリア地方(臺北州)	平 均	花蓮港廳	臺南州	高雄州	臺東州	中位地方(臺中州)	非マラリア地方(臺北州)	平 均	花蓮港廳	臺南州	高雄州	臺東州	中位地方(臺中州)	非マラリア地方(臺北州)	平 均	花蓮港廳	臺南州	高雄州	臺東州	中位地方(臺中州)	非マラリア地方(臺北州)	平 均															
大正六年	五〇	三九	四六	二五	三三	〇九	二六	五八	三五	四〇	二〇	〇九	二五	二二	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
大正七年	七八	三五	四〇	二〇	一八	〇九	二五	七六	三五	三〇	一七	〇九	二五	二二	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
大正八年	七五	三五	四〇	二〇	一七	〇九	二五	七五	三五	三〇	一七	〇九	二五	二二	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
大正九年	二二	二七	三六	二〇	一六	〇九	二五	二二	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
大正十年	一四六	二八	三九	一九	一六	〇九	二五	一四六	二八	三九	一九	一六	〇九	二〇	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
大正十一年	七八	二八	三七	二七	二七	二二	二五	七八	二八	三七	二七	二二	二五	二二	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
大正十二年	四六	二九	三九	二四	二二	〇九	二五	四六	二九	三九	二四	二二	〇九	二〇	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															
平 均	八四	三三	四一	二二	二二	〇九	二五	八四	三三	四一	二二	二二	〇九	二〇	二五	二七	二九	一六	一七	〇九	二〇	二五	二七	二八	二八	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七															

三 累年比較 前掲の最近七箇年間に於ける、州廳別マラリア死亡率の趨勢を觀るに全島平均に在りては大正六年の人口千中二・六人を最多とし、爾來減少を告げしも大正十一年の兩年僅かに上昇を認め、十一年の微勝は七年と同率二・三人を示せしも、翌十二年は前年に比し〇・五人の減少を來たして一・八人となれり。斯くしてマラリアは最近七箇年間殆ど平衡を維持せり、數年に亘り流行消長の趨勢甚だ微弱なるは本病の特性なる乎、將た又防遏上好成績を擧げざるに基因するか。翻つて最近七箇年間の一般總死亡率を觀るに、大正七年と同九年とは世界的に大流行せし流行性感冒の脅威を受け、殞死するもの踵

を接ぐの慘狀を呈し、爲めに本島の死亡率に最高記録を印せり。即ち本島の死亡率は常型として二〇人臺にありしか、一躍して三二・五人(九年)と三四・八人(七年)を示し、迺かに三〇人臺を突破せり。亞いて同十年には再轉して常型に復し二四・四人に崩退する等、最近の總死亡率は一張一弛常なき錯綜の状態にあり。然るにマラリアの死亡率は、前叙の如く起伏の距離僅かに〇・八人に過ぎず。就中大正六年を除きて爾後の最近六箇年を通觀するに、其の間隔更に短減して〇・五人を認むるのみ。斯の如く最近の總死亡率は高下の著差あるにも拘らず、マラリアの常に平衡なる狀態を持續するは、豫防上に於て殊に注目すべき要項なりとすへし。

□總死亡とマラリア死亡の兩率比較を表章せむとす。

種 別	大正六年		大正七年		大正八年		大正九年		大正十年		大正十一年		大正十二年		平 均
	死亡	マラリア死亡	死亡	マラリア死亡	死亡	マラリア死亡	死亡	マラリア死亡	死亡	マラリア死亡	死亡	マラリア死亡	死亡	マラリア死亡	
總死亡	二六	二六	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	
マラリア死亡	二六	二六	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	
前年との差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
前年との差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
前年との差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

前表の如く全島のマラリア死亡率を觀察するに、各前年との較差は〇・二人の平均位にして此の間何等の逕庭なく十年一日の如き觀あるも、若し之を州廳別に考察するに於ては、全島觀の平衡なるに相反し迂餘曲折の存するを知るべきなり。

四 總死亡百中の割合 總死亡中に包含せらるるマラリア死亡者は幾何なるやを考察するは、敢て徒爾ならざるを感ず。即ちマラリア死亡の分量を測定するに利便あればなり。今制度改正後に於ける、四箇年間の資料に依りて之を観察するに、先づ全島平均位を窺はるに總死亡中の七分九厘は實にマラリアにて殞れたるものなり。而してマラリア以上に其の割合の高率なるものを探るに唯肺炎の一種あるのみ、肺炎の死亡率は甚だ高率にしてマラリアの倍数を示し、總死亡中の割合は一割六分一厘に該れり。之を譬ふるに、先づ一年間に死者百人ありとせよ、其中肺炎にて死亡するもの十六人、マラリアにて死亡するもの八人となり、總死亡の四分の一は肺炎とマラリアにて死亡するを語るものなり。

マラリア死亡の百分率を州別に見ると、マラリア地方と非マラリア地方との色彩を一層鮮明に標示せらる。花蓮港島の同上四箇年平均は二八・〇%に該り、總死者の四分の一は悪疫マラリアの魔手に擒捉せられたるを知るべきなり。亞て多數なるは臺南州なるも、最多花蓮港島に較ぶれば其の半にも達せず、然れども、之を全島平均に比すれば三物高く一〇・八%を示せり。高雄州は八・九%を占め、全島平均より一物昂し、最低位にあるは新竹州の四・四%を首とし、臺北州の四・六%之に亞き、マラリア地方中の臺東縣は五・二%を示して順位を爲す。由來、臺東縣のマラリア死亡率の低位にあるは、同縣は佳蕃族部落に屬し、特に衛生機關としての醫師の數も僅かに十五名、(大正十二年末の調査)に過ぎざるに依り、醫師一人當り人口を算出するに二七六四人にして、其の割合最も高き新竹州の二、四八八人に對比するに大なる差懸あり。且つ同縣は單に人口よりのみ觀察を下すは

妥當を闕くを覺れず、更に地域と文化との關係を考慮するの要あるは勿論なり。即ち同縣に於ける死者の多くは主治醫なき結果、死因病名不詳として處理せらるるの已むなき状態にあればなり。故に總死亡中より不明の疾患を抽出して其の分量を見るに、大正九年は七・四%、同十年は七九・一%、同十一年は七四・三%、又翌十二年には六一・七%を示して、累年總死亡の約八割は病名不詳の占據に委せり。かく病名不詳として非らるる約八割の中には、未だ夥しきマラリア死者あるは必定なり。併かも病名不詳を除きたる、爾餘の百分の二十中に於て、マラリア死亡の五%以上を占むを觀るに迫りて、茲に初めて的確にマラリア死亡率としては比較的低位にあるも事實は二十分の五即ち全死亡數の四分の一なるを首肯し得るなり。上記の如く臺東縣のマラリアの比率低きは、同縣のマラリア數の寡少なるを語るものにあらず、住民關係其の他の衛生設備等に依り考察を遂ぐるを要す。今各州別總死亡百中のマラリア死亡の割合を掲載せむとす。

□總死亡百中のマラリア死亡の割合

州別	大正九年	同十年	同十一年	同十二年	平均
臺北州	三八	四四	五三	四九	四六
新竹州	三四	四四	五六	四四	四四
臺中州	五三	七〇	八四	八〇	七〇
臺南州	八五	二〇九	二三五	二二五	二〇八
高雄州	八六	七八	九四	一〇〇	八九

臺東	五七	三七	四六	七六	五二
花蓮港	二七・五	三四・一	二五・六	二二・九	二八・〇
全島	六・五	七・七	九・三	八・五	七・九

五 最多死因をマラリアとする地方 最多死因をマラリアとする地方は、本島東海岸の花蓮港及臺東の兩廳なりとす。而して花蓮港廳の大正九年以降同十二年の四箇年平均總死亡中の割合は二八・〇%の多數を示せること前述の如し。又臺東廳の同上平均は五・二%の低率なるも、是れまた前叙の如く病名不詳の甚だ多數なる結果にして其の割合より想像すれば、一見マラリア少數地の如き觀あるも、事實は之に反しマラリアを以て最多死因とする所なればなり。

六 最多死因の第二位をマラリアとする地方 本項に屬するは臺南及高雄の兩州にして前者は一〇・八%、後者は八・九%に該り、第一位は孰れも肺炎なりとす。併して全島平均も此の兩州に同しく第一位を肺炎の一六・一%とし、第二位をマラリアの七・九%とせり。

七 マラリアを最多死因の第三位以上とする地方 マラリアを第三位とする地方に臺中州七・〇%あり、第四位とする地方には臺北州四・六%、第五位にあるは新竹州(四・四%)なり。

而してマラリアを凌駕せし死因を擧ぐれば肺炎、胃の疾患、肺結核、小兒の瘧疾及腸炎の五種にして、肺炎は全島均等に第一位とし、胃の疾患の第二位なるは臺北、新竹の兩州な

り。肺結核を第二位とするは臺中州にして、臺北州は第三位とせり。小兒の瘧疾を第三位とし、又腸炎を第四位とするは新竹州なりとす。今其の詳細を表示すれば次の如し。

□總死亡中のマラリア迄の順位

州廳及順位	大正九年		大正一〇年		大正一一年		大正一二年		平均
	病名	實數百分比	病名	實數百分比	病名	實數百分比	病名	實數百分比	
臺北州	第一位	肺炎 三三・三	第一位	肺炎 三六・七	第一位	肺炎 三三・六	第一位	肺炎 三三・七	肺炎 三三・三
	第二位	流行性感冒 二六・五	第二位	流行性感冒 二五・七	第二位	流行性感冒 二五・五	第二位	流行性感冒 二五・五	流行性感冒 二五・五
	第三位	胃ノ疾患 一四・七	第三位	胃ノ疾患 一四・六	第三位	胃ノ疾患 一四・六	第三位	胃ノ疾患 一四・六	胃ノ疾患 一四・六
	第四位	肺結核 一三・六	第四位	肺結核 一三・六	第四位	肺結核 一三・六	第四位	肺結核 一三・六	肺結核 一三・六
	第五位	小兒ノ瘧疾 一三・七	第五位	小兒ノ瘧疾 一三・七	第五位	小兒ノ瘧疾 一三・七	第五位	小兒ノ瘧疾 一三・七	小兒ノ瘧疾 一三・七
	第六位	老衰 一三・八	第六位	老衰 一三・八	第六位	老衰 一三・八	第六位	老衰 一三・八	老衰 一三・八
	第七位	マラリア 一三・八	第七位	マラリア 一三・八	第七位	マラリア 一三・八	第七位	マラリア 一三・八	マラリア 一三・八
	第八位	マラリア 一三・八	第八位	マラリア 一三・八	第八位	マラリア 一三・八	第八位	マラリア 一三・八	マラリア 一三・八
新竹州	第一位	肺炎 一三・九	第一位	肺炎 一三・九	第一位	肺炎 一三・九	第一位	肺炎 一三・九	肺炎 一三・九
	第二位	流行性感冒 一三・九	第二位	流行性感冒 一三・九	第二位	流行性感冒 一三・九	第二位	流行性感冒 一三・九	流行性感冒 一三・九
	第三位	胃ノ疾患 一三・九	第三位	胃ノ疾患 一三・九	第三位	胃ノ疾患 一三・九	第三位	胃ノ疾患 一三・九	胃ノ疾患 一三・九
	第四位	小兒ノ瘧疾 一三・九	第四位	小兒ノ瘧疾 一三・九	第四位	小兒ノ瘧疾 一三・九	第四位	小兒ノ瘧疾 一三・九	小兒ノ瘧疾 一三・九
	第五位	慢性氣管支炎 一三・九	第五位	慢性氣管支炎 一三・九	第五位	慢性氣管支炎 一三・九	第五位	慢性氣管支炎 一三・九	慢性氣管支炎 一三・九
	第六位	老衰 一三・九	第六位	老衰 一三・九	第六位	老衰 一三・九	第六位	老衰 一三・九	老衰 一三・九
	第七位	肺炎 一三・九	第七位	肺炎 一三・九	第七位	肺炎 一三・九	第七位	肺炎 一三・九	肺炎 一三・九
	第八位	マラリア 一三・九	第八位	マラリア 一三・九	第八位	マラリア 一三・九	第八位	マラリア 一三・九	マラリア 一三・九

平均	臺東廳			臺南州			高雄州			臺中州		
	第一位	第二位	第三位	第一位	第二位	第三位	第一位	第二位	第三位	第一位	第二位	第三位
第一位 流行性感冒 六〇七	第一位 肺 六六四	第二位 流行性感冒 六〇七	第三位 マラリア 七四七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 流行性感冒 三〇三	第二位 胃ノ疾患 一六六	第三位 胃ノ疾患 一六六
第二位 流行性感冒 六〇七	第一位 マラリア 七四七	第二位 流行性感冒 六〇七	第三位 マラリア 七四七	第一位 マラリア 七四七	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 マラリア 七四七	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第四位 肺 結核 一四七	第五位 マラリア 一七三	第六位 肺 結核 一四七
第三位 マラリア 七四七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第七位 胃ノ疾患 一六六	第八位 胃ノ疾患 一六六	第九位 胃ノ疾患 一六六
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第十位 肺 結核 一四七	第十一位 肺 結核 一四七	第十二位 肺 結核 一四七
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第十三位 肺 結核 一四七	第十四位 肺 結核 一四七	第十五位 肺 結核 一四七
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第十六位 肺 結核 一四七	第十七位 肺 結核 一四七	第十八位 肺 結核 一四七
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第十九位 肺 結核 一四七	第二十位 肺 結核 一四七	第二十一位 肺 結核 一四七
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第二十二位 肺 結核 一四七	第二十三位 肺 結核 一四七	第二十四位 肺 結核 一四七
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第二十五位 肺 結核 一四七	第二十六位 肺 結核 一四七	第二十七位 肺 結核 一四七
	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第一位 肺 六六四	第二位 マラリア 二五七	第三位 マラリア 二五七	第二十八位 肺 結核 一四七	第二十九位 肺 結核 一四七	第三十位 肺 結核 一四七

第二 郡、支廳及市とマラリア

州廳別の分布状態は、前節に其の概要を叙へたり。されど同州、同廳は在りても地勢異なり、或は風土異なるか爲め、或は本病の原蟲を媒介する蚊族の多少に依りて、マラリア

の分布状態に影響あるは當然なり。故に前節の州廳別に於てマラリア地方と稱せし中に非マラリア地域の存在するあり、又州廳別を單位として觀たる非マラリア地方中にもマラリアの濃厚地あるは勿論なり。斯くの如く分布状態は相交错し、甚た複雑にして一見區別し難き觀ありと雖も、仔細に之を吟味すれば、其の間に劃然たる分岐點を發見すべし。今や一步を進めて郡、市及支廳別マラリアの多寡を劃せむとす。

一 人口千に對するマラリア死亡の割合

全島各郡、市及支廳の死因は區々に亘り、或る種に屬する疾患は全く之を缺如せるもの多々ありと雖も、而かもマラリアの死因に對しては唯厚薄の度を異にこそすれ各地方とも認めざるはなし。今之を詳述せむに。

イ 全島 人口千に對するマラリア死亡の割合を窺ふに、全島中最低位にあるは新領土の政都たる臺北市の〇・二人なり。亞て大溪、澎湖兩郡の〇・三人、新竹郡の〇・四人等の順位にして、其の他一人に達せざるは已上の外二市、十郡、一支廳にして、凡へて十七市郡支廳を包括す、即ち概言すれば全島約三分一の郡、市及支廳は非マラリア地方と謂ふべし。

翻つて死亡の比率高き地方、所謂マラリア地方と稱すべき郡、支廳を擧げむに大武支廳の一二・八人を首位とし、花蓮支廳の〇・一人之に亞き、如上の兩支廳は全島平均の二人内外なるに比し、適に五倍、六倍の高率を示せり、其の他五人以上の地方を擧げ

ひに玉里支廳(八・五人)、新高郡(六・九人)、潮州郡(五・五人)、竹山郡(五・三人)、東石郡(五・二人)、及び屏東、新營(各々五・一人)の六郡、一支廳なり。  
 ○ マラリア系 前叙の如く、全島各郡、支廳に於ける本病濃淡の大勢を終れり、次に各州廳毎に其の管轄地域内の郡又は支廳に就き更に縷述せむとするも、茲に聊か本島のマラリア系を略説せむとす。

マラリアの地理的觀察を試みるに、交互に混沌を醸し、一見殆ど歸結する所なき觀を呈するも、臆氣なから一律の脈絡を手繰ることを得へし。則ちマラリアの流行地帯の主なるものに二大系あり、其の一は宛ら内地の風趣に彷彿たりとせらるる所の花蓮港を基部とし、裏臺灣一帯に瀾臺せる東海岸主系と。其の他の一は本島の中央部に位し、豫て景趣を以て名聲籍甚たる、併かも海拔二千五百尺の高地に在りて、又本島唯一の大湖水として知られたる彼の日月潭を中心し、北は峻山高峯の麓を縫ひて、遙かに次高山の餘脈大雪、小雪の群峯の盡くるところの山村より溯つて大安溪の上流、大湖の高臺を藉地に苗栗平野の一圓を衝く。南するものは、本島の脊椎と目すへき中央山脈の重疊蜿蜒たる連峯の下、峡谷を圍繞して山徑の漸く闊く所集々の名邑、晉の世に放逸世に背きて遊交せりてふ七賢人の竹山や、星に由縁の斗六を過ぎ、こゝに至りて二脈となり、更に南走するものを追はひに、本島に於ける山濤の最も高く激するところ、是れなん本邦の最高峯新高山、亞て卑南主山、知本主山等の連嶺の山麓、徐ろに傾斜するに沿ふて遠く旗山、屏東、東港の海濱に盡き、斗六、嘉義の一大平野より、西走する本病系の一脈は、

一望萬頃の鹽水、沃野千里の東石を過ぎり、曾文、二曾行の本支流域を侵かし、少しく東南に楫を轉し、岡山、鳳山に墜ふ、この幹線を中央主系と謂はむとす、而して其の岐脈を新高支系、新營支系、屏東支系及び鳳山支系と稱せんかな、これマラリア系の大約なり、更に州廳別毎の各郡市及支廳に就き略叙すへし。

ハ 臺北州 臺北市は臺北州下に於て最も寡少なるのみならず、併かも全島中にて最低位に在るは前述の如し。亞いて七星、海山の兩郡は就れも〇・五人人口千に付、以下本項に於けるもの皆同し、新莊、宜蘭の兩郡又孰れも〇・七人を以て順位を爲す、斯くして以上の一市及四郡は同州平均(〇・九人)より低し。本州に於けるマラリア死亡の最多は蘇澳郡(三・九人)にしてマラリア地方に比するも遜色なし、是れ本郡は地勢上東海岸に連亘し氣象關係等同一なるか爲めにして、マラリア系統より觀るに東海岸主系の分岐と見るを妥當なりとすへし。亞いて淡水郡の二・二人、基隆郡の一・九人、基隆市の一・六人等順次に多數を示せり。

依是觀之、臺北州のマラリア濃厚地は東海岸地方に連交せる海岸地に限られたるは、本州の本病系統の花蓮港分脈と稱する所以なり、又寡少なるは臺北市を圍繞せる地方にして、其の他は臺北市の距離に正比して遞増すと謂ふへし。

ニ 新竹州 本州は本島最寡の地方にして人口千に付〇・九一人のマラリア死亡率を示し、臺北州(〇・九七人)と伯仲の間に在り、又臺中州(一・八一)の折半數に匹敵し、臺南州(三・四五人)と比するに約四分の一に該り、最多の花蓮港廳に較ぶれば約十分の一の



少数なり。而して州中の最寡にわるは大溪郡の〇・三人を首とし、新竹郡〇・四人及び竹東郡〇・六人相踵いて之に属す。最多なるは大湖郡の二・八人にして同州平均〇・九一人の三倍を超え、之を中南部に於ける濃厚地たる新高支系新高、竹山及能高の三郡に比肩するの多数を示せり。又苗栗郡は之に亞いて多数なりと雖も其の割合は一・七人にして、若し夫れ臺北州に同位を覓むれば基隆市(一・六人)と基隆郡(一・九人)との間に在りて、其の比率甚た高しとせず。

之を要するに本州のマラリア濃厚地は大湖及苗栗の兩郡に偏在し、其の他の六郡は凡て同州平均以下に在りと謂ふべし。

ホ 臺中州 本州マラリアの稀薄地は豊原郡の人口千に付〇・五人を最とし、臺中市の〇・九人之に属す、併して臺中市のマラリア死亡率を他州に對比せむに臺北及新竹兩州の平均位と伯仲し、分布の濃度は北部臺灣と其の程度を異にし、臺中市既に高率なるを知るべし。翻つて最多なるは舊南投應管内にして、就中新高郡を最とし其の比率六・九人を示し、南部臺灣の臺南及高雄兩州と雖も本郡に比肩すへき郡市なきも、若し近運のものを見れば、漸く高雄州潮州郡五・五人のみにして、如何に本郡かマラリアの濃厚地たる乎を察知するに難からざるべし。次に多数とするは最多新高郡の近郊にして竹山(五・三人)及能高(四・一人)の兩郡なりとす。其の他の各郡に在りては二人に達するものなし。

之を要するに、本州マラリアの分布状態は新高支系に集中せられたるか爲り、若し之

等の三郡を除外するとき其の比率は著しく劇減するを知るべきなり。

ヘ 臺南州 本州のマラリア死亡の平均は三・五人(人口千に付き)を示して、其の平均以上にあるは東石郡の五・二人を筆頭に、新營(五・一人)、曾文(四・一人)、斗六(四・〇人)、新化(三・七人)及び嘉義(三・六人)の六郡とし、臺南市は〇・六人を以て最低位にあり、其の他の五郡は新營郡の一・九人より北港郡の三・三人との間に在り。

之を要するに本州のマラリア流行地帯は、本島の名所として喧傳せらるゝ水社大山、大尖山に圍繞せらるゝ、日月潭附近を基底に夫より竹山、斗六、嘉義を過ぎ、北回歸線を中軸に、鹽水及東石方面に傾斜しつゝ西走し直ちに海に入るの地區を最多とし、北港溪以東及曾行溪流地域を最少なりとす。

ト 高雄州 本州のマラリア分配は地理的關係上、其の度合に著しき懸隔を存せり、即ち澎湖郡の〇・三人より潮州郡の五・五人の間に在りて本州平均は三・一人を示せり、而して平均より高き地方には潮州、屏東(五・一人)、旗山(四・九人)、鳳山(四・二人)及び東港(三・二人)の五郡を數へ、寡少なるは澎湖郡の外新設の高雄市(一・八人)、岡山郡(二・一人)及び恒春郡(二・八人)なりとす。

叙上は高雄州を單位として觀察したる歸嚮にして、若し之を他州と對照するに甚たしき懸隔あるを窺知すべし。即ち本州下に在つては寡少の部に属する高雄市を、先づ新竹州に比するに、最多の第二位とせる苗栗郡(一・七人)より高く、又高雄市に亞いて低位にある岡山郡は、臺北州最多の第二位とする淡水郡(二・二人)と伯仲にあるを觀るべし。

要するに本州は澎湖列島を管轄するところの澎湖郡を除けば、各郡ともに凡て北部地方に比し迥に高率を示し、所謂マリアア地方なるを直感せしめらる。

予 臺東廳 本廳マリアア分配を叙述するに先ち遺忘すへからざるは、人口構成の種族關係なりとす。

今第一回國勢調査(大正九年十月一日)の結果を討ぬるに

□臺東廳種族細別人口

總數		内地人		本島人		外国人(凡て支那人)	
總數	内地人	總數	福建	廣東	其他の漢人	熟蕃	生蕃
三八、七九一人	三、二六三人	三五、二六〇人	四、一五四人	一、三七七人	一一三人	二、六二六人	二六、九九〇人
						二六八人	
							一〇〇〇
							八・四
							九〇・九
							一〇・七

相對數		本島人		外国人	
總數	内地人	總數	廣東	其他の漢人	熟蕃
三・五	〇・三	六・八	六九六	〇・七	

如上の表章を要約するに(一)内地人は比較的多數を占め、其の割合の多きは花蓮港廳(二・四%)及び臺北州(九・五%)の次に位して全島第三位に在り、但し内地人の全島平均は四・五%なり。(二)本島人中福建人の割合寡少なること全島第一位なり、又廣東人の寡きは臺南州(〇・七%)及び臺北州(〇・九%)に亞くの少數なり。(三)生蕃人の夥多なるは實數に於て既に全島其の比を觀す、花蓮港廳は甚しく傑出したる觀あるも、本廳に比すれば約半にして三八・〇%に過ぎず、更に本廳の熟蕃を加ふる時は七六・四%を示して、本廳人口の四分の三以上は彼等蕃族の占むる所なりとす。

斯くて、臺東廳に於ける人的要素の種族關係は、他州廳と全然其の揆を一にせざる結果、又其の現象に於ても同日の談にあらざるは免かれざる所なりとす、聊か死亡統計上に於ける著しき差異を摘録すれば次の如し。

1 生蕃族には主治醫あるもの僅少なるに依り、其の結果已むなく不明の診斷として處理せらるゝもの甚しく増加を示せり。今最近五箇年の狀勢を窺知するに、總死亡中の七一・八%即ち約四分の三は不明の診斷として顧慮せられざる狀態に在るを以て、

同種の原因統計は未だしと謂はすんはあらず。

□臺東廳マラリア防退成績累年比較

種別	大正八年		同九年		同十年		同十一年		同十二年		計
	總死亡	不明診断	總死亡	不明診断	總死亡	不明診断	總死亡	不明診断	總死亡	不明診断	
内地人	七	四	七	四	七	四	七	四	七	四	七
本島人	三〇	一六	三〇	一六	三〇	一六	三〇	一六	三〇	一六	三〇
外國人	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
計	三三	二四	三三	二四	三三	二四	三三	二四	三三	二四	三三

備考 外國人の不明の診断なし

2 死因別各種病名の比率は、不明の診断の多寡を考慮し研究するを要す、即ち同種死因の四分の三は夫れ以上は不明の診断なる結果、殘餘の四分の一を各疾病別に按配せらるゝか爲め、隨つて其の比率の低位に墜つるは其の所なりとす、故に同種

の死因の實際を知らむと欲せば、先づ不明の診断を控除し、然る後に其の割合を覓りさるへからず。

3 内地人のマラリア死亡率は本島人に比し迥に高率なりとするは、即ち本島人主として生蕃人の約七、八割の死因か、凡て不明の診断中に包含せられたるに據るものにして事實内地人の高率たるものにはあらず。然りと雖も死亡統計には好箇の資料に乏しきか爲め、最近大正六年より同十二年に至る七箇年間の、臺東廳マラリア防退成績中、檢血人員に對する原蟲保有者を引照して、内地人、本島人間の保有する原蟲率を比較し、其の多寡を探究せむとす。但し本病原蟲の保有率高きは、必ずしも死亡率の多少に比例すべきものにあらず。

□臺東廳マラリア防退成績累年比較

年及種別	内地人	本島人	外國人	計
大正六年	六六	一五〇	六	二二二
同七年	二五	一〇〇	三	一二八
同八年	三三	一〇〇	三	一三六
同九年	三三	一〇〇	三	一三六
同十年	三三	一〇〇	三	一三六
同十一年	三三	一〇〇	三	一三六
同十二年	三三	一〇〇	三	一三六

計	大正八年		同九年		同十年		同十一年		同十二年	
	原蟲保有者	検査人員百中	原蟲保有者	検査人員百中	原蟲保有者	検査人員百中	原蟲保有者	検査人員百中	原蟲保有者	検査人員百中
原蟲保有者	253	1000	353	1000	545	1000	545	1000	545	1000
検査人員	253	1000	353	1000	545	1000	545	1000	545	1000
原蟲保有率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
検査人員百中	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
原蟲保有者	253	1000	353	1000	545	1000	545	1000	545	1000
検査人員	253	1000	353	1000	545	1000	545	1000	545	1000
原蟲保有率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
検査人員百中	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
原蟲保有者	253	1000	353	1000	545	1000	545	1000	545	1000
検査人員	253	1000	353	1000	545	1000	545	1000	545	1000
原蟲保有率	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
検査人員百中	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

如上の数字に依れば、臺東廳に於ける七箇年間の検査せし延人員四六〇〇三四人中のマラリア原蟲保有率を觀るに、検査者中二・五五〇に該れり。之を種族別に區分す

れは、本島人の原蟲保有率最も高く二・六二〇を示し、内地人は二・四九〇にして本島人より〇・一三〇低し。斯くの如く防遏成績に依れば、内地人の本島人より多かるべき理由を認め得す。更に各年別に其の多寡を觀るに、内地人の本島人を凌駕せしは大正六年、同十年及同十二年の三箇年にして、爾餘の四箇年は内地人熟れも本島人より低率なり。

尙ほ、内地人の比率は本島人を超ゆへきものにあらすとする例證として、臺東醫院に於ける最近大正十年より同十二年に至る三箇年間の總患者(入院、外来とも)を觀察するに一年平均六三五七人にして、其の中マラリア患者一三五三人を占め、總患者中マラリアに因する患者二割一分三厘に該れり。之を種族別に剖拆するに、本島人最も高率にして平均位を抜くこと二分、即ち二割三分二厘を示せり、外國人最寡にして内地人の三分一、本島人の四分の一にして六分五厘なり。之を要するに、本例に依るも内地人は本島人よりマラリア罹患率の高きにあらざるも本島人は不明の診察に依る死亡數の過多なる影響なるを知るへし。次に最近三箇年間に於ける、臺東醫院の入院、外来兩患者總數とマラリア患者とを比較して表章せむとす。

□大正十年以降三箇年間に於ける臺東醫院の總患者及びマラリア患者比較

年及種族	入院		外来		計	
	總患者	マラリア患者	總患者	マラリア患者	總患者	マラリア患者
内地人	53	1	33	5	86	6
總患者百中	53	1	33	5	86	6

平均	大正十一年			大正十二年		
	計	内地人	本島人	計	内地人	本島人
平均	2.3	2.2	2.4	2.3	2.2	2.4
外地人	1.5	1.4	1.6	1.5	1.4	1.6
本島人	3.1	3.0	3.2	3.1	3.0	3.2
計	2.3	2.2	2.4	2.3	2.2	2.4
内地人	1.5	1.4	1.6	1.5	1.4	1.6
本島人	3.1	3.0	3.2	3.1	3.0	3.2

本廳のマラリア死亡率は二・二八人にして、全島平均(人口千に付二人二分二厘)と伯仲の間にあるも、事實は不明の疾患の過多なるに依りて低率を示すものなることは前叙の如し。併かも不明の疾患として總死亡の四分の三を除外したるにも拘らず、尙且つ同廳第一位の死因たる二人以上を算するを觀は、本廳には夥しきマラリア死亡あるを察知するに難からず。今支廳別に内容を窺ふに大武支廳は突飛なる最多一二・八人

を示し、亞て里壠支廳(二・五人)、新港支廳(一・六人)及臺東支廳(〇・六人の順位なり。リ 花蓮港廳 本廳は全島第一のマラリア地方にして、人口千に付き同病死亡者實に八・四二人を示せり。就中花蓮支廳は一〇・一人を以て最多とし、玉里支廳(八・五人は同廳平均位と軒輊なく、研海支廳は一・四人を以て末位にあり。本廳も不明の診斷として醫療を受けざるもの臺東廳の比にあらざるも比較的多數に不明の診斷の百分率十一年は二五・九、十二年は三一・八に拘らず斯く高率なるに想到せば、轉た寒心に堪えず。

又 總括 郡、市及支廳別に依るマラリア分布状態を遠觀するの便に資せむか爲め、人口千に對する比率を表章せむとするに左の如し。

□ 郡市及支廳別マラリア死亡率(人口千に付)

◎ 一人迄

臺北 市 臺北州	〇・二	臺南 市 臺南州	〇・六
大溪 郡 新竹州	〇・三	臺東 支廳 臺東廳	〇・六
澎湖 郡 高雄州	〇・三	宜蘭 郡 臺北州	〇・七
新竹 郡 新竹州	〇・四	新莊 郡 臺北州	〇・七
七星 郡 臺北州	〇・五	中壢 郡 新竹州	〇・七
海山 郡 臺北州	〇・五	桃園 郡 新竹州	〇・八
豐原 郡 臺中州	〇・五	竹南 郡 臺中州	〇・九
竹東 郡 新竹州	〇・六	臺中 市 臺中州	〇・九

文山 郡	臺北州	1.0			
◎二人迄					
羅東 郡	臺北州	1.1	大屯 郡	1.8	
員林 郡	臺中州	1.1	東勢 郡	1.8	
南投 郡	臺中州	1.2	北斗 郡	1.8	
大甲 郡	臺中州	1.4	高嶺 市	1.8	
研海支廳	花蓮港廳	1.4	基隆 郡	1.8	
基隆 市	臺北州	1.6	彰化 郡	1.9	
新港支廳	臺東廳	1.6	新豐 郡	1.9	
苗栗 郡	新竹州	1.7			
◎三人迄					
岡山 郡	高雄州	2.1	里壠支廳	臺東廳	2.5
淡水 郡	臺北州	2.1	大湖 郡	新竹州	2.8
虎尾 郡	臺南州	2.5	恒春 郡	高雄州	2.8
◎五人迄					
北門 郡	臺南州	3.1	斗六 郡	臺南州	4.0
東港 郡	高雄州	3.2	能高 郡	臺中州	4.1
北港 郡	臺南州	3.3	曾文 郡	臺南州	4.1
嘉義 郡	臺南州	3.6	鳳山 郡	高雄州	4.2
新化 郡	臺南州	3.7	旗山 郡	高雄州	4.9
蘇澳 郡	臺北州	3.9			

◎十人迄					
新營 郡	臺南州	5.1	澎湖 郡	高雄州	5.5
屏東 郡	高雄州	5.1	新高 郡	臺中州	6.9
東石 郡	臺南州	5.2	玉里支廳	花蓮港廳	8.5
竹山 郡	臺中州	5.3			
◎十人以上					
花蓮支廳	花蓮港廳	10.1	大武支廳	臺東廳	12.8

二 總死亡百中のマラリア死亡の割合

マラリアに因する死亡が總死亡中に於て幾何を占むるかを考察し、以て前項の人口に對する比率と相俟つて同病の地方的分布状態を釋明するの一法と爲すべし。マラリア死亡の全島平均位は總死亡中の八の内外なるは既に叙へたるか如し。而して更に郡、市及び支廳別に觀察するときは、一層的確にマラリア濃淡の程度を指摘し得へし。併かも其の割合中には一時的流行の急性傳染病に依るものと、不明の疾患の過多に依るものとの影響にて、多少の偏倚的高低あるは考慮を要する所なるも、概して死亡率に於て叙述したるか如き型狀を呈するは勿論なり。

今大正六年以降の五箇年平均率に依りて、總死因中の割合を全島に於ける郡、市及支廳別に之を觀察するに、先づ最寡少を示す地方を擧ぐれば、人口に對する割合と殆ど吻合したり。即ち臺北市の〇・九%、澎湖郡の一・〇%、澎湖郡の低率なるは總死亡中の約二〇%は不明の疾患に依る結果にして、臺東廳の如く著明ならざるも亦低位を示せる一因なり。

Ⅱ及び大溪郡の一・四等之に属す。之に反して百分の二十以上を含む最多地方、即ち總死因中の五分の一以上を占むるものに大武(二九・五%)、花蓮(二六・一%)、玉里(二二・七%)の三支廳を認めり。併して全島平均位に等しき地方は苗栗郡、恒春郡等なり。例に依つて表章するに左掲の如し。

□總死因中の割合より観たるマラリアの分布(郡、市、支廳別)

◎一パーセント迄	臺北 市 臺北州	〇・九%	澎湖 郡 高雄州	一・〇%
◎五パーセント迄	大溪 郡 新竹州	一・四%	南投 郡 臺中州	三・六%
	臺東 支廳 臺東廳	一・五%	新港 支廳 臺東廳	三・七%
	七星 郡 臺北州	一・八%	中壢 郡 新竹州	三・八%
	新竹 郡 新竹州	一・八%	員林 郡 臺中州	三・八%
	海山 郡 臺北州	二・一%	桃園 郡 新竹州	三・九%
	臺原 郡 臺中州	二・二%	文山 郡 臺北州	四・二%
	新莊 郡 臺北州	二・七%	竹南 郡 新竹州	四・四%
	臺南市 臺南州	二・九%	臺中市 臺中州	四・四%
	竹東 郡 新竹州	三・二%	大甲 郡 臺中州	四・九%
	宜蘭 郡 臺北州	三・四%	彰化 郡 臺中州	五・九%
◎一〇パーセント迄	臺東 郡 臺北州	五・一%	大屯 郡 臺中州	五・九%
	基隆 郡 臺北州	五・四%	彰化 郡 臺中州	五・九%

更に州、廳別總死因中のマラリア死亡の多寡に依る兩端を摘記せむに次の如し。

◎一五パーセント迄	新豐 郡 臺南州	六・二%	研海 支廳 花蓮港廳	八・〇%
	岡山 郡 高雄州	六・四%	苗栗 郡 新竹州	八・二%
	高雄 市 高雄州	六・六%	恒春 郡 高雄州	八・五%
	里壠 支廳 臺東廳	六・六%	淡水 郡 臺北州	八・六%
	東勢 郡 臺中州	六・九%	東港 郡 高雄州	九・一%
	北港 郡 臺中州	七・〇%	虎尾 郡 臺南州	九・六%
	基隆 郡 臺北州	七・三%		
◎二〇パーセント迄	新化 郡 臺南州	一〇・一%	斗六 郡 臺南州	一二・六%
	嘉義 郡 臺南州	一〇・三%	北港 郡 臺南州	一二・八%
	鳳山 郡 高雄州	一一・〇%	新營 郡 臺南州	一三・一%
	北門 郡 臺南州	一一・一%	屏東 郡 高雄州	一三・九%
	曾文 郡 臺南州	一一・四%	能高 郡 臺中州	一四・二%
	大湖 郡 新竹州	一一・五%		
◎二〇パーセント以上	玉山 支廳 花蓮港廳	二二・七%	大武 支廳 臺東廳	二九・五%
	花蓮 支廳 花蓮港廳	二六・一%		
	竹山 郡 臺中州	一五・一%	東石 郡 臺南州	一五・四%
	旗山 郡 高雄州	一五・二%	蘇澳 郡 臺北州	一七・四%
	潮州 郡 高雄州	一五・二%	新高 郡 臺中州	一九・四%

□州、廳別、死因百分率中のマラリア最高、最低兩率

最低の地方		最高の地方	
臺北州	〇・九	蘇澳郡	一七・四
臺北州	一・四	大湖郡	一一・五
臺中州	二・一	新高郡	一九・四
臺南州	二・九	東石郡	一五・四
高雄州	一・〇	潮州郡	一五・二
臺東廳	一・五	大武支廳	二九・五
花蓮港廳	八・〇	花蓮支廳	二六・一
全島	〇・九	大武支廳	二九・五

三 總死亡中マラリアの順位

本資料は人口動態統計に依り、而して累年比較の便ある制度改正後の大正九年より同十二年に至る四箇年間の事實なり。

總死亡中に於てマラリアを死因とする割合は前叙の如しと雖も、死因としての分配即ち順位を悉さざるに依り次に略説せむとす。

今全島に於ける、死亡原因中マラリアを第一位とする地方は各州に各々一郡宛あり、之を舉ぐれば蘇澳郡(臺北州)、大湖郡(新竹州)、新高郡(臺中州)、東石郡(臺南州)及び潮州郡(高雄州)なりとす。其他臺東廳の二支廳(新港及大武支廳)と、花蓮港廳は全支廳凡て第一位を占めたり。

り。

第二位にあるは全島凡て十四郡、一支廳の多數に上れり、即ち臺北州の二郡、新竹州の一郡、臺中及高雄兩州の各三郡、臺南州の五郡と臺東廳の一支廳是なり。又マラリア死亡を第三位とする地方は全島に八郡を認めたり。併して順位の低き地方には臺北市の二十二位を最低位とし、澎湖郡の十八位、新竹郡の十三位等なり。

マラリアを第二位に多數とする地方は前述の如く十四郡及び一支廳にして、併かも其の第一位とする病名は悉く肺炎とせるは又定型的なる現象ならずや。勿論郡別に依る第一位の死因はマラリアと肺炎に偏倚し、其の他の疾患にして一位とするものを舉ぐれば胃の疾患の三郡と、腸炎及び小兒の播弱の各一郡宛に過ぎず。

左に郡、市、支廳別マラリアの死亡順位と、マラリアを第一位とせざる市郡に在りてはマラリアを凌駕する凡ての死因を表章せむとす。但し既記の如く大正九年より同十二年に於ける事實なるを以て基隆市は基隆郡中に、高雄市及び高雄市設置後に於ける岡山、鳳山兩郡に編入せられたる各庄は孰れも舊高雄郡として表章せざるを得ず、且つ如上四箇年の内大正九年には流行性感胃の大猖獗を觀たる結果、例年に比し死因に多少の變態を生したるは免かれずと雖も、其は流行性感胃に併發したる肺炎の激増したる影響に依りて、他の疾患をして幾分低率に誘導したると、其の他はマラリアの順位を十位以下とせし地方に在りては、流行性感胃と其の併發症たる肺炎との二疾患に集中せられたる結果、其の他の疾患の割合は自然に低下を示して、其の順位の常型を傷ふたるものあり。由來死亡統計に於



て定型を破るは異變と、流行性の疾患とに限らるゝを以てなり。而して大正九年に於ける本島の流行性感胃の死者は無慮九千六百〇七人にしてマラリア七千七百六十人の死者を超越ること約二千人の多数に上り、又同年の總死亡十一萬九千人に對し八分に當れるの多数なるを知るべきなり。

左に大正九年以降四箇年間の總死亡中に於ける、マラリア死亡の順位を表章せむとす  
 □大正九年乃至同十二年の總死亡中の順位

郡、市及支廳位	マラリアを超過せる死因
臺北市 (二三)	肺炎 先天性腎質 心臓の器質的疾患 腸膜炎 流行性感胃 小兒の播種子癩 脚氣 外因死 慢性氣管支炎 腸出血腸軟化 腸チフス 腹膜炎
七星郡 (一〇)	肺炎 胃の疾患 流行性感胃 肺結核 小兒の播種子癩 腎臓炎 先天性腎質
淡水郡 (二三)	胃の疾患 肺炎 流行性感胃
基隆郡 (二二)	肺炎 胃の疾患 小兒の播種子癩
宜蘭郡 (一五)	胃の疾患 肺炎 小兒の播種子癩
花蓮郡 (一一)	肺炎 胃の疾患

文山郡 (八)	肺炎 先天性腎質 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 老衰 胃の疾患 肺結核 胃の疾患 肺結核
海山郡 (一〇)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 胃の疾患 肺結核 先天性腎質
新竹郡 (八)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 胃の疾患 肺結核 腸膜炎
臺北州全管 (四)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 胃の疾患 肺結核 腸膜炎
新竹郡 (三)	肺炎 慢性氣管支炎 腎臓炎 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 流行性感胃 腹膜炎
中壢郡 (六)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 腸膜炎 胃の疾患 流行性感胃
桃園郡 (一)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 流行性感胃 腸膜炎 腎臓炎
大溪郡 (七)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 胃の疾患 腎臓炎 小兒の播種子癩
竹東郡 (八)	肺炎 胃の疾患 急性氣管支炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 胃の疾患 慢性氣管支炎 腹膜炎
竹南郡 (八)	肺炎 慢性氣管支炎 小兒の播種子癩 胃の疾患 先天性腎質 肺炎 老衰 腸膜炎
苗栗郡 (二)	肺炎 慢性氣管支炎 先天性腎質
大湖郡 (一)	肺炎 慢性氣管支炎

新文	北門	新管	嘉義	斗六	虎尾	北港	東石	臺南全管	高雄	岡山	鳳山	旗山	屏東	潮州	東港	恒春	澎湖
一八	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎

新文	北門	新管	嘉義	斗六	虎尾	北港	東石	臺南全管	高雄	岡山	鳳山	旗山	屏東	潮州	東港	恒春	澎湖
一八	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎

支廳	九	十	十一	十二
高雄州全管	二	二	二	二
臺東支廳	二	二	二	二
新港支廳	一	一	一	一
大武支廳	一	一	一	一
臺東廳全管	一	一	一	一
花蓮支廳	一	一	一	一
玉里支廳	一	一	一	一
研海支廳	一	一	一	一
花蓮港廳全管	一	一	一	一

大正九年より同十二年に至る、本島に於けるマラリア死亡の傾向を各死因との關係に配し、聊か筆を染めむとす。先づ州廳別の梗概より起して、更に細分し郡、市、支廳別に移らむかな。

一 臺北州 マラリアの總死亡中の順位を観るに、九年は七位(三・八%)、十年と十二年との兩年は六位(十年は四・四%、十二年は四・九%)、十一年は四位(五・三%)を示し、最近四箇年間に於て既に總死亡中の四位より七位に下り、其の割合は三・八%より五・三%の間にあつて一・五%の差異あり。其の實數を窺ふに九年七五四人、十年七八八人、十二年(七五五人)の三箇年間は全く差増なく、唯十一年は九二七人にして例年に比し甚しく多數を示したるのみ。斯くの如く實數に在りては、各年平衡を保てるも百分比に距離あるは、前

叙の如く九年は流行性感胃の大猖獗の結果に依り、十年は麻疹の流行に基因して、幾分低位に墜ちたるものなり。之を要するに各年を通してマラリアを凌駕せし死因は、肺炎、胃の疾患及肺結核の三類にして、流行性疾患以外に異彩を放ちたるは、九、十兩年の小兒の梅毒、子痢(九年は四・二%、十年は四・六%と十二年の先天性弱質(五・五%)にして、孰れも小兒の疾患なるは注目し値すべき事象なりと謂ふべし。

臺北州下に於けるマラリアの狀勢を、市郡別に略説するに次の如し。

イ 臺北市 マラリア死亡の總死因中の順位は九、十兩年は二十一位、十一年は前年より一位上りて二十位となり、十二年は前年より二位下りて二十二位を示せり。元來死因類別は六十一類にして、本市のマラリア死亡は類別種名より觀るも三分の一以下の低位にあり、又百分比率より觀るも、一%内外にして本市の死因としては遠遜たるものなり。之を要するに臺北市のマラリアは消長なく、殆ど固定の狀態に在りと謂ふべし。

ロ 七星郡 本郡のマラリアは増加の趨嚮を呈露せり、即ち九年は一・六%、十年は二・二%、十一年は三・五%、十二年は三・四%是なり。故に其の順位も九、十兩年は十位、十一位を占めたりしか十二、十三の兩年は俱に上昇して八位を保てり。

ハ 淡水郡 本郡最近四箇年の傾向を眺むるに、マラリア第三位にあるも、之を各年に徴するに第三位にあるは九年に止まり、十、十二の兩年は二位にて、十二年は五位に降下せり。然れども其の比率は五・九%を示して、未だ著しき減少を見ず。而して本郡の全州平均と異なるは全州第一位の肺炎なるに對し、胃の疾患の一位とする是なり、且

十二年の死因を観るに、胃の疾患を一位とし、マラリアを五位とするも其の間殆ど平衡にして、僅かに三・七の較差を認むるのみ。斯く交互間に於て顯著なる高低なきは其の順位に在りても年と俱に變動すべきを免かれず。

二 基隆郡 本郡のマラリアは肺炎に亞て高率に屬し、總死亡の八の内外を占め、併かも近年の傾向は肺結核が最多死因の肺炎に亞き、マラリアは第三位に下るの觀あり、然れども其の比率は甚しき低落を見ざるか如し。

ホ 宜蘭郡 臺北州の死因中混沌として定型を示さざるは本郡なりとす、併かも最近四年間に於ける狀況を観るに、九年は三・五を示して第九位にあるも十年五・〇、十一年四・九の兩年は俱に第六位に、翌十二年は一躍八・八を示して第二位に上れり。かく張弛の間に五・三の較差を認むるは、蓋し偶然的の現象なる哉。又全州と異なる傾向を擧ぐれば、淡水郡と同じく胃の疾患を第一位とし、新莊郡と同じく小兒の瘧病及子痢を第二位とし、第三位は本州に類例なき肺炎とせし點にあり。

若し夫れ、マラリア防遏成績に依りて本郡を観察するに、最近の事實たる十一年、十二年を比較するに、十一年は檢血延人員九〇三二五人中原蟲保有者二二三人、即ち原蟲保有率は二・四七の率なり、次に十二年は同上の比率前年に比し〇・一八の低く二・二九を示せり、斯く本郡の兩年は僅かに好成绩を上げたるに過ぎず。併かも之を本郡のマラリア防遏施行地たる頭圍庄の内頭圍、大里簡、梗枋港澳の三箇所と、礁溪庄礁溪との以上四箇所別に其の内容を窺ふに頭圍、大里簡の兩地は其の保有者率増加を示し、梗

枋(港澳を含む)、礁溪の兩地は減少したり。之を臺北州全管と照合するに、頭圍庄頭圍を除けば兩年とも其の比率適に高し。更に全島に對比するに、本郡の低率なること十一年は〇・〇三、十二年は〇・二二にして、殆ど軒輊なし。左にマラリア防遏成績を表すべし。

□宜蘭郡と臺北全州、全島とのマラリア防遏成績比較

地 方	大 正 十 一 年		大 正 十 二 年	
	檢血人員	原蟲保有者	檢血人員	原蟲保有者
宜蘭郡	3,300	67	3,300	67
頭圍庄	3,300	67	3,300	67
大里簡	3,300	67	3,300	67
梗枋港澳	3,300	67	3,300	67
礁溪庄	3,300	67	3,300	67
平 均	3,300	67	3,300	67
臺北州	1,100,000	1,100	1,100,000	1,100
全 島	11,000,000	11,000	11,000,000	11,000

へ 羅東郡 本郡マラリアの趨勢は、逐歲増加の傾向に在り、即ち總死亡の割合九年は五・三、十年は六・一、十一年は八・二、十二年は一二・三の遞加せり、之を順位より觀るに九年十年の兩年は五位、十一年は三位、十二年は一位を窺得たり、依是觀之、本郡は孰れの方面より觀察するも、マラリア増加の傾向ありと謂ふべし。

ト 蘇澳郡 本郡は追年マリア死亡を第一位とし、併かも其の比率の高きを以て名あり。所謂本郡は花蓮港本病主系の海岸線を迂回して、北部臺灣に於ける最濃厚の核心地點にして、其の餘派は宜蘭平野を縦貫し、同じく海岸線に架して基隆を越え、野柳鼻富貴角の突角を西走して淡水に到るの一支系を爲せり。由來本郡の死亡はマリアを以て累年首位とするも其の比率に異同を存す、即ち十二年は最低にして二一・〇%、十年は二三・七%、九年は二六・二%、十一年は最高の二六・三%を示せり。而して本郡總死因中の第二位を占むるは是又累年肺炎に限られ、其の百分率は十二年の一〇・〇%より十年の一四・二%の間に在りて、之を第一位マリアと對比するに半數に達せざる著差を認め、迥かにマリアの夥多なるを知るべきなり。

チ 文山郡 本郡の近狀より之を遡觀せんに、十二年は三・四%を示して十一位に居り、十一年は三・八%にて八位に昇り、十年同じく八位なるも其の比率は上騰して四・七%を示し、九年は更に比率、順位ともに昂上して第六位、六・八%を算せり。如上により之を推察するに、本郡は逐年マリア死亡の減退を告げつゝありと謂ふべし。

リ 海山郡 本郡マリアの推移は一張一弛して、其の歸嚮を知り難しと雖も、大體増加の趨勢にあるものゝ如し、即ち九年は一・九%の低率にして十二位に在りしも、十年は三・二%に上りて九位を占め、十一年は一氣に猛進して四位、五・〇%に上り、十二年は十年と同じく九位に復し、其の比率も亦同じく三・二%を示せり。斯くの如く本郡の狀勢は良好に復せりと雖も、未だ逆轉するを得ず。

又 新莊郡 本郡は文山郡と同じく漸減の好調にあり、今九年より十二年に至る順位を觀察するに順次に六位、八位、九位、十五位を示し、其の比率も亦順次に三・八%、二・五%、二・八%、一・四%を示せり。

ニ 新竹州 州下八郡中マリア増加の傾向あるは大溪、竹南の兩郡にして、大湖郡は模糊の狀態にありと雖も寧ろ増加に左袒すと謂ふべし。之に反し減少の傾向を取るは新竹郡のみにして、其の他の四郡は現狀固持の狀態にありと謂ふべし。

イ 新竹郡 大正九年に十五位を占むるマリアの一・四%は、十年には三・四%に増加し、亞いて十一年には二・九%に減少して十一位となり、翌十二年十二位に低下し其の順位に在りては僅かに一位の差に過ぎざるも、其の比率は著減して一・八%となれり。本郡に於ける近狀より之を卜するに、比年遞下する傾向ありと謂はん乎。

ロ 中壠郡 最近四箇年の中、前三年は第六位を頑守し、後一年漸く上昇して五位となるも、其の百分比は却つて前年より低減せるを觀たり。則ち本郡は増減不定の趨勢にある地方とすべし。

ハ 桃園郡 本郡は中壠郡と接續の鄰土たる關係上、其の傾向も相似の間にあり。但し其の相異なるは百分比の我にありて累年低位にあるを示すのみ。

ニ 大溪郡 州下にてマリア増加の趨勢を形すものは、本郡と竹南郡となり。本郡は蕃地に近接したる名邑を中心に、多くは高雄の地點を占む。近情を探察するに、九年より十一年に至る間は逐年遞増を示し、漸く十二年に低下の氣運あるも、其の中數より

之を推す時は必しも低下するものと断するを得ず。唯本郡の著明なる事實は流行性疾患の一度侵襲を觀む乎、一躍第一位を割據するに在り、即ち九年は流行性感冒、十年は麻疹を以て首位としたる證左是なり。或は本郡には卓越したる疾患なく、爲めに小波瀾ありとせむか、并は直に全局に影響を與ふるの結果なりとせむや。

ホ 竹東郡 本郡は起伏常なき状態を持続せり。併して最近の比率に依れば三〇以上を占むれども、其の順位は他郡に比し甚た高からずして第七、八位を上下せり。これ或は上位にある疾患に傑出したるものあるの致す所なるへし。

ヘ 竹南郡 本郡は本州のマラリア濃厚地とせらるゝ大湖、苗栗に境したる地勢にあり。併かも本病の趨勢は九年の四・六〇より十二年の五・九〇の間にありて遞増を語りつゝあり。最近十二年は腸炎に亞き、第二位を占めたり。

ト 苗栗郡 本郡は曩に伸縮なく舊狀を墨守すと謂へしかども、寧ろ大湖郡と同しく増加の傾向を取るの地方に編入するを可なりとせむか。

其の百分比を示すに次の如し。

大正	九年	第四位にして六・六%
同	一〇年	第四位にして七・二%
同	一一年	第一位にして九・六%
同	一二年	第三位にして七・二%

チ 大湖郡 本州下極濃の地方にして又全局に卓逸す、其の推移を觀るに、九年は第二位にあるも、十年以降は第一位を辱めず。

三 臺中州

本州のマラリアは消長孰れの歩調にあるやを究むるに、逆調にありと謂はざるを得ず。即ち州下を通して逆調にあるものを擧ぐれば凡そ七郡あり、豊原、大甲、彰化、員林、北斗、南投及新高の各郡是なり。而して好調にあるは能高、竹山の二郡にして、其の他の臺中市並に大屯、東勢の二郡は舊狀維持にあり。今之を市、郡別に略説せむとす。

イ 臺中市 マラリアの順位は十年以降第四位を保ちて異動なく、併かも三年間の死因は、肺炎の依然として一位を占むる外他の死因は異動を存す。斯く他の疾患には異動を觀るに反し、マラリアに異動なしとするは本病に消長なきを證するものと謂ふへし。

ロ 大屯郡 九年以降に於ける總死亡中の百分比を覓むれば、順次に五・九、六・三、七・三、六・八を示し、追年増加を呈するも、各年間の連環數には著差なし。

ハ 豊原郡 本郡の百分率は甚だ低位にあるも、逐年遞加の傾向を呈せり。即ち九十の兩年は二・四〇を示せるに、越えて十一年三・〇〇に上り、翌十二年には更に三・五〇に昂れり。

ニ 東勢郡 年を隔てゝ増加し、年を隔てゝ減少する趨勢を呈して、其の去就を定め難しと雖も、比率より之を推すに、或は減少の傾向は増加の傾向に一籌を輸するものにあらざるなきや。

ホ 大甲郡 本郡は逐年増加の歸嚮を取り、唯十二年に於て低位を示したりき。元來同年の死亡絶對數は例年に比し少數なると、一面腸炎、肺炎の最多死因に比較的集中したる影響は、其の相對數に波及し、爲めにマラリアは前年に比し一・六〇の低率を見た

り、かく比率の低減せしに拘はらず、併かも順位は上りて四位を占めたるより之を察みれば、今速かに減少せし傾向ありと謂ふべからず。

へ 彰化郡 百分率より之を窺ふに、本郡は累年増加の逆調を辿りつゝあり。而して最近十二年を前年と比較するに、順位は三位に在りて不動なるも、其の比率は反撥して二・七%を増加し九・二%を示せるの近状なり。

ト 員林郡 本郡も増加の傾向顯著なる部に属す。即ち九年の二・三%（九位）より十二年の五・七%（四位）に上昇せり。

チ 北斗郡 本郡亦増加の逆勢にありて、併かも増加率の高きは他郡の比にあらす。九年は三・九%を示し第七位に在りて、甚た好調なりしか。次年は四位（七・四%）に騰り、越へて十一年には二位（一・二%）に躍進し、翌十二年は三位に墜ちたるも其の比率に至りては、寧ろ前年より高く一・一・六%を示せり。由來十二年の三位に下りしは第一位に墜せし腸炎の饒多なりし片影に外ならず。

リ 南投郡 本郡も亦逆勢の渦中に在り。併かも九年の二・六%てふ記録は餘りに好調の嫌ありき。如何となれば同年は世界的に流行せし感冒の餘波を享け、一般的に變態を示したりとは謂へ、本郡の最多死因たる肺炎は總死亡中の約三分一を占め、第四位として流行性感胃五・一%を示し、マラリアを十位とせしは容疑なしとせず。然れども茲に其の穿鑿を斷ち次年に移らむとす。次年は五・四%を示して第五位にあり、爾來上昇して四位を保ち七・三%より七・八%に増加せり。

ヌ 新高郡 州下第一のマラリア濃厚地帯にして、且つ東海岸の或る地方を除けば、全島中比肩すべからざる潤壤地なり。則ち其の分量を一瞥するに、總死亡の約四分の一はマラリア死亡者の占むる所となり、轉た悽慘の至りに堪えず。

ル 能高郡 本郡の比率は追年低下に傾きつゝあるは慶賀に堪えざるところ、但し肺炎に亞きて第二位を下らず。

オ 竹山郡 本郡も能高郡と同しく、マラリアの多發地なれども、最近減少の傾向を示し、其の比率も亦前郡と伯仲の間に在るも未だ逆踏すべからず。

四 臺南州 本州のマラリア死亡率は既に叙せしか如く、花蓮港廳を除けば全島其の比を見ざる高率を示せり。最近に於ける、總死亡中の割合は九年の八・三%より十一年の一三・五%の間に在り、十二年は前年より僅かに減少して一一・二%を示したるも、其の順位は依然として肺炎に亞くの高率を現はせり。

イ 臺南市 本市の死因は肺炎、肺結核、腸炎の順位を換ふることなくして定型を持續するも、マラリアに在りては然らず。即ちマラリアの消長を觀るに、九年の二・三%より十二年の一・六%の間に在りて、其の順位亦第五位より十三位の間を昇降し、歸嚮鮮明を缺く感あれども、併かも本病の頽勢にあるを首肯せしむ。由來都市に於ける、マラリア死亡の絶對數は、衛生機關上の見地よりせば、他より移入せしものゝ影響にして事實其の都市に於ける歸趨は窺へ知るべきを得ざるものなり。

ロ 新豐郡 順位より觀察を下せば減少の傾向を認めざるにあらざれども、比率より

観察するに於ては、減少の曙光未だ十分なりとせず。  
 ハ 新化郡 本郡は比率、順位の両面観測。孰れも固定の状態に在りて、特記すべき事象なし。

ニ 曾文郡 増加の趨勢に在るを以て、防遏に力めざるへけむや。  
 ホ 北門郡 本郡は腸炎の激増に依りて、近年定型を變換する傾向あるも、マラリアの減少は著しからず。

ヘ 新營郡 州下の高率に屬し、全死亡の首位にあらざれば二位を下らず。  
 ト 嘉義郡 近情を以て之を推すに、病勢に弛張なく、面目の更新なきを惜しむ。

チ 斗六郡 嘉義斗六地方に到れば、竹柱の家屋點綴せる村落を散見し、亞いて竹藪の里間に林立せるを看るへし。斯くして遂に竹藪對マラリア罹患率を痛感せしめらる。全く本郡の死者中約五分の一はマラリア疾患にて斃死する實情にあり。

リ 虎尾郡 本郡亦マラリア地方の名を辱しめず、十年第五位に下りたるの好調を示したるも、其の比率は未だ七・八の優位を占め、之を北部臺灣に比するに頷頽するもの多々ならず。

又 北港郡 本病消長の型式を観るに、隔歳に増減を示したり。九年第一位を占め、十年四位にあるは過少なるを直感せしめ、十一年更に二位に上昇し、十二年の三位にあるは畢竟腸炎の激増に影響せるものならずや。  
 ル 東石郡 州下唯一のマラリア濃厚地、最近四箇年間を観察するに、九年一〇・五

のより十一年一八・一の間に在りて、九年の比較的比率を示せるは、世界的に猖獗流行せしインフルエンザの暴騰に職由して、其の他の死因之に牽制せられ、孰れも低位を告げたるものに外ならず。十二年の三位を示したるは順位に於ては好調を齎したるか如き観あるも、其の比率は優に一二・六を上げ、本病の猛威を逞ふするは寧ろ隙齋に値すべしと謂ふべし。

五 高雄州 本州のマラリア消長の趨向を観察するに、追歲多少の増加を示せり。由來十二年は各地低減の歩調を辿るに拘はらず、本州は〇・六の増加を観たり。但し順位より之を窺ふに從來二位を下らざりしに三位に低落したるは異例なりとす。

イ 岡山郡 本郡も全州平均と其の傾向を同よし。若干の増加を観たるも其の比率は全州平均より迥に低下す。  
 ロ 鳳山郡 最近の趨勢は隔年一盛一衰し、其の比年を観るに減少する傾向を認めず。即ち十年及び十二年の同率九・七のより十一年の一四・四の間にあり。

ハ 旗山郡 累年逆調を保ち、曾て減少を観す。九年の九・六のより十二年の一五・六のに遞増せり。若し九年を指數一〇〇とせば十二年は一六三の激増に該れり。

ニ 屏東郡 本郡も亦旗山郡と同步調を取り、例年増加するを以て常型とせり。併して其の比率にありては前郡より僅かに嵩しとす。  
 ホ 潮州郡 本州下の濃厚地にして、又増加の趨向に在り。由來本郡は屏東街に近接せる内埔庄地方より南走して遠く枋寮、枋山地方の海濱一帯地に及び、其の管轄地域の



嶺長なるか爲め、管内の各庄に就て之を觀れば其の濃少に逕庭あるは勿論なり。  
 へ 東港郡 本郡南方は渺望たる大洋に臨み、北東は屏東、潮州の兩郡に境し、西の方下淡水溪を隔て、鳳山郡に相對す。斯くの如く本郡は左右背眺れの方向を睥睨するも本病の濃淵地にあらざるはなきに、本郡の超然として低位にあるは一奇現象なりとす。  
 ト 恒春郡 本郡は本州中澎湖郡に亞くの低率にあり、最近五、六位の低位に在り。  
 チ 澎湖郡 本郡のマラリア死亡は總死亡の一ゆに達せざる低位にありて、獨り州下に最少なるのみならず、全島中に之を較するも臺北市に亞くの小數なりとす。

由來澎湖郡は澎湖本島を除けば、面積一方里を示すものは漸く白沙、漁翁の二島を認むるのみにて、其の他の六十餘の島嶼は、悉く周圍數町に過ぎざる環海の孤島よりなり、從て蚊族の發生又僅少に屬す。故に本病か同列島にて傳播するもの稀有なりと稱せられ、多くは同島民の出稼地先より本病に感染して歸島するに基因すと謂ふへし。

六 臺東廳 東海岸地方はマラリアを最多死因とするは既記の如し。故に第二位を占むる肺炎十二年は腸炎二位なりとの開きを百分比に就て之を觀るに、一ゆ内外なるも、絶對數より之を窺ふ時は著差を認め、第二位の死因は未だマラリアの敵手にあらず。其の詳細は次表の如し。

□臺東廳のマラリア死亡と次位にある死亡との比較

死 因	大正九年		同十年		同十一年		同十二年	
	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比
マラリア	15	25.5	17	27.2	16	26.0	15	24.5
肺炎	25	41.3	28	44.8	30	48.4	35	56.2
腸炎	10	16.4	12	19.2	10	16.0	10	16.0
他	10	16.4	13	20.8	14	22.4	10	16.0

死 因	大正九年		同十年		同十一年		同十二年	
	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比
マラリア	15	25.5	17	27.2	16	26.0	15	24.5
肺炎	25	41.3	28	44.8	30	48.4	35	56.2
腸炎	10	16.4	12	19.2	10	16.0	10	16.0
他	10	16.4	13	20.8	14	22.4	10	16.0

イ 臺東支廳 最近の大正十二年には、腸炎、先天性弱質に亞て第三位に下りし、其の比率に至りては前年よりも更に高し。

ロ 新港支廳 本支廳は單に比率よりのみ之を觀察する時は、甚だ激増したりと雖も、事實は不明の診斷の遞減せるに反比して遞増せしに外ならず。

ハ 大武支廳 本支廳の不明の診斷に屬するものは、本廳の他二支廳に比し低位にあるに拘はらず、逐歲増加の傾向にあるは注目し値すべき現象なり。

七 花蓮港廳 臺東廳の支廳別を觀るに、其の順位年に依りて上下すと雖も、本廳にありては然らず、各歲各支廳俱にマラリアの第二位に下ることなし。且つ第二位を占むる肺炎との較差を窺ひるに、約三倍に該るを知るへし。即ち其の事實次の如し。

□花蓮港廳マラリア死亡と次位にある肺炎との比較

死 因	大正九年		大正十年		大正十一年		大正十二年	
	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比
マラリア	15	25.5	17	27.2	16	26.0	15	24.5
肺炎	45	74.5	53	82.8	54	84.0	55	85.5

イ 花蓮支廳 各地に比し超群高率を持続せしか、近年其の傾向減少するやの曙光を觀たり。然して吾人の期待し得る程度に至るは遠き將來にあらざるを信す。

口 五里支廳 本支廳の百分比を鳥瞰するに花蓮支廳に比し、高率なるを看取すへし。其は本支廳は不明の診断として取扱はるゝもの、彼の花蓮支廳に較し著しく低率に依る影響なるか故に、人口千に對する比率を觀は鮮かに首肯するを得へし。即ち彼の一〇・一人に對比するに、我に於ては一・六人の低位にありて八・五人を示せり。但し如上は玉里對花蓮の比率問題に止まり、之を全島より窺知せむに、本支廳より長せるは、花蓮支廳の外、唯臺東廳の大武支廳を認むるに過ぎず。

ハ 研海支廳 本支廳は大平蕃地の管轄にして他方と異なる傾向あり。今最近大正十二年の事實を摘記せむに次の如し。

1 區と蕃地に於ける人口相半はす。同支廳の總人口千七百一人の内研海區に居住するもの八六九人、蕃地に在るもの八三二人なり。

2 内地人に最多なり。一七〇一人中本島人七七〇人、外國人主として支那人三六人、併して内地人は本島人より一二五人多く八九五人を算せり。

3 死因は數種に過ぎず。死因類別四十六種内、再掲十一を含む中、本支廳の死因は僅かに十二種に過ぎず。

如上に依りて本部落の特異なるを知るべきなり、而してマラリア死亡の比率は、一見高率を示せども、事實は死亡者過少なるに依る片映なりとすへし。左に全島に於ける大正九年乃至同十二年のマラリア死亡迄の順位及百分比例を擧ぐへし。

□大正九年乃至同十二年のマラリア死亡迄の順位及百分率

地方及順位	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年
1 肺炎	二〇・六	同	一八・五	同
2 流行性感冒	一一・五	肺結核	一〇・一	同
3 肺結核	一〇・九	麻疹	九・五	胃の疾患
4 胃の疾患	五・四	同	六・四	腎臓炎
5 腎臓炎	四・二	同	四・六	先天性弱質
6 老衰	三・四	先天性弱質	三・四	腸出血腸軟化
7 先天性弱質	二・七	腸出血腸軟化	三・〇	腸炎
8 腸炎	二・四	老衰	二・七	同
9 心臓の器質的疾患	二・二	肺炎	二・四	敬毒
10 脚氣	一・八	小兒の播瘧子癩	二・三	心臓の器質的疾患
11 小兒の播瘧子癩	一・八	急性氣管支炎	二・二	腸チフス
12 外因死	一・五	腸チフス	一・九	痲疹
13 腸炎	一・四	心臓の器質的疾患	一・七	急性氣管支炎
14 急性氣管支炎	一・四	敬毒	一・五	慢性氣管支炎
15 腸チフス	一・三	痲疹	一・五	脚氣
16 慢性氣管支炎	一・二	脚氣	一・五	小兒の播瘧子癩
17 腹膜炎	一・二	同	一・五	外因死
18 敬毒	一・二	外因死	一・四	腹膜炎
19 腸出血腸軟化	一・一	腹膜炎	一・三	腸炎
20 腸出血腸軟化	一・一	腸炎	一・一	マラリア
			一・〇	慢性氣管支炎



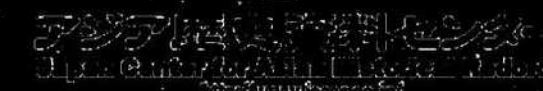


新 竹 郡																					
6	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
老衰	肺結核	肺炎	急性気管支炎	腹膜炎	心臓の器質的疾	腎臓炎	先天性弱質	外因死	マラリア	流行性感胃	肺炎	慢性気管支炎	胃の疾患	肺炎	マラリア	老衰	小児の播種子癩	急性気管支炎	肺結核	肺炎	老衰
三八	三四	三三	三〇	二五	二二	二一	二一	一六	一四	二二	二〇	六二	六二	一〇	一四	一六	五二	三〇	三三	三四	三八
同	肺炎	腹膜炎	マラリア							肺炎	麻疹	同	同	同	同						同
四三	同	同	三九	三四	三三	三二	三〇	二九	二七	二七	二二	二二	一六	一〇	一〇	九	七	七	七	七	四
同	同	腎臓炎	先天性弱質	急性気管支炎	マラリア					慢性気管支炎	胃の疾患	肺炎	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四八	四六	三七	三七	三六	二九	二九	二八	二八	二八	一〇	八	八	六	六	六	六	六	六	六	六	六
先天性弱質	慢性気管支炎	同	心臓の器質的疾	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
四三	四一	三四	二四	二四	二二	二二	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一	二一
		脳出血脳軟化	マラリア																		
			一八																		

大 深 郡																						
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
先天性弱質	肺炎	肺結核	慢性気管支炎	脚氣	急性気管支炎	腹膜炎	散毒	腎臓炎	外因死	心臓の器質的疾	マラリア	流行性感胃	肺炎	肺炎	胃の疾患	小児の播種子癩	腎臓炎	慢性気管支炎	老衰	急性気管支炎	マラリア	
三二	二五	二二	二二	一八	一八	一八	一六	一五	一三	一一	一〇	一六	一五	一五	一五	一五	一四	一三	一三	一三	一三	一三
小児の播種子癩	腹膜炎	肺炎	同	肺結核	急性気管支炎	マラリア						麻疹	同	同	胃の疾患	同	同	同	同	同	同	同
三〇	二九	二七	二七	二二	一九	一八	一七	一七	一七	一七	一七	一三	一四	一四	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
老衰	マラリア											肺炎	同	同	腎臓炎	胃の疾患	マラリア					
三二	二八											一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
腎臓炎	外因死	腸出血脳軟化	脚氣	肺炎	マラリア							同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三四	一九	一九	一八	一八	一六	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

大 屯 郡				蠶 中 市					新 竹 州 全 管					大 湖 郡					
1	4	3	2	1	5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1	2	1	4	3
肺炎	慢性気管支炎 マラリア	肺炎	慢性気管支炎	肺炎	マラリア	胃の疾患	肺結核	流行性感冒	肺炎	マラリア	慢性気管支炎	小児の播痢子痢	胃の疾患	流行性感冒	肺炎	マラリア	肺炎	胃の疾患	マラリア
二六・六	五・九	二九・二	七・七	二九・二	三・九	五・〇	六・七	一〇・一	三二・六	三・四	四・九	六・二	七・八	一〇・四	一一・五	一六・七	六・六	六・八	六・六
同	同	同	肺結核	同	マラリア	胃の疾患	マラリア	肺結核	同	同	麻疹	慢性気管支炎	小児の播痢子痢	胃の疾患	同	マラリア	肺炎	肺炎	同
二〇・五	六・三	二二・二	七・六	二二・二	五・七	六・二	六・二	一一・一	二〇・四	四・四	四・五	五・〇	七・七	九・六	一〇・九	一四・三	七・一	七・四	七・一
同	同	同	マラリア	同	同	同	同	同	同	同	マラリア	同	同	同	同	同	同	同	同
二二・九	七・三	一八・八	七・三	一八・八	六・六	七・三	七・三	一〇・一	二二・一	マラリア	老衰	先天性弱質	胃の疾患	肺炎	肺炎	一七・八	同	マラリア	マラリア
同	マラリア	同	肺結核	同	同	同	肺結核	肺炎	同	マラリア	マラリア	老衰	先天性弱質	胃の疾患	肺炎	肺炎	同	同	同
一五・四	六・八	七・八	七・八	一〇・〇	五・六	八・五	一三・二	一八・八	一八・八	四・四	四・五	五・三	七・二	九・〇	九・四	一一・五	七・一	七・一	七・一

苗 栗 郡		竹 南 郡					竹 東 郡														
2	1	8	7	6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
肺炎	小児の播痢子痢	肺炎	老衰	肺炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	胃の疾患	肺炎	小児の播痢子痢	肺炎	肺結核	肺炎	急性気管支炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
二二・二	七・五	四・六	五・一	五・八	七・二	七・六	七・七	七・七	八・九	一・八	二・〇	二・二	三・〇	三・〇	三・六	四・五	五・〇	五・六	八・〇	九・七	一七・一
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
七・八	八・九	四・六	四・八	五・七	六・二	六・二	七・六	八・二	一〇・〇	二・四	三・八	三・八	三・〇	三・六	四・五	五・四	五・八	九・七	一三・九	一三・九	一四・五
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九・六	九・六	五・二	五・三	五・三	五・五	六・二	六・三	七・〇	一〇・八	三・六	三・九	三・九	三・六	三・九	四・三	四・四	四・四	九・九	一〇・五	一四・五	一四・五
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
一〇・二	一〇・二	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九	五・九



北 斗 郡							真 林 郡							彰 化 郡						
7	6	5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3
マラリア	慢性気管支炎	胃の疾患	肺炎	肺炎	流行性感胃	流行性感胃	マラリア	急性気管支炎	腎臓炎	先天性腎質	流行性感胃	肺炎	肺炎	胃の疾患	肺炎	マラリア	肺炎	肺炎	胃の疾患	流行性感胃
三・九	四・一	四・二	六・二	六・三	一六・八	二二・三	二・三	二・八	三・一	三・九	四・〇	四・六	六・五	七・〇	二一・八	五・五	六・六	六・八	六・八	七・一
			マラリア	肺炎	同	同	マラリア	急性気管支炎	肺炎	先天性腎質	腎臓炎	同	同	同	同	マラリア	肺炎	肺炎	慢性気管支炎	肺結核
			七・四	八・二	九・六	一八・八	三・六	三・九	四・〇	四・六	四・六	八・五	九・六	一八・一	六・九	四・三	四・七	五・四	六・二	六・九
				マラリア	同	同	同	同	腎臓炎	同	肺炎	同	同	同	マラリア	同	同	肺炎	同	同
					一七・〇	一七・〇	四・〇	四・六	五・〇	五・一	五・三	九・八	一・一	一七・二	七・〇					
			マラリア	肺炎	肺炎	肺炎						同	肺炎	肺炎	同					同
			一一・六	一一・八	一七・五	一七・五						一一・九	一三・一	一五・一	九・七					

大 甲 郡		東 勢 郡					豊 原 郡									
2	1	6	5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	
虎列刺	肺炎	マラリア	肺炎	肺炎	胃の疾患	流行性感胃	肺炎	マラリア	腎臓炎	痘瘡	慢性気管支炎	肺炎	胃の疾患	流行性感胃	肺炎	肺炎
九・七	二〇・三	四・九	五・四	七・〇	七・四	八・二	二一・二	二・四	二・五	二・五	二・六	四・九	五・七	一一・九	二・二	二・二
胃の疾患	同	同	急性気管支炎	肺炎	肺炎	胃の疾患	同	マラリア	肺炎	肺炎	慢性気管支炎	先天性腎質	肺炎	胃の疾患	肺炎	肺炎
八・一	二一・五	四・四	五・〇	七・九	七・九	八・二	二一・〇	二・四	二・五	二・六	三・〇	四・五	七・四	八・六	二・四	二・五
同	同	マラリア	肺炎	肺炎	胃の疾患	肺炎	同	マラリア	肺炎	肺炎	慢性気管支炎	老衰	同	同	同	同
一〇・〇	一七・七	七・四	七・八	九・三	九・四	九・七	一五・七	三・〇	三・五	三・五	三・五	五・三	六・一	九・七	九・五	一〇・六
肺炎	肺炎		マラリア	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	同	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
一四・五	一四・六		五・八	九・〇	一三・五	二〇・六	四・六	三・五	六・三	六・三	六・三	六・九	七・二	一一・五	五・〇	七・七

新 化 郡		新 豊 郡			新 南 市									新 南 市						
1:	2	1	8	2	1	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	5	4
肺炎	マラリア	肺炎	マラリア	肺炎	肺炎					慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	マラリア	マラリア
二五・五	八・九	一六・九	五・九	六・八	一四・九					二・三	二・七	二・九	三・二	四・〇	四・七	五・五	七・七	一三・九	二二・八	五・四
同	同	同		マラリア	同					マラリア	同	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	マラリア	マラリア
二二・八	同	一六・五	七・九	一三・八						二・八	三・二	三・八	四・三	四・七	四・七	六・五	一三・九	二二・五	七・〇	
同	同	同	同	同								マラリア	マラリア	マラリア	マラリア	マラリア	マラリア	マラリア	同	
一九・九	同	一六・九	八・四	一三・九															マラリア	同
	同	同	マラリア	肺炎															老衰	同
一七・〇	同	一八・四	八・四	一四・四	一五・〇					二・〇	二・〇	二・三	三・〇	四・〇	五・一	五・三	一〇・五	一一・九	一一・九	八・〇
	同	同		同								慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎
	同											心臓の器質的疾	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化	腸出血腸軟化
	同											慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎
	同											慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎

新 高 郡			能 高 郡		南 投 郡															
3	2	1	2	1	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
胃の疾患	流行性感胃	肺炎	マラリア	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	慢性気管支炎	肺炎	肺炎
六・二	八・三	二四・三	一三・三	二九・七	三〇・一	一三・一	一〇・〇	一九・四	二二・七	二二・八	三・三	三・三	三・三	三・四	四・五	五・一	五・四	七・二	三〇・五	同
肺結核	胃の疾患	同	同	マラリア	マラリア	マラリア	同	同	マラリア					マラリア	麻疹	同	同	同	同	同
七・二	七・六	二〇・〇	同	二二・八	二二・九	同			二四・〇					五・四	五・七	七・一	九・四	九・四	二一・八	同
マラリア	マラリア	同	同	肺炎	肺炎	肺炎			同					マラリア	マラリア	マラリア	マラリア	マラリア	同	同
八・四	八・七	一七・八	同	一七・八	一八・二	同			二四・三					七・三	七・三	八・七	八・九	一四・四	一四・四	同
肺結核	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎			同					同	同	同	同	同	同	同
八・四	一三・六	一六・二	二二・七	一六・四	一〇・六	二八・一			二二・五					七・八	七・八	九・七	一〇・五	一八・二	一八・二	同





北 港 郡					東 石 郡			臺 南 州 全 管		高 雄 郡					岡 山 郡				
1	2	3	4	5	1	2	3	1	2	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
マラリア					流行性感胃	肺炎	マラリア	肺炎	マラリア	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
一三・〇					一五・六	一四・八	一〇・五	二〇・七	八・三	二〇・〇	一〇・三	六・七	六・二	六・二	一六・七	七・二	七・二	七・二	七・二
肺炎					マラリア	肺炎	マラリア	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
一五・〇					一四・二	八・三	六・二	一五・八	一〇・九	一七・三	一〇・一	七・二	六・二	五・四	一五・八	九・一	八・一	五・四	四・八
同					同	肺炎	肺炎	同	同	同	同	肺炎	肺炎	肺炎	同	同	同	同	同
一六・九					一八・二			一五・五	一三・五	二〇・一	九・六	七・九	六・五	二〇・三	二〇・三	九・七	七・六	五・九	五・八
肺炎					肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
一一・二					一八・二			一五・五	一三・五	二〇・一	九・六	七・九	六・五	二〇・三	二〇・三	九・七	七・六	五・九	五・八
同					肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
一六・八					一五・四	一四・三	一二・六	一五・八	一一・二	二二・〇	一一・二	八・五	六・一	一八・五	一八・五	一三・八	七・八	六・〇	二・三

曾 文 郡					北 門 郡			新 豊 郡		嘉 義 郡			斗 六 郡					虎 尾 郡				
2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	1	2	3	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎
六・五	六・〇	五・九	五・八	五・七	一六・九	一〇・一	九・四	二七・七	九・五	二四・六	二四・一	七・三	二四・一	一一・一	九・七	二一・三	七・七	七・七	七・六	七・六		
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎		
九・七	九・七	九・七	九・七	九・七	一〇・七	一〇・七	一〇・七	一六・一	一六・一	一五・三	一四・四	一五・二	一四・四	一四・四	一四・四	一四・四	一四・四	一四・四	一四・四	一四・四		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
一三・二					一一・七	一一・八	一一・八	一八・六	一八・六	一六・二	一六・二	一九・二	一四・二	一四・二	一四・二	一四・二	一四・二	一四・二	一四・二	一四・二		
肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎	肺炎		
一一・〇					一七・七	一七・七	一七・七	一八・五	一八・五	一三・九	一三・七	一三・九	一四・三	一四・三	一四・三	一四・三	一四・三	一四・三	一四・三	一四・三		



高雄州全管	2	マラリア	八・六	同	七・八	同	九・四	肺炎	二・八
臺東支廳	1	マラリア	七・〇	肺炎	四・二	同	四・九	肺炎	三・八
	2	マラリア		マラリア	二・七	同	二・六	先天性弱質	三・八
	3	マラリア		マラリア	二・七	同	二・六	先天性弱質	三・八
新港支廳	1	肺炎	一・六	マラリア	二・六	同	五・五	肺炎	一・五
	2	腦出血腸軟化	〇・九					肺炎	六・五
	3	マラリア	〇・七					先天性弱質	五・〇
	4	マラリア						マラリア	四・七
大武支廳	1	マラリア	一三・〇	同	一四・七	同	一五・五	同	二八・四
臺東廳全管	1	マラリア	五・七	同	三・七	同	四・六	同	七・六
花蓮支廳	1	マラリア	二六・〇	同	三二・〇	同	二三・〇	同	一五・九
玉里支廳	1	マラリア	三三・二	同	四二・三	同	三四・九	同	四〇・〇
研海支廳	1	マラリア	一五・二	同	二〇・六	同	一三・六	同	三一・〇
花蓮港廳全管	1	マラリア	二七・五	同	三四・一	同	二五・六	同	二一・九

第三 街庄區とマラリア

本病分布の情勢を更に細分して郡、支廳下に於ける三十四街、二百二十七庄、十九區別に叙述せむとす。是れ即ち同郡又は同支廳内に在りても地勢及び氣象等の關係上其の濃度を異にするはなり。

を異にするはなり。

本項の資料は凡て既刊臺灣マラリア統計原表の部に依るを以て大正六年乃至同十年間の事實なりとす。而して如上五箇年間にマラリア死亡を認めざるは新竹州竹東郡の内横山、北埔の兩庄のみにして其の他の街庄區に在りては孰れも之を認めざるはなし。

全島に於てマラリア死亡の最多なるは花蓮港廳平野區(花蓮支廳)にして人口千に付二〇人の多數を示して第一位たり。亞て臺東廳太麻里區(大武支廳)の一六・一人之に次ぎ、以下順次に臺南州大埔庄(嘉義郡)の一三・二人、臺中州國姓庄(能高郡)の一・二人等とす。寡少なるは新竹州の内六家庄(新竹郡)、龍潭庄(大溪郡)、竹東庄(竹東郡)、及び高雄州白沙庄(澎湖郡)の各〇・一人にして亞て臺北州の内松山庄(七星郡)、熊溪庄(宜蘭郡)、林口庄(新莊郡)と新竹州造橋庄(竹南郡)及び臺東廳新開園區(里壠支廳)の各〇・二人なりとす。

今全島の街庄區中新竹州に本病の死亡なき二庄を除き、其の他の二百七十五街庄區の人口千に對するマラリア死亡率を觀るに、其の死亡率一人未滿者の街庄區最多にして全島の約四分の一なる六十六を算して二四〇を示せり。就中新竹州の二十三街庄同州の五六・二〇(%)を最多とし、臺北州の一九街庄同州の四八・八(%)之に亞く。次に二人及三人未滿の地方を超過して多數を示すは、五人未滿の五十六街庄區にして二〇・四(%)を占む、就中最多なるは臺南州の二十八庄同州の四一・八(%)及び高雄州の十九街庄同州の三九・〇(%)なりとす。之を要するに臺北、新竹兩州は一人未滿級の街庄過半を占め、臺中州及び臺東廳は一人以上二人未滿の街庄區約三分の一を占め、臺南、高雄兩州に在りては三人以上五人未滿の街

庄全州に於て約半数に達するの多数を示し、花蓮港廳は高率なる五人以上十五人未満に全廳の街庄區中三分の二の多数を占めたり。其の詳細を表示するに次の如し。

□マラリア死亡率に依る街庄區（人口千に付）

死亡率	臺北州		新竹州		臺中州		臺南州		高雄州		臺東廳		花蓮港廳		計	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
一人未満	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0
二人未満	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0
三人未満	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0
五人未満	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0
十人未満	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0
十五人以上	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0
計	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0	1000	100.0

更に街庄區に依るマラリア死亡率を州廳別に略叙せむとす。

一 臺北州 州廳別に於て叙述せしか如く本州の平均死亡率は一・〇人にして、之を本州の三十九街庄より觀察するに平均位以下にあるは恰も半数の十九街庄を占む。州中の最多は蘇澳庄(蘇澳郡)の三・九人を最とし、之に亞て多数とする萬里庄、貢寮庄(二庄とも基隆郡)にして前者は二・六人、後者は二・五人と比するに甚たしき逕庭を存せり。本州のマラリア死亡高率によりて流行地帯を觀察するに、東海岸の蘇澳庄より五結庄、頭圍庄以上二庄とも宜蘭郡を経て基隆郡に至る一脈と、他の一は淡水街より八里、三芝、石門等の各庄

に瀰蔓するを窺知すへし。

二 新竹州 本州は人口千に付き一人に達せざる地方二十三街庄を認め、全州(四十一街庄)の過半に逮へり。就中大湖郡は各庄凡て最高又は高位を占め、苗栗郡亦平均位以上ならざるはなく、殊に竹南郡の南庄は多数中に伍して異彩を放てり。之を要するに既記の如く本州のマラリア地帯は大湖、苗栗の兩郡の外竹南郡の一部なるを知るへし。

三 臺中州 本州の平均は一・八人にして平均位以下にあるは三十四街庄、又平均に等しきは外埔庄(大甲郡)の唯一庄に止まり、その他平均位以上を示すものに二十五庄あり。而してマラリア地帯と目するは既記の如く新高、能高及び竹山の三郡地方にして、其の他濃厚地に列すものに新社庄(東勢郡)、大竹庄、花壇庄(以上二庄は俱に彰化郡等あり。豊原、員林の兩郡内には平均位を越ゆるものなく、又大甲郡下にて平均位を越ゆるものには大肚庄(二・四人)あるのみ。

四 臺南州 本州の人口千に對するマラリア死亡率の平均は三・五人にして之を非マラリア地方と目すへき臺北、新竹兩州に比すれば約四倍に當り、又臺中州と比するに約倍加せり。斯く本州の高率なるを概はマラリア地方と謂ふも故なきにあらざるへし。而して街庄別に其の内容を窺ふに、平均位は本州六十七街庄中學甲庄(北門郡)と古坑庄(斗六郡)の二庄にして、平均位に達せざるは全州の約三分一に該る二十七街庄を算するに過ぎず、之を臺北、新竹及び臺中の各州に比し、一般に其の比率の高きを知るべきなり。

本州の最多は大埔庄(嘉義郡)の一三・二人にして本州平均の約四倍に當り五州中の最高位

に在り、故に本庄の右に出づるものは東海岸地方に究むるも僅かに二區に過ぎず、即ち太麻里區(臺東廳)の一六・一人と、平野區(花蓮港廳)の二〇・〇人なり。次て官田庄(曾文郡)の九・五人、中埔庄(嘉義郡)の七・八人、鹿草庄(東石郡)の七・七人等順次に之に亞く。東石郡は鹿草庄を最高位とし、最低位は全州の約平均位にある六脚庄(三・四人)にして全郡濃厚地帯にあるを以て州中の最高郡となす。又嘉義郡の大埔庄及中埔庄は孰れも最高位に屬するも(嘉義街一・六人)、其の他の各庄は比較的低位を占むるか爲め、本郡は東石、新營、曾文、斗六及び新化の次位にあり。翻つて寡少なるは新豐、虎尾の兩郡にして前者は仁德庄(四・七人)、後者は土庫庄(四・六人)の各一庄宛を除けば、この兩郡下の街庄は凡て平均以下に在り。

**五 高雄州** 本州のマラリア死亡率を街庄別に觀察するに、他州と其の趣を異にせり、即ち、濃厚は大體に於て郡に依りて區別し得へし(一)澎湖郡の一街、四庄は凡て白沙庄(〇・一人)より望安庄(〇・四人)の間にありて本州の最低位を占めなり。(二)岡山郡は最近高雄郡廢止の結果新たに編入したる燕巢庄(三・八人)を除けば、凡て全州平均位(三・一人)以下に在り(三)旗山、鳳山の兩郡は孰れも全州平均位以上にあり、就中甲仙庄(旗山郡)の一〇・一人は全州第一の高位を保てり(四)屏東、潮州の兩郡も本病の濃厚地帯に屬し、前者は里港庄(二・二人)後者は新埤庄(二・〇人)の各一庄を除けばこれ又全州平均位以上にして、就中六龜庄(屏東郡)は九・三人を示して全州第二位の高位に在り(五)東港、恒春の兩郡は約平均位にして甲郡に在りては林邊庄の四・八人より東港街の二・一人の間にあり、又乙郡に在りては滿州庄の二・六人より車城庄の三・三人の間に在り、要するに本州マラリアの分布方は、殆ど郡

の境界線に依りて其の度合を分割せられたるものと謂ふへし。

**六 臺東廳** 既記の如く、本廳と花蓮港廳とは生蕃部落にして醫師の診療を受くるもの寡く、爲めに不明の疾患として處理せらるゝ結果、病名として計上されたるもの僅少となり、従つて其の比率の低下を觀る所以なり。而して濃厚なるは大武支廳内の太麻里區(六・一人)大武區(八・五人)及び里壠支廳下の鹿野區(四・〇人)等之に屬し、又寡少なるは里壠支廳の新興園區と臺東支廳の卑南區にして孰れも一人に達せず。

**七 花蓮港廳** 全島中最高位にあるは本廳にして、同廳平均は八・四人を示せり。就中平野區(花蓮支廳)最高にして二〇人を示し、玉里庄は最多平野の半数にして一〇人を示し、花蓮港街は本廳文化の中心都邑にして同廳平均の約半の好調にあれども、之を臺北州の最高首位蘇澳庄に比すれば約一人高く、又之を新竹州に徴するに、儻すへき地方なし、即ち其の比率は四・八人を示せばなり。

全島各街庄區別人口千に對するマラリア死亡率を表示すれば次の如し。

□大正六年乃至同十年の街庄區別マラリア死亡率(人口千に付)

一 臺北州

1 松山 庄(七星郡)	〇・二	4 內湖 庄(七星郡)	〇・三
2 礁溪 庄(宜蘭郡)	〇・二	5 壯圍 庄(宜蘭郡)	〇・三
3 林口 庄(新莊郡)	〇・二	6 石碇 庄(文山郡)	〇・三

6	5	4	3	2	1	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
名	永	内	石	神	豊	後	竹	考	實	八	楊	龜	新	頭	平	關	大	中	新	湖	
同	靖	埔	岡	岡	原	龍	南	林	山	塊	梅	山	屋	分	鎮	四	溪	邊	埔	口	
庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	
南	員	登	東	豐	原	竹	竹	桃	桃	桃	中	中	中	中	中	新	大	中	新	新	
投	林	原	勢	原	郡	南	東	園	園	園	園	園	園	園	園	竹	溪	溪	溪	溪	
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	
〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
七	七	六	五	五	三	〇	〇	〇	九	九	八	七	七	六	六	五	五	五	五	五	
12	11	10	9	8	7	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	
潭	南	田	二	坡	大	卓	大	湖	湖	頭	四	南	三	公	苗	苑	觀	銅	大	蘆	
子	投	尾	水	心	雅	蘭	湖	潭	香	屋	湖	又	館	栗	程	音	籬	園	竹		
庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	
豐	南	北	員	登	原	大	苗	苗	竹	苗	苗	中	苗	栗	栗	栗	栗	栗	栗	栗	
原	投	斗	林	原	郡	湖	湖	栗	南	栗	栗	園	園	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	
〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	二	二	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
九	八	八	八	八	八	〇	七	五	三	三	二	九	七	六	六	四	三	二	二	二	

5	4	3	2	1	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
新	造	竹	龍	六	五	土	羅	金	冬	新	新	羅	中	北	宜	士	沙	良	三	繁	板
竹	橋	東	潭	家	脫	城	東	山	山	店	莊	洲	和	投	蘭	林	止	山	峽	歐	橋
街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	街	庄	街	庄	庄	庄	庄
新	竹	竹	竹	新	新	海	羅	基	羅	文	新	海	海	七	宜	七	宜	立	海	海	板
竹	南	東	東	竹	莊	山	東	隆	東	山	莊	山	山	星	蘭	星	蘭	蘭	山	山	板
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
〇	〇	〇	〇	〇	一	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	二	一	一	一	一	一	〇	〇	九	八	七	六	六	六	五	五	五	四	三	三	三
10	9	8	7	6	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	
三	桃	香	紅	峨	蘇	萬	真	淡	八	三	瑞	頭	坪	深	五	双	石	平	三	七	
灣	園	山	毛	眉	澳	里	寮	水	里	芝	芳	園	林	坑	結	溪	門	溪	星	埔	
庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
竹	桃	新	竹	竹	蘇	基	淡	淡	基	宜	文	羅	羅	淡	七	羅	羅	羅	羅	羅	
南	園	竹	東	東	澳	隆	水	水	隆	蘭	山	東	東	水	星	東	東	東	東	東	東
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
〇	〇	〇	〇	〇	三	二	二	二	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	四	四	四	三	九	六	五	四	三	二	〇	九	八	四	四	四	四	三	二	二	二

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
漢小	水麻	北門	社	香	民	下	替	仁	軍	化	廟	化	背	殿	義	順	港	桐	嶺	二	龍	永	西	永
庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄
嘉	北	曾	此	新	嘉	曾	新	北	新	新	新	新	新	北	嘉	新	北	斗	斗	斗	新	新	新	新
義	港	文	門	義	義	文	文	門	北	化	化	化	化	化	義	北	北	斗	斗	斗	新	新	新	新
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
三四	三二	三一	三一	三〇	二九	二五	二五	二四	二四	二三	二一	一八	一七	一六	一六	一五	一五	一一	一一	一一	〇八	〇五		
48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	
山玉	仁	土	斗	竹	四	太	斗	水	大	大	元	南	四	新	佳	左	安	古	學	六	海	虎		
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	街	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新
化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡
五〇	四八	四七	四六	四六	四五	四五	四四	四四	四四	四三	四一	四〇	三九	三八	三八	三八	三八	三五	三五	三五	三四	三四	三四	三四

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	
福外	福	沙	沙	沙	鹿	沙	大	橋	草	埠	大	輪	龍	田	大	南	社	溪	員	埔	四	彰	清	
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
彰	大	彰	北	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	
化	甲	化	斗	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	
一九	一八	一七	一六	一六	一六	一六	一五	一五	一四	一四	一四	一四	一四	一三	一三	一二	一二	一一	一〇	一〇	〇九	〇九		
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	
圖集	竹	魚	大	鹿	花	新	中	勢	察	木	峯	城	平	斗	郭	肚	屯	里	林	日	州	勢	里	
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
能	新	竹	新	彰	竹	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	彰	
高	高	山	高	化	山	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	化	
郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	
二二	七四	六四	六四	三五	三五	三〇	二九	二八	二八	二八	二六	二五	二四	二四	二四	二四	二三	二二	二二	二一	二〇	二〇	一九	

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49
岡里	東新	彌路	湖望	西安	湖安	馬西	白公	沙公	高雄	白柳	鹽水	河營	白柳	鹽水	朴子	甲袋	湖岸	埔營	新營	西營	
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
岡里	東港	彌港	湖港	西港	湖港	馬港	白港	沙港	高雄	白港	鹽港	河港	白港	鹽港	朴港	甲港	湖港	埔港	新港	西港	
二四	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	〇九	〇八	〇七	〇六	〇五	〇四	〇三	〇二
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	66	65	64	63	62	61	60	59		
大球	九塊	萬丹	東城	新園	左營	補冬	佳春	恒春	滿州	阿羅	大官	中鹿	官鹿	中鹿	鹿香	鹿後	鹿新	鹿東	鹿義		
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
鳳山	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港	東港
三七	三五	三五	三四	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	
瑞新	大庄	花庄	吉野	花蓮	成廣	加走	臺東	卑南	新開	仁林	鳥松	小埔	屏東	大樹	美濃	枋寮	旗山	旗山	旗山	旗山	旗山	旗山	旗山
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
瑞新	大庄	花庄	吉野	花蓮	成廣	加走	臺東	卑南	新開	仁林	鳥松	小埔	屏東	大樹	美濃	枋寮	旗山	旗山	旗山	旗山	旗山	旗山	旗山
七五	六七	五七	四八	三四	一五	一〇	一〇	〇三	〇二	五〇	四八	四七	四六	四五	四五	四四	四三	三八	三八	三八	三八	三八	三八
9	8	7	6	5	10	9	8	7	6	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38		
平野	壽林	鳳里	玉里	太武	大武	鹿野	鹿野	鹿野	鹿野	甲六	潮山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
平野	壽林	鳳里	玉里	太武	大武	鹿野	鹿野	鹿野	鹿野	甲六	潮山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山	枋山
二〇	一一	一〇	一〇	一六	一六	八五	四〇	三二	二〇	一〇	九三	八四	八二	七三	五九	五七	五六	五六	五五	五五	五五	五五	五五



### 第五章 季節とマラリア

死亡の季節に聯關する影響たるや甚大なり。歐州にありては死は酷寒の季に多しと謂へり、并は小兒の寒烈に堪えざる結果なりと説かれたり。されども希臘、伊太利等の風土の佳良なる地方に在りては、寧ろ炎暑の期に死亡多しと謂へり。併かも疾病に依りて季節に差異あるは當然なり、例へば呼吸器系の疾患は冬春の季に於て死亡多く、消化器系の疾病は夏秋期に死多きか如し。遮莫、マラリアは果して何れの季に於て多數とすへきや、聊か統計の示す所に依りて筆を染めむ哉。

#### 一 マラリア死亡百分比

マラリア死亡の各月に依る多寡を觀察するに、年を通して著差なく殆ど平衡を保てり。是れ或は本病の流行性全身病たる所以なる歟或は本島は四季を通して寒暖に過差なき所以なりや、或は四時流行を極め猖獗を呈する風土病たるか爲なる歟、或は冬季に減せざるは暖國に慣れたる習性より防寒の處置宜しきを得ざるに因る歟、或は經濟的關係に基因する歟、先づ本病死亡の月別に分ちたる百分比を算出するに、其の實數を大正六年乃至同十年の五箇年間に需めたるに、最大値は一一・三にして、最小値は五・八を得たり。即ち一〇〇を十二箇月にて除すれば其の商の八・三は各月の平均位なるを知るへし、されば數値の最大は平均より三・〇高く、最小は二・五低きに過ぎず。是れ本病の死亡か月に絡む影響の

微弱なるを知るべきなり。

今仔細に之を檢覈するに、最多は十一月の一一・三%にして、十月の九・九%之に亞く、寡少なるは四月の五・八%を最とし、三月の六・三%、二月の六・六%等之に屬す、而して各月平均位(八・三%)以上を示す月をマラリア期とし、平均位以下を非マラリア期とせばマラリア期に屬するは七月より翌年一月に至る七箇月にして、非マラリア期は二月より六月に至る五箇月間に在るを以て、本病は晩夏を通して秋冬季に多き實況にあるを窺知すべし。今累年に於けるマラリア期の有無に依る百分比を表章するに次の如し。

□マラリア期の有無に依り分ちたる比例

大正	マラリア期	非マラリア期	計
六 年	六三・四	三六・六	一〇〇・〇
七 年	六八・八	三一・二	一〇〇・〇
八 年	六九・〇	三一・〇	一〇〇・〇
九 年	六七・九	三二・一	一〇〇・〇
十 年	六七・四	三二・六	一〇〇・〇
平均	六七・二	三二・八	一〇〇・〇

其の詳細は次表の如し。

□マラリア死に百分率

月	大正六年	同七年	同八年	同九年	同十年	平均
一	九三	八三	八八	二三	七五	八五

計	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
100.0	85.0	90.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	95.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	85.0	90.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	95.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	85.0	90.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	95.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	85.0	90.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	95.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

更に州廳別の兩期に於ける、比率を表章するに次の如し。  
 □州廳別マラリア期の有無に依り分ちたる比例

州	マラリア期	非マラリア期
北 州	七二	二二
新 州	六八	三二
中 州	六九	三〇
南 州	六七	三三
高 州	六一	三九
東 州	五七	四三
花 州	六四	三五

二 全年を通し平均一日の死亡を百とし、各月の平均一日死亡の割合

月に依る多寡を嚴格に判せむとせば、各月に於ける一日平均数を究めざるべからず。是れ他なし月に大、小、間ありて其の日数の相等しからざるが爲なり、即ち日数の多き月は勢ひ多數を示し、二月の如く日数の少き月は其の數の寡かるべき理なればなり、故に實數にては直に其の多寡を判定し難し。茲に於てか各月の一日平均数を究むるの要あり、然れども唯各月間の平均數のみの算出にては、各月とも獨立したる別異の數値となるを以て、更に全年の總數に比例せしめざるべからず。即ち各月の一日平均値を、各年の一日平均値に比例せしむるの要を生ず、斯くしてこそ正鵠に比較し其の多寡を決すべきなり。今全年を通し平均一日にマラリアの死亡を百人ありとし、如上の算出法に依る相對數を究め比較せむとす、故に各月に於ける比率の百以上に達せし月は多數なるを示すこと勿論なり。

大正六年より同十年に至る、五箇年間の同上割合を観るに、季節に依る影響の比較的平衡なるは前叙の如し。而して最多は十一月の一三九・一人にして十月の一六・三人、十二月の一・五・六人之に亞く、寡少なるは四月の七〇・三人にして、之を最多十一月に比すれば約半數に過ぎず。夫れより三月の七三・九人、五月の七八・三人等之に屬す。之を前項の百分比に較ぶれば、其の順位としては異動なきも、其の割合に在りては精粗同じからず。但し寡少の部に於る五月は百分比に在りては二月の次位にあり、是れ二月は實數にては五月より低きも日數の短きが爲に一日平均數の割合は反つて上昇したるに依るなり。

要するにマラリア死亡の多きは秋蕭々たる季節にして、又寡きは陽春の季なりとす。又半面より之を観るに本島人は暑熱に慣るゝも寒冷には脆きを證するものと謂ふへし。次に一般死亡との對照を試るに、一般死亡の多數なるは、一月の一二八・二人にして、十一月の一一七・二人、二月の一一三・〇人之に亞く、故に一般死亡は冬季に多きを知るへし。然るにマラリアは秋季に多し。然して寡少なるはマラリアと同じく春季にして、四月最寡七八・一人を示し、亞て五月の八四・三人、三月の八五・五人之に屬す。唯マラリアと異なるは其の比率にあり、即ち一般死亡は最高と最低との較差五〇・一人なるに比し、マラリア死亡は六八・八人の著差われはなり。

左に月別死亡に關する統計を表章し、詳説を委すへし。

□全年一日の平均死亡を百とし各月平均一日死亡の割合比較

月	マラリア		一般	
	實數	一年平均死亡を百とし各月平均	實數	一年平均死亡を百とし各月平均
一	七二五	一〇四・九	一一、五一九	一一八・二
二	五三三	八五・四	九、一六八	一一三・〇
三	五一一	七三・九	七、六七九	八五・五
四	四七〇	七〇・三	六、八二〇	七八・一
五	五四一	七三・三	七、五七四	八四・三
六	六〇二	九〇・〇	八、〇八一	九三・〇
七	七二一	一〇四・三	八、六七五	九六・六
八	七五八	一〇九・七	九、一七四	一〇二・一

月	實數	一年平均死亡を百とし各月平均	實數	一年平均死亡を百とし各月平均
九	七四三	一一一・一	八、三一四	九五・六
十	八〇三	一一六・三	八、四三一	九三・九
十一	九三〇	一二九・一	一〇、一八八	一二七・二
十二	七九九	一一五・六	一〇、一三四	一二二・八

更に季節の關係は全島同軌にあらざるものあるを以て、聊か彗筆を呵せむとす。

一 十一月を多數とする地方 全島平均と同じく、十一月を第一位の多數とするは臺北臺南及高雄の三州にして、甲は一七二・八人、乙は一五四・二人、丙は一二五・八人を示せり。而して爾餘の州廳に於ける十一月の傾向を観るに新竹州は第二位、臺中州は第三位とせり、臺東廳のみは遙に逕庭ありて第九位となせり。

二 八月を多數とする地方 全島平均に在りては八月は第五位にあれども、之を州廳別に觀察すれば新竹(二三・八人)、臺中(二三・九人)及び花蓮港(二〇・二人)の二州、一廳なりとす。かくて月別死亡の第一位は十一月にあらざれば、八月に限られ、僅かに異例を爲すは臺東廳の十二月とせしものあるに過ぎず。而して八月を多とするは時正に孟夏酷暑の候、健康者に在りても尙ほ且つ困難する所、況んやマラリア患者に於ておや。

三 四月を最少とする地方 全島平均と同じく四月を寡少とするは臺北、臺中及臺南の三州にして其の他の各州廳は寡少の二、又は三位とせしも亦定型的傾向の一端を窺ふ事を得へし。即ち新竹、高雄の二州及臺東廳は寡少の第二位、花蓮港廳は其の第三位とせり。其の他各州廳の趨勢は、大同小異なるを以て叙述を省略し、左に州廳別の詳細を掲記すへし。

大正六年乃至同十年の一年平均マラリア死亡(絶対数)

月	北	新	中	南	高	雄	東	花	全
一	10	15	20	25	30	35	40	45	50
二	12	18	22	28	32	38	42	48	52
三	15	20	25	30	35	40	45	50	55
四	18	22	28	32	38	42	48	52	58
五	20	25	30	35	40	45	50	55	60
六	22	28	32	38	42	48	52	58	62
七	25	30	35	40	45	50	55	60	65
八	28	32	38	42	48	52	58	62	68
九	30	35	40	45	50	55	60	65	70
十	32	38	42	48	52	58	62	68	72
計	210	240	270	300	330	360	390	420	450

大正六年乃至同十年の一年平均(100人)マラリア死亡(相對數)

月	北	新	中	南	高	雄	東	花	全
一	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	10.0
二	2.4	3.6	4.4	5.6	6.4	7.6	8.4	9.6	10.4
三	3.0	4.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	10.0	11.0
四	3.6	4.8	6.0	7.2	8.4	9.6	10.8	12.0	13.0
五	4.0	5.2	6.4	7.6	8.8	10.0	11.2	12.4	13.6
六	4.4	5.6	6.8	8.0	9.2	10.4	11.6	12.8	14.0
七	5.0	6.0	7.2	8.4	9.6	10.8	12.0	13.2	14.4
八	5.6	6.8	8.0	9.2	10.4	11.6	12.8	14.0	15.2
九	6.0	7.2	8.4	9.6	10.8	12.0	13.2	14.4	15.6
十	6.4	7.6	8.8	10.0	11.2	12.4	13.6	14.8	16.0
計	30.0	36.0	42.0	48.0	54.0	60.0	66.0	72.0	78.0

月	北	新	中	南	高	雄	東	花	全
一	10	15	20	25	30	35	40	45	50
二	12	18	22	28	32	38	42	48	52
三	15	20	25	30	35	40	45	50	55
四	18	22	28	32	38	42	48	52	58
五	20	25	30	35	40	45	50	55	60
六	22	28	32	38	42	48	52	58	62
七	25	30	35	40	45	50	55	60	65
八	28	32	38	42	48	52	58	62	68
九	30	35	40	45	50	55	60	65	70
十	32	38	42	48	52	58	62	68	72
計	210	240	270	300	330	360	390	420	450

終りに各州廳別に依る最多、最少の月を表章すへし。

州廳別最多、最少の兩極にある月(全年平均一日(1000に付き))

州廳	最多の月	最少の月
北州	十一月	四月
新竹州	十一月	四月
中州	八月	五月
南州	十一月	四月
高雄州	十一月	四月
東州	十二月	三月
花蓮港廳	八月	五月
全島	十一月	四月

### 三 氣温とマラリア

氣温の人體に影響あるは、恰も開歲、春を發はき百卉英を含み娟を競へるの時、人また健かなり、秋蕭々として白雲飛び、草木黃落するの時、人また殘なふ。況んや病質者に於ておや、其の影響するところ甚大なるは自明の事に屬す。オンデンフルヒに於て千八百三十一年より三十年間に亘り死亡と氣温の關係を調査せる記録に依れば次の如し。但し各年の平均死亡を千と假定したる結論なり。

冬寒く、夏暑き年 一、〇六五  
 冬寒く、夏涼き年 一、〇二〇  
 冬暖く、夏暑き年 一、〇〇七  
 冬暖く、夏涼き年 九四四

右に依れば嚴寒にして酷暑なる年は死亡夥多を示し、冬緩和にして夏涼爽なる年は死亡寡少なるを知るへし。夫れ疾病者は健體者に比し氣象の影響するや辛辣なり、然り人生の喜感、憂情は季と與に變するに歸すとや謂はむ乎。

本島に於ける、明治三十四年以降大正九年に至る二十箇年の平均氣温を観るに、各地の度差甚た微小なり、加ふるに各地の月に依る氣温の順位又同し。唯花蓮港廳の一、二月に順位の顛倒せるを見るのみ、即ち各地は等しく一月を十一位、二月を十二位と爲すに反し花蓮港廳は一月を十二位、二月を十一位とするあるのみ、左に氣温に依る順位を掲げむ。

〔氣温の順位及び最高、最低の地方（地方は測候所名、温度は攝氏）〕

順位	月	最高の地方	最低の地方	最高最低の差
第一位	七月	臺北	花蓮港	二・二
第二位	八月	臺北	花蓮港	〇・八
第三位	六月	恒春	花蓮港	一・〇
第四位	九月	澎湖	花蓮港	一・〇
第五位	五月	恒春	基隆	三・〇
第六位	十月	恒春	臺北	二・二
第七位	四月	恒春	基隆	四・四
第八位	十一月	恒春	臺北	三・六
第九位	三月	恒春	基隆	五・六
第十位	十二月	恒春	臺北	四・六
第十一位	一月	恒春	臺北	五・一
第十二位	二月	恒春	臺北	五・六

本島の孟暑は七、八月の候にして、嚴冬は二月を最とし、一月之に亞く。然してマラリア死亡は晩秋の十一月に最多を示すを以て、之を順位より觀るに第八位にして極寒極暑の季に非ざるを知るへし。然らばマラリア死亡は氣温と如何なる關係にある哉、之を他に需めざるへからず。

則ち知る、マラリアの死多きは氣候の激變に因由せるを、但し温暖に劇變する場合は其の影響なしとす。今左に各月に於ける氣候の前月との較差を表章せむとす。

□前月との温差

測候所	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
臺北	一・六	〇・五	二・五	二・九	二・八	三・三	一・三	〇・五	一・五	三・三	三・四	三・〇
臺中	一・五	〇・三	二・九	二・八	二・七	三・三	〇・八	〇・五	一・〇	二・六	三・四	三・〇
臺南	二・五	一・〇	二・〇	二・九	二・四	一・五	〇・四	〇・五	〇・五	二・三	三・三	三・〇
恒春	二・〇	〇・三	二・〇	二・六	二・五	二・四	一・一	〇・四	〇・五	二・一	三・〇	三・〇
臺東	二・〇	〇・三	二・〇	二・六	二・七	二・〇	〇・五	〇・五	〇・八	二・〇	三・〇	三・〇
花蓮港	二・〇	〇・七	一・五	二・九	二・九	二・八	〇・七	〇・五	一・二	二・五	三・三	三・四

右表を熟考するに、其の要約次の如し。

甲 暖氣に向ふ氣温にある場合

(一) 前月との温差の著大なるは、各地方孰れも四月とせり。但し臺東のみは著差の順位第二位にして第一位は三月とせる變例あり。即ち四月はマラリア死亡の最寡を示せしは前叙の如くにして、マラリア患者は暖氣に向ふ季節に於て、病勢の好調を看るなり。

(二) 暖氣に向ふ月は四月の外、三月、五月乃至七月にして、唯花蓮港は二月に於て迎暖に入るの變例あるを認めり。斯く二月より六月に至る期間は非マラリア期にあるは前叙の如し、但し七月は全島平均より考察するに、マラリア期にあれども、本月は殆ど中間期に屬し、之を地方別に觀る時は左の如し。

第二位とする地方 臺中州

第五位とする地方 新竹州 高雄州

第六位とする地方 臺南州 臺東廳

第七位とする地方 臺北州 全島平均

第八位とする地方 花蓮港廳

乙 寒氣に向ふ氣温にある場合

(一) 氣温の低下を前月に比して著差を現すは十一月なり。而してマラリア死亡の夥多なるは又十一月なるは前叙の如し。就中變例を認めたる地方に二あり、一は臺南にありては十二月を激差の首位とするも、十一月の第二位と比較するに僅かに〇・一度の高低に過ぎず。二は花蓮港にして本月を第三位とするも第一、第二位間孰れも〇・一度宛の差異なるを以て一位に比し〇・二度の差を認めたり、而かも花蓮港のマラリア死亡の第一位は八月なるを以て、同地方は全島の傾向に迎合せざるなり。

(二) 氣温の低下は各地方八月より翌年二月にありて、花蓮港の例外あり、即ち一月を以て低下の極とし二月は氣温の上昇に就く。本病の死亡期と合致せり。然して死亡に影響あるは、寒冷夫れ自體にあらすして、寒氣の激變に因由するを知るべきなり。

四 蚊族とマラリア

「本所に蚊か無くなれば大晦日」と謂ふも、本島は亞熱帯に位置し、蚊族の飛翔すること終歲絶えざるを以て、本病の原蟲を傳播して歇まず。本病は彼の黃熱病と同じく蚊類により

て傳染する疾患なるを想は、子も蚊となるまでの浮き沈みと風流視する事を得んや。併かも本島に於ける蚊族は季節に依りて旺盛なる否とに繋るのみなり。元來蚊族の産卵より子となりて羽化するに至る期間は季節に因りて同しからず。温暖の季に在りては産卵より羽化に至る期間は十日乃至二週間なりと謂へり。本島の中南部に於ける降雨量と、日照時数の多きは蚊族の孵化に好適なるを想はしむ。

蚊族の簇生期と衰頹期とが、マラリアに及ぼす影響は如何。今小泉理學博士の調査に係る、蚊族消長の統計に徴して考察せむとす。而して本統計の蚊類採集地は臺北市に於ける中央研究所構内にして、大正四年より同十一年に亘る、約九箇年の長期に達し。併かも各月を旬期に分ちたるの外、蚊族の種別並に雌雄の別に表章せられたれども、茲にはマラリア死亡との對照上アノーフエレス蚊族に關する調査を取り、之に累年別を綜合して、月別平均を算出し之を引用する事となせり。今月別に依る蚊族の浮沈を觀るに、年初より稍々減少の傾向を保ちたりしか三月に至りて漸く増加の趨向を探り、四月より五月に至り全年中の最高潮に達し、亞て六月漸減を示し、更に七月には僅かに増加を見たりしも、八月再轉大減少を認め、九月より又擡頭して十月に至れば、四、五月の最多に亞くの増加を告げ、十一月より遞次漸減して、翌年三月に至る。要するに蚊族の旺盛期は年二回の五月、十月の季節とす。而かも十月の簇生期は最多五月に比すれば三分の一に達せず。反面衰頹期を窺ふに、旺盛期と同しく年二回を認め、孰れも旺盛期の二箇月以前にして三月、八月なりとす。其の詳細は次表の如し。

□アノーフエレス蚊類の季節的消長

種別	大正四年		同五年		同六年		同七年		同八年		同九年		同十年		同十一年		平均
	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	採集日數	一日平均數	
一月	25	0.1	108	0.3	26	0.1	3	0.01	28	0.08	14	0.04	17	0.05	8	0.02	106
二月	33	0.1	100	0.3	37	0.1	3	0.01	33	0.09	22	0.06	33	0.09	19	0.05	133
三月	102	0.3	108	0.3	101	0.3	1	0.01	112	0.31	10	0.03	33	0.09	30	0.08	120
四月	25	0.1	22	0.06	33	0.09	1	0.01	33	0.09	33	0.09	33	0.09	33	0.09	121
五月	250	0.7	179	0.5	177	0.5	108	0.3	112	0.31	121	0.34	121	0.34	121	0.34	121
六月	25	0.1	25	0.07	25	0.07	25	0.07	25	0.07	25	0.07	25	0.07	25	0.07	25
平均	106	0.3	106	0.3	106	0.3	106	0.3	106	0.3	106	0.3	106	0.3	106	0.3	106

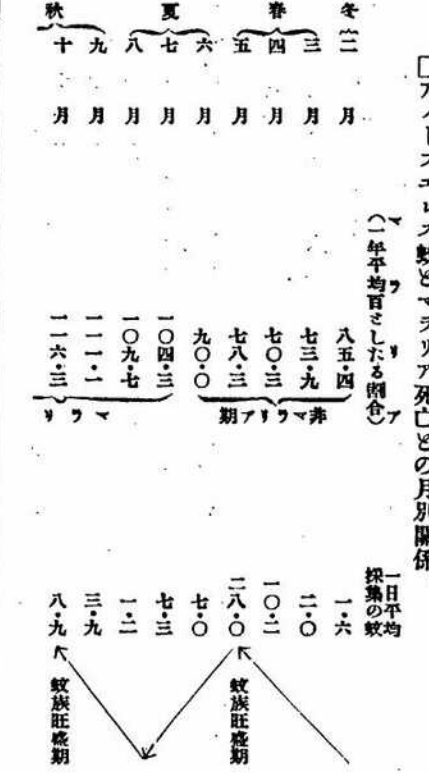
全年	七月		八月		九月		十月		十一月		十二月	
	採集日数	一日平均数	採集日数	一日平均数	採集日数	一日平均数	採集日数	一日平均数	採集日数	一日平均数	採集日数	一日平均数
九六	二〇六	二〇六	二〇八	二〇八	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九	二〇九
二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

アノーフエレス蚊類の消長と、マラリア死亡との聯關を試みるに、其の要項次の如し。

一 蚊類に於ける春季の旺盛期は、本病に在りては死亡寡少なる好關の時季なり。是れ人生も變遷たる春風に浴し、正に寔生の感なくひはわらすとするの時なり。この時に當り蚊族亦旺盛にして、吸血に之れ力むるも、萬物の萌え出てむとする春に於ける人體には近因としての影響少し。

二 蚊族の秋季に於ける旺盛期は十月を峠とせるに、マラリア死亡は夫より月餘の遅延を見、十一月を以て全年中の最多を現出せり。是れ或は本病は罹病後月餘に於て斃るゝもの多なるを語るものなるか、彼のライプチッヒの罹病統計によるも、發病後轉歸を観るに至る期間は平均して男は二十二日、女は二十五日とせるを首肯せしめらる。

之を圖示するに次の如し。





如上是、臺北市に於ける蚊族對全島平均なるを以て、相關々係微弱なるやの疑念を懐かしむへし。然れども臺北州對全島平均を觀るに其の比率に於ては多少の差異あれども、各月に於ける傾向は全島と全く相似を呈せるを以て、前項にて全島と比較したる關係は又臺北州に同一なりと謂ふへし。左に臺北州對全島平均各月の趨嚮を表示すへし。但し蚊族は平均實數、死亡率は百分比なりとす。

□アノーフエレス蚊族並に臺北州、全島平均マラリア死亡前月との比較

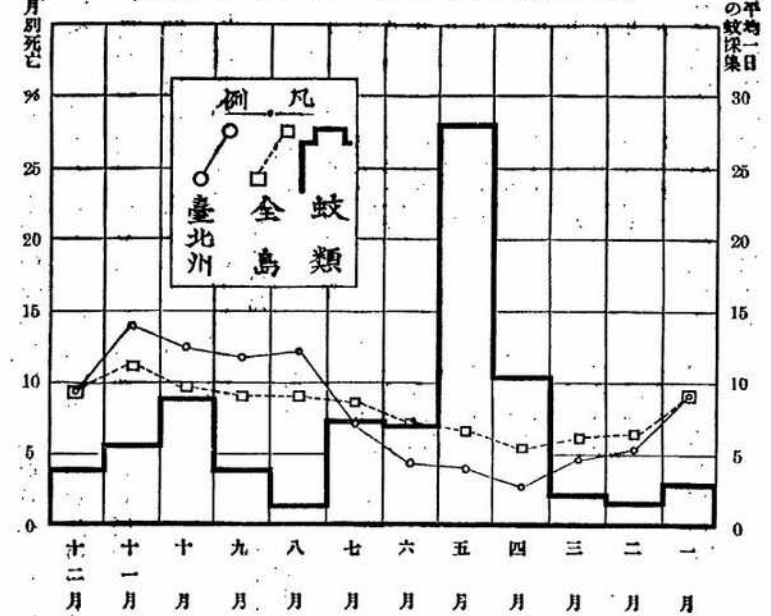
月	蚊族の消長	臺北州マラリア死亡	全島平均マラリア死亡
一月	一・四	〇・八	〇・九
二月	一・〇	三・八	二・三
三月	〇・四	〇・二	〇・三
四月	八・二	一・一	〇・五
五月	一七・八	〇・四	〇・七
六月	一〇・〇	二・六	一・五
七月	六・一	〇・三	〇・四
八月	二・七	〇・三	〇・二
九月	五・〇	〇・七	〇・八
十月	三・四	一・六	一・四
十一月	一・五	四・六	一・五
十二月	二・一	減	減

冬  
十二月 一三九・二期ア  
一月 一二五・六  
〇四・九

五・五  
四・〇  
二・六

更に之を圖解すれば次の如し。

の(集探てに北臺)類蚊スレエフノア  
較比のと亡死アリラマ均平島全・州北臺と長消



更に地域を限局して蚊族對マラリアの相關を考察せむとす、蚊族の採集地は臺北市内な

るを以て、其の地域に於けるマラリア死亡とを比較せむとす。勿論臺北市に於ける蚊族の消長は之を全島に布行するも其の大勢には齟齬あるべき理なし、唯其の比率に差異を認むるに過ぎざるへし。臺北市のマラリア死亡の趨向を先づ臺北州に對比せむとす、夫れ臺北州の歸嚮は全島平均に同型なるは前叙の如し。若し臺北市か臺北州と同型なりとせば、全島に於ける歸嚮と同一なるを知らばなり。

□臺北市對臺北州マラリア死亡前月との比較



右表の前月に較する増減を通観するに、其の傾向の符合せざるものあり、即ち臺北市の傾向は臺北州全管との傾向と異にするの證左を語るものなり。其の差異を羅列せむに(一)臺北州の三月は前月より引續き減少を示せども、臺北市にありては本月は増加を觀たり、最

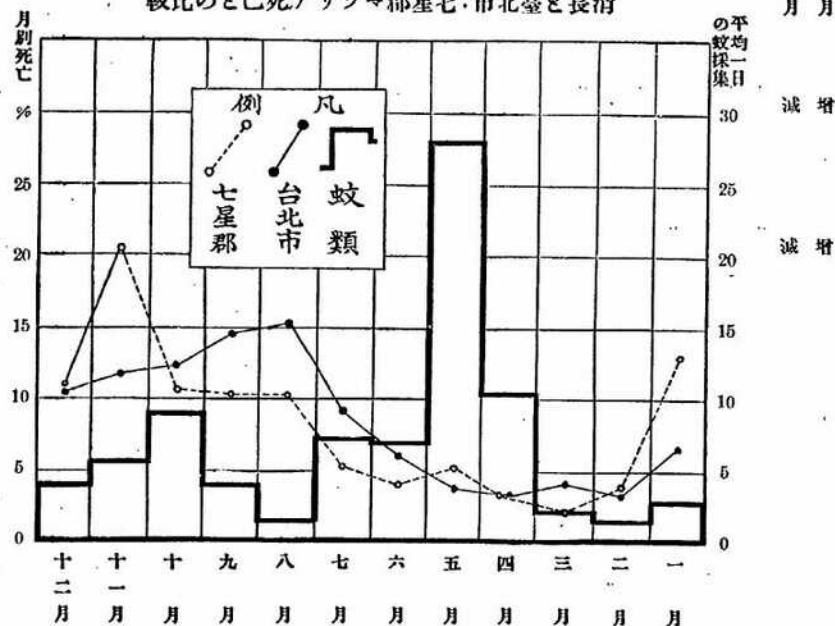
も本月の臺北州の減少率は〇・二の低位にあり、又全島平均に在りても其の傾向臺北州に同しく僅かに〇・三の低位に過ぎず(二)臺北州の十一月の兩月は前月に比し増加を示せるに反し、臺北市にありては兩月俱に減少を示せり(三)臺北州にありては二月乃至七月を非マラリア期となすに反し、臺北市にては一月以降六箇月を非マラリア期として一箇月早し(四)臺北州にありては十一月を最高死亡月とするに、臺北市にありては三箇月早く八月を最高とし、十一月は最高第四位にあり。由來都市に於ける、マラリア死亡は甚だ低位なるのみならず、醫療機關の充實上他より轉入せるもの、影響ありて、事實此の種の關係を闡明せむには再考の餘地あり、斯くて臺北市に於けるマラリア死亡と蚊族消長の相關も興味ある影響を認めざりき。翻つて臺北市の隣接地たる七星郡と比較を試みんかな。先づ前月との對照を臺北州全管と比較するに次の如し。

前月との比較

月	臺北州	七星郡
一月	減	増
二月	増	増
三月	増	増
四月	増	増
五月	増	増
六月	増	増
七月	増	増
八月	増	増
九月	増	増
十月	増	増
十一月	増	増
十二月	増	増

上表に依れば本郡も臺北市と同しく全州と其の趨嚮の異にするものあり、只マラリア期及非マラリア期とすへきは合致せるを觀たり。即ち本郡も蚊族の消長關係には差したる影響なし。左に學究上の參考として、蚊族の消長と、臺北市七星郡のマラリア死亡との關係を圖示せむとす。

の類蚊スレエフノア 較比のと亡死アリマ郡星七・市北臺と長消



五 原蟲保有率とマラリア

大正六年乃至同十二年の七箇年間に於ける、季節に依るマラリア原蟲保有率の多寡を觀察するに、全年平均比率は檢血人員の二・三一%にして、十一月は二・八三%を示して最多とし、八月(二・八一%)、十二月(二・七三%)等之に屬す。寡少なるは三月の一・六八%にして四月(二・七五%)、二月(二・九一%)等之に屬す。併して原蟲保有率とマラリア死亡との相關々係を考察するに原蟲保有率の高き月は死亡亦之に伴ひて高き傾向あり。即ち死亡の最多なる十一月は保有率又最高なり。亞て死亡の二位にある十月は保有率四位にありて軒輕あるも、第三位は死亡對保有率孰れも同位なり。死亡の第四位は原蟲率の第五位にて僅かに一位の差を認むるに過ぎず。又最寡に屬する死亡は四月、三月の順位なるに、保有率は四月、三月と相互に顛倒せるに止まり、多くは一位の差に過ぎず。之を要するにマラリア死亡は保有率の高下に比例するか、或は保有率に月餘の差ありて死亡する傾向顯著なりと謂ふへし。其の詳細を表章すへし。

□原蟲保有率と死亡率の比較

保有率は檢血人員百中。死亡率は一年平均一日の死亡を百人とし各月一日平均百とせし率。

種別	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位	第六位	第七位	第八位	第九位	第十位	第十一位	第十二位
原蟲保有率	十一月	八月	十二月	十月	九月	七月	一月	六月	五月	二月	四月	三月
死亡率	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月

マラリア 死亡率	月	十一月	十月	十二月	九月	八月	一月	七月	六月	二月	五月	三月	四月
マラリア 死亡率	一日平均	二五二	二六五	二五八	二二	二〇七	二〇九	二四三	二〇〇	二五五	二五九	二五九	二五九
	一月平均	二五二	二六五	二五八	二二	二〇七	二〇九	二四三	二〇〇	二五五	二五九	二五九	二五九

更に之を州應別に比較するに(一)臺北州は一月、二月、五月乃至七月及九月乃至十一月の八箇月は兩比率全く同型を呈し、三月と四月及び八月と十二月の四箇月は交互に轉換せるに過ぎず(二)新竹州は兩率の同位にあるは四月の一箇月に止まり、一位内の轉換せるもの三箇月、二位内の轉換に依るもの六箇月、其の他三位内及び四位内のもの各一箇月あり(三)臺中州の兩率の吻合せるは七、九、十の三箇月にして、一位の差あるもの四箇月、二位内、三位内の差あるもの各二箇月、四位内の較差あるもの一箇月あり(四)臺南州は臺北州に亞て同型のもの多數を占めたり、即ち四、五、九、十一、十二月の五箇月はなり、其の他是一位及二位の差あるもの三箇月、三位内の差あるもの一箇月なり(五)高雄州も臺中州と同じく同型にあるもの三、四、八の三箇月にして、一位又は三位内の轉換を觀たるもの三箇月、其の他二位、四位及び六位内の轉換に依るもの各一箇月あり(六)臺東廳は同型を示すものは唯八月の一箇月に過ぎず、要するに本廳の實数は比較的少數なる爲め、大量觀察の場合に變型を示すことあるは免かれず(七)花蓮港廳は同型のもの絶無なるか、多くは一、二位の差あるに止まりて四位以上の轉換を觀ず。マラリア死亡率は前掲せしを以て左にマラリア原蟲保有率を州應別に表章せむとす。

□マラリア防遏成績(檢血人員百中原蟲保有率) 自大正六年 至昭和十二年

州	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
臺北	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
新竹	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
臺中	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
臺南	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
高雄	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
花蓮	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
臺東	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
澎湖	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七
全島	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七	一〇七

### 第六章 性マラリア

#### 一 女性百に付き男性の割合

一 總説 大正六年乃至同十年の五箇年間に於ける、一年平均マラリア死亡數八一三七人を兩性に分ては、男四二六四人、女三八七三人なるを以て、其の比率を商量するに女一〇〇人に對し男一一〇・一人の割合なり。

併かも、男女の權衡は人口學的に研駁せらるゝ問題にして、由來男性は出生に於て既に女性を優越して多數なり。然れども男性は死亡多く幼、少なる年齢に於て殊に其の率高し、夫より結婚期年齢に至れば男女兩性は殆ど近逼し、更に老年齡に達するも、男性は依然と

して死亡率高きに因り、爲めに女性は却て多数となりて男性を凌ぐに至るは、各國共通の人口學上に於ける顯著なる現象なり。

二 總死亡との比較 大正六年以降五箇年間の總死亡中男は五七・一一二人、女は四九・四〇九人にして、女一〇〇に對する男の割合は一一五・六人なり。之をマラリアの同上割合一一〇・一人と比較するに五・五人の著差あり、則ちマラリアは一般死亡の如く性に影響するところ甚だ微弱にして、女性の死亡比較的多数なるを語れり。而してマラリアの死に男性を饒多とするは、勞力に出役して罹病の頻度を高からしめ、且つ女性は安靜に療養する機會ありとするも、男性にありては輕症期には之を等閑視し、痾疾にあるも經濟關係等に基因し適方なる醫療を怠るに依るものならむ乎。

三 種族に依る差異 五箇年平均數に徴して、種族と兩性關係を觀察するに、内地人と外國人のマラリア死亡は性別に大なる逕庭あり。即ち内地人の男性は一般死亡率に於ては女性に超過すること漸く三割強なるに對し、マラリアは優に女性に比し倍加し、其の比率は一〇〇に付き男は二一九・一人を示せり。又外國人は一般死亡に在りては男性は女性に比し約三倍半に該るも、マラリア死亡にては男性は約九倍の多數を示せり。本島人は内外人に反し、マラリア死亡の女性の割合は却つて一般死亡の女性の比率より高しとせり。即ち一般死亡は女一〇〇に對し男一一四・七人なるも、マラリアに在りては同上の比率一〇八・三人にして、兩性間の比率相近接せり。尤も種族別人口構成に於て、内外人は兩性の不權衡なるに影響あるは勿論なれども、前叙の如く土著の本島人は性の影響少なきより

之を考察するに、(一)内地人の女は比較的マラリア地方に居住すると(二)生活上に比較的餘裕あるを以て醫療を受くる便ある等は女性の低率なる主因と認めらる。

左に關係數を掲記せむとす、即ち次表の如し。

□女百に付き男の割合 (大正六年より以降 五箇年間の平均)

種族	マラリア		一般死亡	
	男	女	男	女
内地人	103	100	114	100
本島人	113	100	117	100
外國人	199	100	114	100
計	113	100	117	100

□内地人外國人の都市、其の他に居住する男女の割合 (大正十二年末人口に依る)

種族	都市		其他		全島
	男	女	男	女	
内地人	103	100	114	100	113
本島人	113	100	117	100	117
外國人	199	100	114	100	114
計	113	100	117	100	113

右表に依れば、内地人の男女の權衡は女百に付き男一二四・六人なるも、マラリア罹病率の低き都市に居住するものは、女百に付き男一一七・九人にして、迥に平均に比して都市に女性の居住するもの多きを知るへし。又外國人主として支那人は都市と其の他の地方に居

住するものゝ比七と八の割合を示し、是また女性の都市に居住するもの多數なるを知るべきなり。更に兩性の百分比を掲ぐれば次の如し。

居住地	實數		百分比	
	男	女	男	女
内地人	都市	1,000	50.0	50.0
	其他	1,000	50.0	50.0
	全島	2,000	50.0	50.0
外国人	都市	100	50.0	50.0
	其他	100	50.0	50.0
	全島	200	50.0	50.0

二 人口千につき兩性の割合

一 全島 大正六年乃至同十年に於ける五箇年平均の人口千に對する兩性の割合を觀察するに、男女ともに同率二・二人を示せり。斯くしてこれを年次に徴するに、男女とも平均と同型の同率を示せるは八年の二・二人にして、其の他の各年は〇・一人の少差を認むるのみ之を同上期間内の總死亡平均と對比せむに、總死亡に在りては男性は三〇・三人にして、女性は男性より二・一人の低位にありて二八・二人を示せり。斯くの如く本病は兩性に影響すること勘なき地方病なるを證すべし。

二 州麻別 五箇年平均の男女の比率を秤量するに、全島平均と同しく各性同位にあるものなく、併して女性の男性より高率なる奇現象にあるは臺南及高雄の兩州にして、甲州は〇・二人、乙州は〇・一人の較差あり、其の他は總死亡に同しく男性を多數とする地方

にして、其の兩性間の差異を擧ぐれば次の如し。(一)〇・一人の少差にあるは新竹州なり(二)臺中州は〇・二人の較差あり(三)臺北州は〇・三人の差異あり(四)臺東廳は〇・四人にして、花蓮港廳は兩性の差甚たしく一・〇人を認めたり。但し花蓮港廳は年次を通して之を觀るに、十年は女性却て一・二人高く、六年は女性の低きこと二・二人に該り、九年は〇・二人の較差を以て女性低し。之を要するに、花蓮港廳の體性關係は區々にして定型を認め難し。

其の詳細を記表するに、次の如し。

□性別に依るマラリア死亡(實數)

州廳及性	大正六年		同七年		同八年		同九年		同十年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
臺北州	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
臺中州	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
新竹州	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
臺南州	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
計	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000	4,000

□性別に依る死亡率(人口千につき)

地域	大正六年		同七年		同八年		同九年		同十年		五箇年平均	
	計	平均	計	平均	計	平均	計	平均	計	平均	計	平均
高州	1.35	1.35	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
雄州	1.21	1.21	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01
東	1.25	1.25	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
花港	1.35	1.35	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
全島	1.25	1.25	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
新州	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9
北州	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	0.9	0.8	0.8	0.9	0.9	0.7	0.7
五箇年平均	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

地域	大正六年		同七年		同八年		同九年		同十年		五箇年平均	
	計	平均	計	平均	計	平均	計	平均	計	平均	計	平均
高州	1.35	1.35	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
南	1.21	1.21	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01
東	1.25	1.25	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
花港	1.35	1.35	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
全島	1.25	1.25	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05	1.05
新州	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9
北州	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	0.9	0.8	0.8	0.9	0.9	0.7	0.7
五箇年平均	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

三 月に依るマラリア死亡の順位は兩性中孰れを確率高しとするや。  
 月別マラリア死亡の平均に等しきは男女孰れにありやを考察するに、男女俱に平均に合致せるは七箇月にして、男女俱に平均に吻合せざるもの二箇月あり、其の他の三箇月は孰れも女性は恒に平均と符合せり、之を要するに、月別順位は男女何れも同型にあるか、然

らされは女性と合致するを觀たり。  
 由來、女性は平靜的地位にあるを以て、恒常的傾向に富むも、男性は勞務又は生活上の關係上、變例的傾向を呈するを知るべきなり。  
 之を州廳別に商量するに、其の大綱次の如し(一)兩性の合致月多きは臺中州の八箇月を最とし、臺南州の七箇月之に亞き、臺北州の四箇月、花蓮港廳の三箇月順次に屬し、新竹、高雄の兩州及臺東廳は僅かに一箇月を示すのみ(二)男女俱に平均月に合致せざるは、臺東廳の八箇月、花蓮港廳の六箇月、新竹州の五箇月、高雄州の四箇月等にして、臺中州にては男、女孰れかに合致し、全く符合せざるものなし(三)男と平均と合致するは臺北及臺南の兩州と花蓮港廳の各三箇月にして、臺中州及臺東廳に在りては男と平均と吻合せるものなし(四)女と合致するは高雄州の五箇月を首とし、新竹、臺中兩州の四箇月之に亞き、花蓮港廳には之を認めず。  
 之を表示するに次の如し。

□平均順位との關係(月數)

高 臺 新 臺	兩性合致		男と合致		女と合致		不一致
	高	臺	新	臺	高	臺	
北	四		三		三		二
竹	一		二		四		五
中	八		一		四		一
南	七		三		一		一
雄	一		二		五		四

臺東 一  
 花蓮港 三  
 臺北 七  
 臺中 一  
 高雄 三  
 臺南 三  
 新竹 三  
 高雄州 二  
 臺東廳 六  
 花蓮港廳 八  
 全島 二

□體性に依る月別マラリア死亡百分比例 (大正六年乃至同十年平均)

月	臺北州		新竹州		臺中州		臺南州		高雄州		臺東廳		花蓮港廳		全島	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一	九六	七八	八八	九五	八三	七九	九三	九三	九二	九二	六八	六八	九二	九二	八六	九三
二	五二	五二	六七	九〇	六六	六六	五九	九三	七三	七三	九三	九三	八二	八二	六六	六六
三	五〇	五〇	六三	六三	六〇	六〇	六四	六四	六三	六三	八三	八三	七七	七七	六六	六六
四	四八	四八	五二	五二	五三	五三	五五	五五	五五	五五	七〇	七〇	六三	六三	六六	六六
五	三九	三九	四四	四四	四九	四九	五二	五二	五二	五二	七〇	七〇	六〇	六〇	六六	六六
六	四九	四九	四八	四八	五三	五三	五三	五三	五三	五三	八九	八九	六五	六五	六六	六六
七	五〇	五〇	五八	五八	六三	六三	六三	六三	六三	六三	九二	九二	六二	六二	六六	六六
八	三三	三三	二〇	二〇	二二	二二	二二	二二	二二	二二	九六	九六	五三	五三	六六	六六



□月別マラリア死亡順位 (大正六年乃至同十年の平均)

月	男	女	男	女	男	女	男	女
九月	25	23	22	21	20	19	18	17
十月	24	22	21	20	19	18	17	16
十一月	23	21	20	19	18	17	16	15
十二月	22	20	19	18	17	16	15	14

州	位	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
南	第一位	11	10	11	10	11	10	11	10	11	10
中	第二位	10	9	10	9	10	9	10	9	10	9
東	第三位	9	8	9	8	9	8	9	8	9	8
新	第四位	8	7	8	7	8	7	8	7	8	7
嶺	第五位	7	6	7	6	7	6	7	6	7	6
南	第六位	6	5	6	5	6	5	6	5	6	5
中	第七位	5	4	5	4	5	4	5	4	5	4
東	第八位	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3
新	第九位	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2
嶺	第十位	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
南	第十一位	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
中	第十二位	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

全	花		嶺		東		嶺	
	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	
十一月	11	10	11	10	11	10	11	10
十二月	10	9	10	9	10	9	10	9
一月	9	8	9	8	9	8	9	8
二月	8	7	8	7	8	7	8	7
三月	7	6	7	6	7	6	7	6
四月	6	5	6	5	6	5	6	5
五月	5	4	5	4	5	4	5	4
六月	4	3	4	3	4	3	4	3
七月	3	2	3	2	3	2	3	2
八月	2	1	2	1	2	1	2	1
九月	1	0	1	0	1	0	1	0
十月	0	0	0	0	0	0	0	0

第七章 年齢マラリア

一 實数よりの觀察

一 總説 マラリア死亡と年齢との關係を觀察するに、先づ年齢を五歲階級に括約し、更に出生より五歲迄の乳幼兒級を各歲に區分し、又老年級として八十歳以上を別に一括して、年齢對マラリアの影響を檢査するに、最多數の死亡を現はしたるは一般死亡と同しく五歲迄の幼兒級にして三〇・三%に該る、即ち全マラリア死亡の約三分の一は五歲迄の幼兒を産す割合なり。由來五歲級迄は年齢級の人口も多數を占むるか爲め、死亡數も亦饒多

なるは其の所なりとすへし、亞て五歳以上満十歳迄の一〇・〇%を第二位とし、第三位は三十歳以上満三十五歳級の六・四%なり。夫より第四位乃至第六位は孰れも六・一%を示して、二十歳以上満三十歳級の二階級と三十五歳以上満四十歳級の十五箇年間なり。之を要するにマラリア死亡は一般死亡と同様にある幼、少年級の十歳期迄を除外して考察するに、二十歳以上満四十歳迄の身體完成期にある生産年齢者を瘧疾なりと謂ふへし。

二 州廳別 州廳別の差異を観察するに殆ど全島平均と同型を呈すれども、多少の差異あるを免れず。其の概要を摘記せむに。

イ 五歳迄の幼児の三〇%以上に達せざるは、臺北(二三・五%)と、新竹(一九・二%)との兩州のみにして、斯く非マラリア地方に限られたるは、或はマラリア患者の徑路たるや、多くは生産年齢者か他のマラリア地方に出役して罹病し、歸郷後に死の轉歸を観る結果にあらざるなきか、従つて幼年者は勞務上、寧ろ煩雜を來たすか爲め本居地に留まるとを以て寡少なるにあらざる乎。

ロ 第二位に多數なるは凡へて五歳以上満十歳にあれども、獨り臺東廳は然らず、三十歳以上三十五歳(八・一%)にあるは全く奇現象と謂はざるを得ず。由來同應は漢人種僅少にして、其の大勢は蕃人なると、人口の密度亦極めて稀薄なるか爲め偶々或る年齢級に比較的多數の死亡ありとせむか、其餘波は僅少なる年齢別人口に影響すること甚大なるは贅言を要せしめて明なりとすへし。

ハ 二十歳以上三十歳級は、各地方とも第五位迄にあれども、獨り花蓮港廳は然らず

即ち第三位より第五位は凡て三十歳以上の十五箇年間に含有せらる。

其の他の差異に就ては、之を次表に委す。

□年齢別マラリア死亡 (大正六年乃至同十年の五箇年平均)

年 齡	臺北	新竹	臺中	臺南	高雄	臺東	花蓮港	全島
〇	六三	五三	二九	六二	六〇	五五	九八	六〇
一	五九	五二	二七	六〇	五八	五三	七七	五三
二	四四	四九	二〇	四五	四七	四二	五七	四七
三	三三	三三	一八	三五	三五	三〇	四八	三五
四	三五	二四	一五	二八	二二	一八	三三	二六
計	三三	二二	一三	二二	二〇	一五	二〇	二〇
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
一五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
二〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
二五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
三〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
三五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
四〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
四五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
五〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
五五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
六〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

六五	七〇	元	三	八	三	八	三	三	三
七〇	七五	二	三	二	二	二	二	二	二
七五	八〇	〇	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇
八〇	—	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
計	—	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

三 一般死亡との比較 一般死亡の傾向はマラリアと同しく出生より五歳迄に多きは勿論なれども其の比率に大差を存せり、即ちマラリアの三〇・三〇に對し一般死亡は四一・六〇を示せり、一般死亡の第二位は三十五歳以上滿四十歳級にして五・五〇を示し、七十歳以上の高年級五・三〇を示して第三位たり、之を要するに出生より滿五歳迄の一般死亡は迥にマラリアを凌ぎ、夫より五歳以上滿四十五歳迄の四十歳間はマラリア却つて一般死亡の群を抜き、四十五歳よりは再轉して一般死亡の激増と爲れり。左に兩比較を表章すへし。

□マラリア死亡對一般死亡百分率比較

マラリア死亡	出生より五歳迄	五歳以上滿四十五歳迄	四十五歳以上	計
一般死亡	三〇・三	五・四	一八・三	一〇〇・〇
	四一・六	三・四・二	二四・二	一〇〇・〇

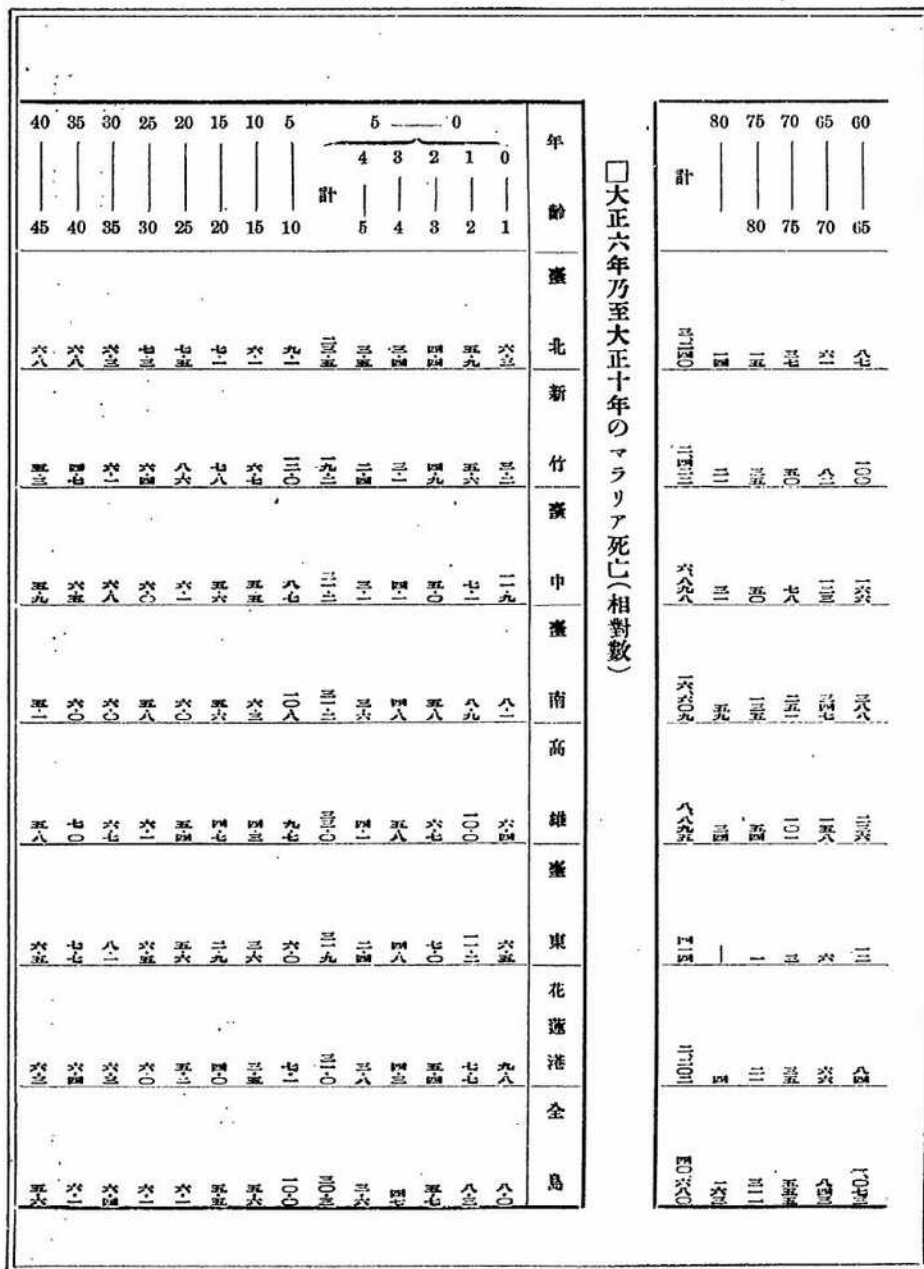
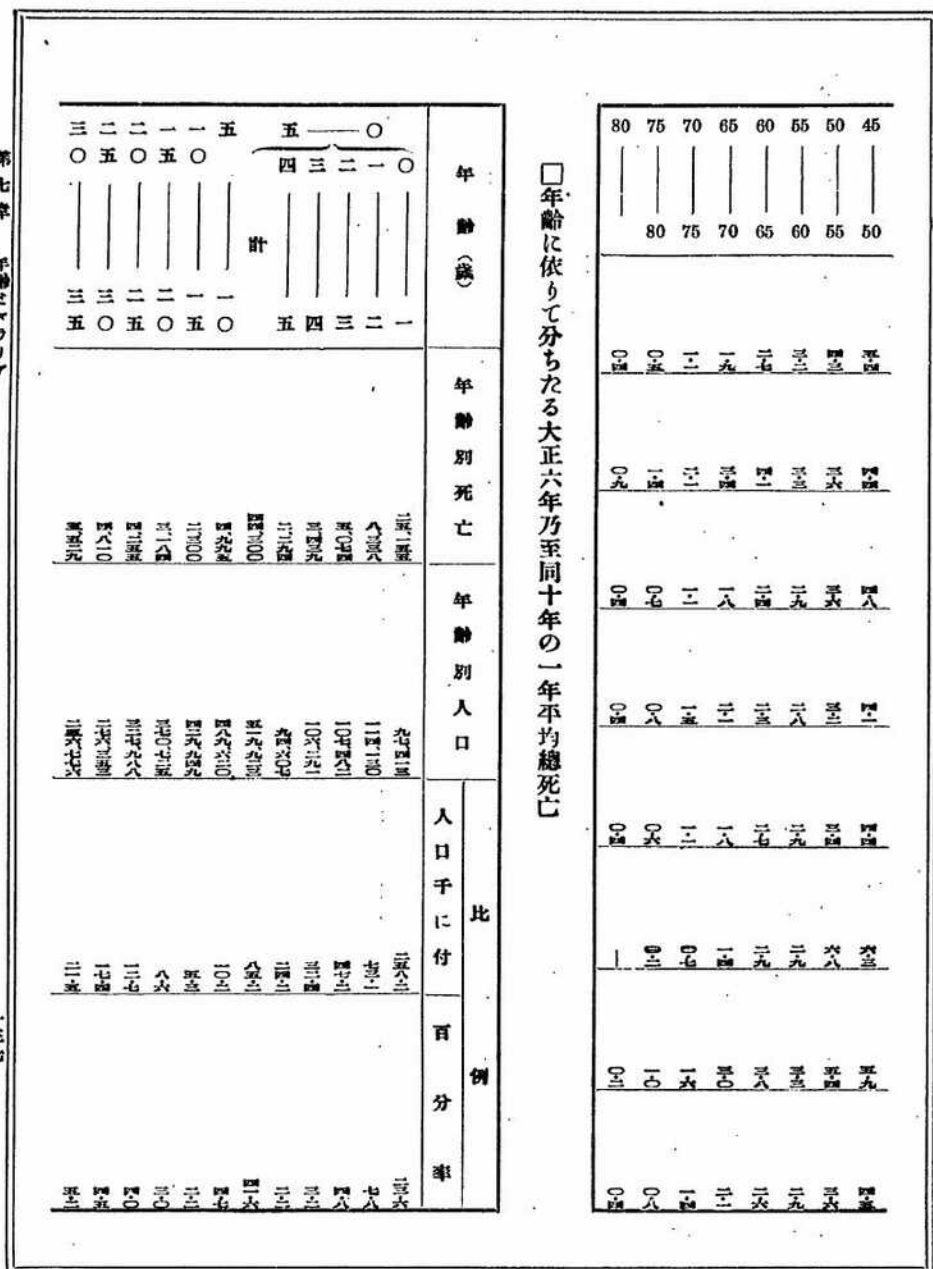
之を概観するにマラリアは五歳級迄の乳幼児級に影響すること少なく、特に一歳迄を對比するに、マラリアの八・〇〇に對し、一般死亡率は迥に高率の二六・七〇にして、約三倍の較差を認め得へし。かくマラリアの死の魔手は五歳以上の少年級と青年級、特に壯年

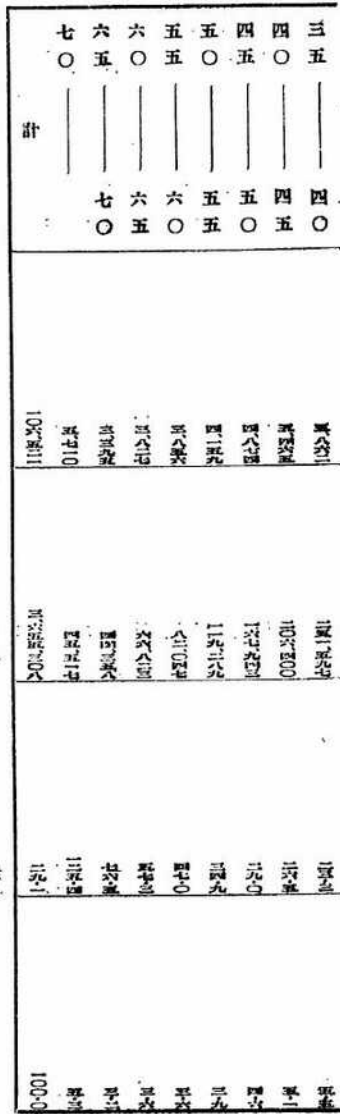
級を侵襲すること夥しく、夫より四十五歳を經過するに至れば又死亡率の低減を告ぐへし、

左に各年別の死亡兩率を掲載せむとす。

□大正六年乃至大正十年のマラリア死亡(絶對數)

年 齡	北 新 竹 縣		中 壠 縣		南 高 雄 縣		東 花 蓮 港 全 島	
	0	1	2	3	4	5	6	7
55	1	1	1	1	1	1	1	1
50	1	1	1	1	1	1	1	1
45	1	1	1	1	1	1	1	1
40	1	1	1	1	1	1	1	1
35	1	1	1	1	1	1	1	1
30	1	1	1	1	1	1	1	1
25	1	1	1	1	1	1	1	1
20	1	1	1	1	1	1	1	1
15	1	1	1	1	1	1	1	1
10	1	1	1	1	1	1	1	1
5	1	1	1	1	1	1	1	1
計	5	4	3	2	1	1	1	1





二 人口よりの観察

一 全島 人口に對するマラリア死亡の比率は、上來屢々叙述したるか如く、現住人口千人に對し二・二人に該れり。然して之を年齢別の人口に配するに、本病は比較的乳幼児級を斃すこと僅少なるの觀あれども、之を人口に比率せしむる時は、ハウスホーフエルの所謂小兒の死亡觀に一致するを看取したり、即ち最多は出生より一歳迄の六・七人(人口千につき、以下同じ)にして一歳以上二歳級の五・九人之に亞く、二歳以上は遞次に減少すれども、五歳階級として出生より五歳迄の比率を覓むるに四・七人を占めて、全年齡の五歳階級より迥に高率を示し、全年齡階間の首位にあり、之に亞くは最長年級七十歳以上の四・五人にして、夫より五十歳以上滿七十歳級の二十年は二・四人より遞増して三・八人に至れり。平均位(二・二人)にあるは四十歳より五十歳の十年間なり、寡少なるは十歳以上

滿十五歳級の二・一人と、十五歳以上滿二十歳級の二・二人なりとす。

之を一般死亡の年齢級別と比較するに逕庭の存するを觀たり。今之を摘記せむに。

イ 一般死亡の人口千に對する比率の二九・一を、マラリア死亡率の千分の二・二に比すれば一三・二倍に該れり。而して出生より一歳迄の一般死亡は、マラリア死亡の三八・五倍にして二五八・二人(死亡率)を示せり、即ち總死亡率はマラリア死亡率の十三倍二分とせば、同年齡間に於ける一般死亡の割合は、マラリア死亡に比し三倍の超過にあるを知るへし、之に由りて是を觀れば、一歳迄の乳兒にはマラリアの影響微弱なりと謂ふべし。

ロ 最高年級(七十歳以上)の一般死亡率はマラリア死亡の二七・九倍にして是また倍加を示せり、即ちマラリアは老年級を侵襲すること又薄き證左とすへし。

ハ 一般死亡の比率を高しとする年齢は、五歳以上より三十五歳の三十箇年にして、各五歳階級に考察するに各々差等あり。一般死亡よりもマラリア死亡割合の高き順序に依りて、之を掲記せむに次の如し。

年齢	一般死亡の倍数(平均)
十歳以上滿十五歳	四・八
十五歳以上滿二十歳	七・二
二十歳以上滿二十五歳	八・五
二十五歳以上滿三十歳	九・三
三十歳以上	九・七

之を要するに本病は少、壯年級の而かも體格完成期の前後にあるものを侵襲するを知るへきなり。其の詳細は左表の如し。

□マラリア死亡對一般死亡の兩率比較

年齢	マラリア	一般死亡	一般死亡のマラリアに對する倍数
0	6.7	258.2	38.5
1	5.9	73.1	12.4
2	4.3	47.2	11.0
3	3.6	33.4	9.0
4	3.1	24.2	7.8
5	4.7	85.2	18.1
平均	1.7	10.2	9.3
10	1.2	5.3	4.8
15	1.5	8.6	7.2
20	1.8	17.7	8.5
25	3.0	17.4	9.7
30	3.5	21.5	10.8
35	4.0	23.3	11.7
40	4.5	26.5	12.0
45	5.0	29.0	13.2
50	5.5	34.9	14.6
55	6.0	47.0	16.2
60	6.5	57.3	18.0

平均	二・二	二九・一	十三倍一分
六五	七〇	七六・五	二〇・一
七〇	四・五	一二五・四	二七・九

二 州廳別 州廳別に依る差異を観察するに、大體全島平均と同步調を取るも、多少の差異あり。其の概要を摘記せむに。

1 出生より五歳迄の乳幼児 五歳迄の乳幼児の全島平均は人口千に付四・七人にして年齢の長するに隨伴して其の率を減せり、然るに之を州廳別に観る時は同型を辿るものは臺北、臺中、臺南の三州と花蓮港廳にして、新竹州は二、三歳期のもの順次多數を占め一歳期のもの第三位に下れり。高雄州は二歳期のもの第一位にして一歳期之に亞く、臺東廳は前二例とも其の趣を異にし二、三、四歳期のもの順位に高く一歳期のもの第四位にあり。而して死亡率の全島平均以下にあるは臺北、新竹、臺中の三州にして、就中新竹州の比率最も低下せり。

□ 五歳乃至滿三十歳 マラリア死亡の一般死亡より高しとする五歳より三十歳を五歳階級に割引し、且つ多少の順位に従へば、十歳―十五歳、十五歳―二十歳、二十歳―二十五歳、五歳―十歳、二十五歳―三十歳となるは前叙せしも、之を州廳別に觀察するに、全島と同型を呈するは臺南、高雄の兩州を認むるのみ、如上年齡の五階級中首位より三位迄の同型を招來するものに、新竹州と花蓮港廳あり。其の詳細を表章するに、次の如し。

□大正六年乃至大正十年の一年平均マラリア死亡数(絶対数)

年齢	大正六年乃至大正十年の一年平均マラリア死亡数(絶対数)									
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
北	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55
新竹	12	18	22	28	32	38	42	48	52	58
中	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60
南	18	22	28	32	38	42	48	52	58	62
高雄	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65
東	22	28	32	38	42	48	52	58	62	68
花蓮港	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70
全島	28	32	38	42	48	52	58	62	68	72

□大正六年乃至大正十年の一年平均マラリア死亡数(相對數)

年齢	大正六年乃至大正十年の一年平均マラリア死亡数(相對數)									
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
北	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5
新竹	1.2	1.8	2.2	2.8	3.2	3.8	4.2	4.8	5.2	5.8
中	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0
南	1.8	2.2	2.8	3.2	3.8	4.2	4.8	5.2	5.8	6.2
高雄	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5
東	2.2	2.8	3.2	3.8	4.2	4.8	5.2	5.8	6.2	6.8
花蓮港	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5	5.0	5.5	6.0	6.5	7.0
全島	2.8	3.2	3.8	4.2	4.8	5.2	5.8	6.2	6.8	7.2

六〇	六五	三三	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	平均
八〇	七五	七〇	六五	六〇	五五	五〇	四五	四〇	三五	三〇	二五	二〇	一五	一〇	〇	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	平均	

### 第八章 統計に現れたるマラリア患者

一 總説 本島に於けるマラリア患者の絶對數に關しては、之を計上したるもの莫きは、既記の如しと雖も、幸ひに本病の一部に當る調査あり。即ち官立醫院と公醫の診療に依る患者統計是なり。故に公醫にあらざる醫師、本島在來の醫生の取扱に係るものは、之を知了するに術なし。然れども地方に依りては醫師、醫生の衛生機關としては、單に公醫あるのみの地域亦揚しとせず、斯かる地方に於ける本病の患者にして醫務を受けたるものは、當該統計を以て患者の全部なりと謂ふ事を得べく、少くとも總患者中の本病の分量と、分布關係との一端を窺視するに足るべく、從つて本記述の徒爾ならざるを信じ、聊か患者統計に筆を染めむとす。

二 全島 大正八年より同十二年に至る五箇年間に於ける、官立醫院及公醫の診察に係る一箇年平均マラリア患者は無慮七〇〇八人にして、就中大正八年の八萬人を多數とし、同十一年の七萬三千人之に亞き、寡少なりしは同九年の六萬二千人と、同十年の六萬三千

人等なり。然れども茲に考慮を要するは社會現象としての生活狀態、即ち患者の心理觀に在り。併しなから、本問題は吾人の考察すべき範圍を超ゆへきも、竊かに其の内容に接觸せむとす。夫れ重症患者は萬障を排除しなは醫務を請ふの要あれども、輕症者に至りては多くは生活に餘裕あるものにあらざれば治を求むるもの鮮少なるへし、即ち患者統計にありては國民生活の實際關係を除外すること能はざるへし。

遮莫、總患者中に於けるマラリア患者の割合を観るに、五箇年平均の總患者は四五〇三三人にして、内マラリア患者七〇〇八人なるを以て、總患者百人中一五・五五人を示せり、即ち患者六人毎に一人のマラリアあるを知るべきなり、之を總死亡とマラリア死亡との對比に徴するに既叙の如く七・九〇なるを以て死亡は十三人毎にマラリア死亡者一人に該るか故に、マラリア患者の比率は頗る高しとするも、其の死亡率は甚だ低位にして罹患者の半數に達せず。

官立醫院と公醫に依るマラリア患者の差異を観察するに、醫院は總患者中の四・六八〇はマラリアにして、公醫の診療に依るものは、醫院の四倍に上り一九・六八〇の高率を示せり、由來醫院は都市に設置せらるるも、公醫は之に反し村邑に多く存置せらる。是れ側面より觀察すれば醫院、公醫の種別は寧ろ都鄙別マラリア患者の歩合として観測するを妥當なりと信す。

三 官立醫院別 全島醫院の平均は總患者の四・六八〇はマラリアの占むる所たるは上述せり、之を醫院別に商量すれば臺北醫院最寡にして、同上割合〇・三八〇の低率にして



澎湖醫院(〇・九一)之に亞く、最多は臺東醫院の二一・〇六にして、花蓮港醫院の一八・六〇之に亞けり。畢竟するに、患者率の厚薄には死亡率の多寡に勢歸たるを看たり、左に之を要約すへし。

イ 十二醫院中、平均位以下にあるは臺北、澎湖、臺南、新竹及基隆の五醫院にして、就中基隆醫院(二・五)の最高率を示せども、之を全島平均に比すれば約半に過ぎず。

ロ 宜蘭醫院は六・〇七を示し、臺北州下州下三醫院の平均は一・六二の醫院として、異彩を放ちたる観あるも、同醫院の所在地及其の近郊は東海岸系に屬する、本病の濃厚地たるは、本病の分布に於て既記を經たり。

ハ 臺南醫院は嘉義、高雄兩院の間に介在するに拘らず、兩醫院に較すれば其比率の半數に達せざるは單に都市に依る影響のみと速断すへきにあらず。

ニ 臺東、花蓮港の兩醫院に亞いて、比率の高きは屏東醫院なり。併して其の次位にある嘉義醫院(七・四九)と比するに屏東醫院は約倍加して一四・四一を占めたり、之を本病死の傾向と較ぶるに、屏東醫院は總死亡中の一五%以上を包含する旗山、潮州地方を診する影響に由るべく、嘉義醫院の瘵する地域は屏東醫院と同しく一五%を示す東石郡又は斗六、新營地方の一三%内外の地方なるに因り、其の比率の低位にあるは當然の歸結なるも、かく倍加の著差あるは考究の餘地ありと信す。

ホ 臺東廳の本病死率は、甚だ低位にありて一見良好の觀を呈したりしかば、屢々種族と人口との關係を叙述し、事實は斯く低率にあらざるを力説したりしか、輒ち本患

者統計の示すか如く醫療を受けたる者に就て之を觀るに、總患者中の二一・〇六%は本病患者なるを知れり。即ち醫院の診療に係る疾病中マラリアは全島醫院中の第一位に夥多なるを示し、患者五に對しマラリア一に該り、既記の如く同廳は如何に濃厚なる慘害を被りつゝある歟を肯定するに足らむ。

左に官立醫院別マラリア患者の現狀を表章せむとす。

□官立醫院に於けるマラリア患者

醫院	數		總患者百中
	患者	マラリア患者	
臺北	三九、八四七	一五二	〇・三八
基隆	八、七二四	二一八	二・五〇
宜蘭	九、三二八	五六六	六・〇七
新竹	五七、八九九	九三六	一・六二
新竹(新)	六、〇四八	一四七	二・四三
新竹(舊)	一〇、九五八	五八二	五・三一
臺中	一六、〇四七	三六六	二・二八
臺南	八、一一五	六〇八	七・四九
嘉義	二四、一六二	九七四	四・〇三
高雄	六、一二五	三六〇	五・八八
屏東	五、四九〇	七九一	一四・四一
澎湖	三、五〇八	三三	〇・九一
澎湖(總計)	一五、二二三	一、一八三	七・八二
臺東	五、七六五	一、二一四	二一・〇六

花蓮港廳(花蓮港)

四、一三三

七六五

一八六〇

全島

二二四、〇六八

五、八〇一

四六八

**四 公醫別** 公醫の診察に依る患者を州廳別に綜合して之を觀察するに、官立醫院に於ける趨勢と異なるものあり。則ち官立醫院の狀況は主として都邑の片影を示し、公醫の狀態は主として村落の反映とするにあればなり。官立醫院に在りては臺東廳最多を示したるも公醫にては花蓮港廳總患中の三六・三二%を占め第一位に、高雄州は二四・二二%を示して第二位に、臺東廳は前州より僅かに〇・三%の低率にて第三位にあり。第四位は前廳より〇・〇三%低き臺南州(二三・八九%)にして、如上二州一廳は殆ど相伯仲の間にあるを觀るへし。寡少なるは臺北州の一・一八%にして、新竹州之に亞けり。之を要するにマラリア患者は、最低率の地方即ち非マラリア地方の臺北、新竹兩州に在りてすら總患者の一割以上を占め、最高花蓮港廳は三割六分に達し、其の災害は保健衛生上は勿論、經濟界に及ぼす影響の甚大なるに想到せば、本病防遏に關しては積極的對策を講ずるの焦眉の急なるを痛感せずむはあらず。

左に公醫の診察に依る、マラリア患者の狀態を展開すへし。

□公醫の診察に依るマラリア患者

州廳	實數		總患者百中
	總患者	マラリア患者	
臺北州	四、五九四	四、六五〇	一一・二八

新 竹 州	中 州	南 州	高 州	臺 東 廳	花 蓮 港 廳	全 島	
						總患者	マラリア患者
五、九八九	六、八〇五	九二、九二一	五〇、一二七	六、五三五	一五、〇四四	三二六、二六五	六四、二〇七
六、九七六	一一、二一六	二二、一九八	一一、一四〇	一、五六三	五、四六四	六四、二〇七	一九、六八

**五 總括** マラリア患者の逐年の歸嚮を考察するに、

**イ** 最近五箇年中平均總患者の一五・五五%、以下同し)以上を示したるは、大正十一年(二六・八九%)を首とし、同十年(二六・八九%)、同十二年(一五・八七%)之に屬す。之を州廳別に觀察するに同型を取るものなきは奇現象たり。併かも十一年を最多とすべき地方なく、されど第二位とするは各州同軌にして、花蓮港廳は第三位、臺東廳は第五位とせり。故に地方別に第一位とすべき年次を觀るに(一)大正八年を第一位とする地方は臺南州、臺東廳の一州一廳(二)同十年を第一位とする地方は新竹、高雄の兩州と花蓮港廳(三)同十二年を第一位とする地方は臺北、臺中の兩州にして同九、十一の兩年を第一位とする地方なし。

**ロ** 官立醫院の患者より之を觀察するに、一張一弛を呈し其の推移としては甚だ鮮明を闕きたるも、仔細に數字を検索するに減少の傾向にあるものゝ如し。併かも減少の好調を取るは臺北、新竹、嘉義、高雄の各醫院にして、其の他の醫院は去就不定なり、就

中宜蘭 臺中の兩醫院は寧ろ逆勢を辿るものなりと謂はん乎。

ハ 公醫の診療に依るマラリア患者は、大正十年の二一・五一〇を最多とし、同十一年(二一・一四〇)を次位とす。之を官立醫院のそれと對照するに彼此互に相反する傾向あり、而して寡少なるは就れも同九年なりとす。之を州廳別に考察するに新竹州は全島平均と同型を取り、高雄州及び花蓮港廳は平均と同しく十年を最多とせり、同九年は各州廳とも平均位以下にあり、同十二年を最多とする地方は臺北、臺中の二州と臺東廳なりとす。併かも臺中州は官立醫院と同調にありて逐年増加の傾向あり、新竹、高雄の二州はこれ又醫院に於けるか如く減少の趨勢にありと謂ふべし。

其の關係諸表を示さむに次の如し。

□官立醫院及び公醫の診療に依る患者

州廳	大正八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	平均
臺北	二九七六	二一〇四	六二二九	五七四三	六三三三	六六四三
臺中	四六五三	五〇九六	五三三三	五七四三	七六八六	五八六六
新竹	五五	六六	二一〇	六二六	七九	六六
高雄	七五七五	五三三三	四三三三	四三三三	三三三三	五八〇七
花蓮港	二六	一〇六	六二	七六	八六	七三
基隆	一〇〇六	五七〇	二二八	一八〇	三二	三二
宜蘭	一四七	一〇一	二二四	一〇七	一八〇	一七〇
澎湖	一五	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇
全島	一五五	一〇六	一〇六	一〇六	一〇六	一〇六

□官立醫院の診療に依る患者

醫院	大正八年						同九年						同十年						同十一年						同十二年						平均					
	總患者	マラリア患者	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	總患者	マラリア患者	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	總患者	マラリア患者	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	總患者	マラリア患者	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	總患者	マラリア患者	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中	總患者	マラリア患者	マラリア患者百中	マラリア患者百中	マラリア患者百中			
臺北	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
臺中	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
新竹	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
高雄	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
花蓮港	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
基隆	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
宜蘭	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
澎湖	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				
全島	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四	二八〇	一八〇	六四	六四	六四				



全島	高雄		臺東		花蓮港	
	マラリア患者 マラリア百中	マラリア患者 マラリア百中	マラリア患者 マラリア百中	マラリア患者 マラリア百中	マラリア患者 マラリア百中	マラリア患者 マラリア百中
一九二一	三〇〇〇	二二〇〇	一八〇〇	一八〇〇	一八〇〇	一八〇〇
一九二二	二二〇〇	一八〇〇	一六〇〇	一六〇〇	一六〇〇	一六〇〇
一九二三	一八〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇
一九二四	一四〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
一九二五	一〇〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
一九二六	七〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇	五〇〇
一九二七	五〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇	三〇〇
一九二八	三〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇
一九二九	二〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九三〇	一〇〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

### 第九章 マラリア防遏成績

一 總説 マラリア防遏の制は、明治四十三年臺北州下北投庄に施行せられたるを創始とす。爾來十有五年の星霜を閲みし、其の間防遏地域の擴大を來たし、大正十二年末に於ては既に八十五箇所を算せり。

今大正六年より同十二年に至る七箇年間の防遏成績を観察せむとするに、檢血人員百中原虫保有者率の最高なりしは大正六年の三・一三%にして、之に亞くは最近十一年及十二年の孰れも二・五%なり。最低なりしは十年の一・九四%、九年の一・九六%等なりとす。

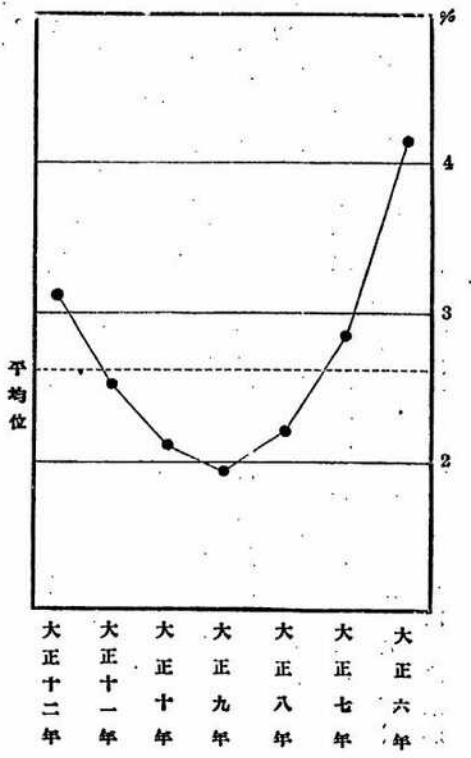
然して如上七箇年平均は二・三一%を示せり。

之を要するに、マラリア防遏の成績は近年逆勢を呈現せる傾向あり、是れ或は本病の濃厚地に現制を布きたると共に施行後未だ兩三年を出てざるあり、或は昔年に達せざるもの等あるは、又成果の上に不良を示せし一因たらずむはあらず。

二 州廳別 本病防遏の成績を州廳別に觀察するに大休全島平均の歸嚮と同しく一張一弛を呈し、全島平均位(二・三一%)より低きは臺北、新竹及び臺南の三州にして、其の他の各州廳は就れも平均位を越騰せり。就中臺中及び高雄の兩州は就れも二・八一%を示し、東部臺灣地方よりも稍々高率を顯し、最低なる新竹州(一・四五%)と對比するに、倍加せるを窺知すへし。

之を要するに(一)臺北州は成績不定型にして遞かに判せざるも不良の趨勢にありと謂ふべく(二)新竹州は逐年好調を持続しつゝ在り(三)臺中州は大正九年迄は逐年減少を來たし甚だ順調を呈せるも成績は高雄州と駢立して不良にあるは前叙の如し(四)臺南州の最近十二年の成績は一・七四%にして之を同年末に於ける他州と比較するに、臺北州よりも低率にして全島の最低たる新竹州に亞いて第二位に在り。併して最近七箇年間の平均も二・二七%の低位を示せり(五)高雄州の歸嚮は臺中州と同班にして近來逆調を辿るものゝ如し(六)臺東廳の消長を窺ふに大正六年の四・一二%より追歲減少を告げ、同九年の一・九六%に至りて好況の極とし、同十年よりは又累年逆勢を取りて其の序を紊すことなく遞加を顯し恰もU字狀を爲せり、是れ或は大正十年より新港區に本令を施行したるは確かに加増の一素因たるを

臺東廳の防遏成績



疑はず、之を圖示するに上圖の如し(七)花蓮港廳は臺北州と同揆にして一盛一衰を示し、大正八年以來二・五%内外を彷徨せり、之を要するに本廳は現状固持にありと謂ふべき歟。其の詳細を表章するに次の如し。

□ マラリア防遏成績

州廳	大正六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	平均
臺東	1.5	0.5	1.5	1.5	1.5	2.0	2.0	1.5
新竹	2.5	2.0	2.0	2.0	2.5	1.5	0.5	1.5
中	3.5	3.0	3.0	3.0	3.0	2.5	2.5	3.0

廳	南	北	東	西	全
臺東	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
花蓮	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
高雄	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
屏東	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
台東	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
花蓮	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
高雄	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
屏東	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
台東	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5
全	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5

更に指數を以て、之を考察するに次の如し。  
大正六年を基數一〇〇とし、同十二年の成績を観るに、最も好果を示したるは、新竹州にして約三分の一に減少して三七を認め、亞いて臺南州は約半減して五四を示し、臺東廳は四分の三に減少して七四を顯せり、併かも臺東廳は大正六年の原蟲保有率最悪にして檢血人員百中四人以上を占めたる結果爾後の各年は際立ちて好績なりとして容受すべき條理に在り。其の他臺北、臺中及び高雄の三州と花蓮港廳は孰れも大正六年に比較し同十二年は不良を示したり。若し夫れ六年以降の七箇年間の平均を観るに一〇〇以上にあるは花蓮港廳のみにして實績の向上を観ず。亞いて臺北、臺中の兩州は全島平均位七四以下にありて、是れまた掣遏の成果良好ならず。

□ マラリア防遏成績(指數)

州廳	大正六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	平均
臺東	100	100	100	100	100	100	100	100
新竹	100	100	100	100	100	100	100	100
中	100	100	100	100	100	100	100	100



臺灣																								
臺東廳						屏東縣						潮州郡												
大武支廳			新港支廳			里壠支廳			臺東支廳			東港郡			潮州郡			屏東縣						
林田	鳳林	豐田	壽山	花蓮	太麻里	大武壠	加路	成興	新港	新園	里壠	鹿野	馬蘭	臺東	萬丹	溪洲	枋寮	潮州	土庫	六龜	麟蹄	屏東		
三・三二	二・二四	三・二四	二・四八	一・一九	一・六四	三・三四	五・二五	四・七一	七・九三	三・二一	三・三〇	四・五八	二・二三	一・三四	一・五七	一・九六	二・九三	四・八〇	六・九六	一・八九	〇・五八	〇・四二	〇・四二	
四・一三	二・三〇	〇・〇八	三・八〇	一・八八	一・四八	二・三六	三・七四	四・七八	九・八〇	三・〇一	三・〇七	四・六九	二・四六	一・四六	一・七二	五・四四	〇・九六	二・五九	二・七七	二・七九	二・五〇	一・五八	一・四六	一・〇五
	一・二三	〇・四二	一・〇五	一・一八	一・〇五	〇・四五	三・三八	五・四一	二・四一	一・九七				一・五六			一・七〇七						〇・四三	
三・三四	二・二七	三・一七	三・〇三	一・四七	一・四九	二・六六	三・七九	四・七四	九・二二	三・〇二	三・〇八	四・五九	二・三〇	一・四二	一・七二	四・八九	一・〇三	二・八四	三・一〇	二・六六	二・〇七	一・三九	一・〇五	一・四四

高雄州												臺南州											
旗山郡			鳳山郡			岡山郡			高雄市、三塊			嘉義郡			新營郡			北門郡					
甲旗	旗山	鳳山	湖內	管內	路竹	岡梓	岡梓	岡梓	岡梓	岡梓	岡梓	大竹	民竹	竹中	嘉義	馬嘉	竹山	關子	白河	鹽水	新營	北門	
二・四〇	五・〇二	二・三九				一・〇〇	五・五三	四・六〇	三・五七	二・一八	三・四二	三・八五	一・八五	〇・九〇	四・二一	四・四九	三・〇八	三・八五	一・四六	一・四二	一・〇五	一・〇五	
三・三九	五・〇〇	五・七九	四・三一	二・一六	六・〇三	三・一一	二・〇三	三・七六	三・九一	三・九五	三・四二	三・一一	四・〇五	一・八五	一・三五	三・九九	三・六六	二・〇五	二・一八	一・〇〇	一・〇六	一・四六	
		五・一一						〇・二一	二・二七	五・〇〇			〇・八六				一・〇七	二・三六					
三・二三	五・〇〇	五・七九	四・一六	二・一三	五・五三	三・一〇	一・九四	三・八三	三・九五	三・九三	三・二六	二・五四	三・一六	三・九〇	一・七三	一・三六	三・八七	三・五八	二・二二	二・一四	一・〇五	一・四四	一・四四



花東支廳		花西支廳		花南支廳		花北支廳	
吉野	一・六五	五・二六	三・四五	三・二七	一・二〇	三・四二	一・六五
濱子	一・七五	三・四五	三・二七	一・二〇	三・四二	三・四二	三・四二
馬太	一・八一	三・二七	八・七三	一・二二	六・三五	三・二二	三・二二
瑞穂	二・二三	八・七三	一・二二	六・三五	三・二二	三・二二	三・二二
玉里	一・八七	三・五八	一・三四	一・七六	三・四四	三・四四	三・四四
公埔	二・一七	二・六〇	一・七六	二・四三	二・四三	二・四三	二・四三
五里支廳	三・〇七	三・〇五	二・二五	三・〇五	三・〇五	三・〇五	三・〇五

四 防退成績 明治四十三年中所定の防退策を樹て、又大正二年本病防退規則を發布せられ、國費を以て事に當りたる結果、其の成績の顯著なるを見たり。然れども最初より繼續して施行せられたる地方と、茲僅かに兩三年に亘れる未だ短期の施行に過ぎざるものは、其の實績に逕庭の存するあるは勿論なり、今防退開始の年月を擗外し、大正十二年末に於ける施行地に就きて、其の成果を観察せむとす。

採血人員百中に於ける本病原蟲保有率を観るに、臺北州北投は〇・三四の低率なるを以て全島中最優良の功績を示し、亞いて關西(新竹州)の〇・四一、淡水(臺北州)の〇・六一、臺南(臺南州)の〇・八九等は一〇に達せざる優良なる成績を挙げたり。翻つて本病原蟲保有者の夥多なるは、日月潭電力作業中勞務者の移住せし門牌潭(臺中州)にして一二・五七を示せり、即ち居住民八人毎に一人の本病原蟲を保存する割合たるなり。亞いて臺東廳の支廳所在地たる新港の九・一二、卯澳外二ヶ所(臺北州)の七・八三、等之に屬せり。

如上の高率にある地方は凡て大正十年以降の施行地にして、未だ防退の端緒にあるを以て、十分なる成績を發揚せざる結果に依れり。更に視點を轉じて大正六年來七箇年間繼承して防退作業中にありて原蟲保有率の高き地方を観るに成廣澳(臺東廳)の四・七四を最高率とし、鳳山(高雄州)の四・一六、竹山(臺中州)の三・九六、等之に亞いて著明なり。其の詳細を表章するに次の如し。

□マラリア防退成績(檢血人員百中原蟲保有者)

地方	施行の年(施行の年を著しは、大正六年以前の分なり)	%
△百分の一迄 (四地方)		
1 北投	七年	〇・三四
2 關西	七年	〇・四一
3 淡水	七年	〇・六一
4 臺南	十二年	〇・八九
△百分の二迄 (二〇地方)		
1 枋寮	十二年	一・〇三
2 新營	十二年	一・〇五
3 嘉義	八年	一・二六
4 臺南	八年	一・二八
5 馬場	八年	一・三六
6 屏東	八年	一・三九
7 關東	八年	一・四〇

△百分の五迄 (三〇地方)		
1 新 開	八 年	三・〇二
2 壽 岡	八 年	三・〇三
3 公 壽	八 年	三・〇五
4 里 公	八 年	三・〇八
5 土 里	八 年	三・一〇
6 路 土	十 二 年	三・一〇
7 竹 路	七 年	三・一六
8 豐 竹	七 年	三・一七
9 拔 豐	八 年	三・二二
10 馬 草	九 年	二・三〇
11 草 玉	八 年	二・四一
12 玉 叉	十 一 年	二・四三
13 叉 里	十 一 年	二・四八
14 里 漢	十 一 年	二・五〇
15 漢 漢	八 年	二・五四
16 新 漢	七 年	二・六一
17 六 新	七 年	二・六六
18 大 集	七 年	二・六六
19 集 武	七 年	二・七一
20 清 集	十 一 年	二・八四
21 橋 清	十 一 年	二・九一
22 南 橋	十 一 年	二・九七
23 河 南	十 一 年	二・九七
24 子 田	八 年	三・二二
25 田 花	八 年	三・二二
26 時 臺	七 年	三・一六
27 竹 臺	七 年	三・一六
28 澤 高	八 年	三・一〇
29 觀 臺	八 年	三・一〇
30 增 臺	八 年	三・〇八
31 花 臺	八 年	三・〇五
32 園 臺	八 年	三・〇三
33 新 臺	八 年	三・〇二

△百分の三迄 (二二地方)		
1 頭 圓	八 年	二・〇六
2 歸 來	八 年	二・〇七
3 白 湖	十 二 年	二・一一
4 湖 白	十 二 年	二・一三
5 鹽 湖	十 二 年	二・一四
6 南 鹽	七 年	二・一九
7 大 南	七 年	二・二一
8 玉 大	七 年	二・二一
9 鳳 玉	七 年	二・二七
10 成 六	八 年	一・九二
11 石 太	八 年	一・八〇
12 石 太	七 年	一・八〇
13 吉 石	七 年	一・七九
14 萬 吉	七 年	一・七三
15 嘉 二	七 年	一・七二
16 田 二	七 年	一・七二
17 田 二	八 年	一・八〇
18 六 田	八 年	一・八〇
19 成 六	十 二 年	一・九二
20 四 成	十 二 年	一・九四
21 山 高	十 二 年	一・九四
22 福 臺	十 二 年	一・四二
23 甲 臺	十 二 年	一・四四
24 中 臺	十 二 年	一・四七
25 水 臺	十 二 年	一・四九
26 義 臺	十 二 年	一・六五
27 丹 臺	十 二 年	一・六五
28 野 臺	十 二 年	一・七二
29 臺 北	十 二 年	一・七三
30 臺 北	十 二 年	一・七三
31 臺 北	十 二 年	一・七三
32 臺 北	十 二 年	一・七三
33 臺 北	十 二 年	一・七三
34 臺 北	十 二 年	一・七三
35 臺 北	十 二 年	一・七三
36 臺 北	十 二 年	一・七三
37 臺 北	十 二 年	一・七三
38 臺 北	十 二 年	一・七三
39 臺 北	十 二 年	一・七三
40 臺 北	十 二 年	一・七三
41 臺 北	十 二 年	一・七三
42 臺 北	十 二 年	一・七三
43 臺 北	十 二 年	一・七三
44 臺 北	十 二 年	一・七三
45 臺 北	十 二 年	一・七三
46 臺 北	十 二 年	一・七三
47 臺 北	十 二 年	一・七三
48 臺 北	十 二 年	一・七三
49 臺 北	十 二 年	一・七三
50 臺 北	十 二 年	一・七三

△百分の五以上（八地方）

1	警	後	高雄州	十二年	五・五三
2	中	臺	中州	十一年	五・六七
3	山	子	頂高雄州	八年	五・七九
4	馬	太	鞍花港廳	十二年	六・三五
5	島	日	臺中州	十二年	七・二二
6	加	澳	外二ヶ所臺北州	十二年	七・八三
7	新	港	臺東廳	十年	九・二二
8	門	牌	臺中州	十一年	一一・五七
9	梓	高	臺南州	七年	三・八七
10	甲	仙	臺南州	八年	三・二三
11	大	林	臺南州	八年	三・二六
12	林	田	花港廳	七年	三・三四
13	大	里	臺北州	八年	三・三六
14	瑞	瑞	臺北州	十年	三・四二
15	瑞	瑞	臺北州	七年	三・四四
16	關	子	臺北州	三・五五	
17	關	子	臺南州	三・五八	
18	加	走	臺東廳	三・七九	
19	楠	高	臺南州	三・八三	
20	中	子	臺南州	三・八七	
21	中	子	臺南州	三・九〇	
22	土	高	臺南州	三・九三	
23	高	高	臺南州	三・九五	
24	竹	山	臺中州	三・九六	
25	鳳	山	臺中州	四・一六	
26	大	南	臺北州	四・五七	
27	鹿	野	臺東廳	四・五九	
28	成	廣	臺東廳	四・七四	
29	溪	洲	臺東廳	四・八九	
30	旗	山	高雄州	五・〇〇	

五 人口の移動と原虫保有者

本病の防退制は地域を限定して施行せらるゝ結果、其の園内の保虫者は根治するに至る迄繼續して適薬を彼用せしむるを以て、率には原虫保有者の削減を觀る理なるも、奈何にせむ社會は斯く單簡に落着すへきものに非らず、即ち人口の來住是なり、人口の移動に伴ひ新たに病原蟲保有者の轉入を見む乎、曩日の成績は破壊せられざるを得ず。故に移入者の頻繁なる地方は、從つて原蟲保有率高かるへき理とすへく、よりて移入者と本病保原虫者との關係を考察せむとす。

今、大正六年より同十二年に至る七箇年間繼續して、防退制を施行しつゝある地方に就きて、移住人口との相關々係を瞥見するに、人口の移動率は、最近大正九年より同十一年に至る三箇年間の平均轉入は無慮一六三・三〇七人にして、人口千に付き四三・六人該る。併して如上三箇年中九年は第一回國勢調査施行の年にして十月一日以降の三箇月の調査に限られたるを以て、若し九年の元且より九月末日に至る移動をも算入すれば更に移動率の昂騰するは勿論なり。茲に人口移動なる意義を略解するの要あり、即ち人口移動率の實益

とするは、現住人口算定に資するを以て主眼と爲せし結果(一)本島の總人口計算には本島内の移動は之を移動と認めざるを可とすべく、故に内地若くは外國間の移動のみ調査すべし(二)州廳別に人口を算定する場合には各自の州又は廳内の異動は之を控除し、他州廳との關係のみを計上すべく(三)郡及び市街庄の場合には、其の郡又は市或は街庄内の轉住は之を除外して算出するを原則とす。併して前掲の平均轉入竝に移動率は同一市内又は同一街庄區内の移動は之を度外したる實數なり。

而して全島平均の人口千に對する轉入率は四三・六人なるも、之を州廳に分ちて觀察するに、此の間大なる逕庭を存せり。即ち花蓮港廳は一一五・三人にして全島平均の三倍に上り、亞いて臺北州の五六・五人、新竹州の五三・二人等之に屬し最寡なるは臺南州の二九・五人、高雄州の三四・〇人なり。

其の詳細は次表の如し。

□人口移動率(轉出を含む)

州廳	大正九年		大正十年		大正十一年		平均	
	人口	轉入	人口	轉入	人口	轉入	人口	轉入
臺北	七四、〇七七	三、五五五	七九、〇二二	五、〇〇五	七九、〇二二	六、〇〇五	七九、〇二二	六、〇〇五
新竹	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇
臺中	六二、〇〇〇	二、五〇〇	六二、〇〇〇	二、五〇〇	六二、〇〇〇	二、五〇〇	六二、〇〇〇	二、五〇〇
臺南	九〇、〇〇〇	一、〇〇〇	九〇、〇〇〇	一、〇〇〇	九〇、〇〇〇	一、〇〇〇	九〇、〇〇〇	一、〇〇〇
高雄	三〇、〇〇〇	一、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一、〇〇〇
花蓮港	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇
計	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

市	大正九年		大正十年		大正十一年		平均	
	人口	轉入	人口	轉入	人口	轉入	人口	轉入
臺北	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
臺中	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
臺南	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
計	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇

右は州廳を綜括したる轉入率なるを以て、更に移動の頻繁なる都市に於ける實際を窺知するに、臺中市の轉入率最高にして一三六・九人を示し、臺北市之に亞きて八九・〇人を示し、臺南市は迥に低率にて五八・四人を示して、之を臺中市に比すれば半數に達せざるも、全島平均に較すれば約十五人多し。併して三市平均を覓むるに八六・三人なりとす。

□三都市轉入率

市	大正九年		大正十年		大正十一年		平均	
	人口	轉入	人口	轉入	人口	轉入	人口	轉入
臺北	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
臺中	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
臺南	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
計	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇

備考 大正九年は十月一日以降なり

州廳及び都市の人口轉入率は上叙の如し、さらばマラリア防退施行地に於ける人口の轉入状態や如何。大正六年より同十二年に亘り繼承して本病防退制を施行せる三十二箇所に就きて、大正七年乃至同九年州廳及都市の場合と同しく九年は第一回國勢調査施行の爲め算定人口更新の結果十月一日以降の調査に係るの平均一箇年間の轉入の實數を觀るに、嘉義最多にして二千七百人を算し、屏東の千四百人、花蓮港の千人、鳳山の七百人等順次に

多數なり。之を人口に對比して其の轉入率を算出するに、最多なるは成廣澳(臺東廳)の人口千に付き三〇・九人以下の割合は凡て人口千に對する比率なりを最とし、鳳林、玉里、花蓮港以上三箇所は凡て花蓮港廳なりの各二百人臺、壽(花蓮港廳)、甲仙、屏東以上高雄州、玉井臺南州の各百七十人内外にして上叙の都市よりも適に高率なり。之に反し寡少なるは枋寮(高雄州)の三二人を最低とし萬丹(高雄州)、馬稠後(臺南州)、吉野(花蓮港廳)の各四五人、關廟(臺南州)の四七人、關子嶺(臺南州)の六二人、旗子寮(臺北州)の六五人、北投(臺北州)の七二人等漸次之に屬し、マラリア防退地としては、移動率低き觀あるも、之を上述の州廳別平均位に對照せしむる時は、格段に高率なるを知るべきなり。之を要するに、本病防退地域内の移動は總して過多なるを窺ふへし。

次に轉入率の多少と、本病原虫保有率の高低とを對比するに、轉入率最高の成廣澳は原虫保有率も亦島内隨一の四・七四%を示し、亞いて鳳林、玉里、花蓮港は轉入率高きに比し本病防退成績は稍々良好を呈するも壽、甲仙は兩比率孰れも高し、翻つて移動率の低き地方を觀るに、枋寮、萬丹、馬稠後、吉野、關廟、北投等にして、孰れも轉入に比例して原虫保有率亦甚だ低し。之を要するに、原虫保有率の多少は人口の移動率に正比する傾向實に鮮明なりと謂ふへし。

左に轉入及び原虫保有率の高低兩端を示さむ。

□轉入、原虫保有率比較

イ、高き地方

轉入		原虫保有者	
地方	人口千に付き	地方	検査人員百中
成廣澳	三〇九・一八	成廣澳	四・七四
鳳林	二二二・一六	鳳山	四・一六
玉里	二〇八・六二	竹山	三・九六
花蓮港	二〇〇・五九	竹門	三・八七
壽	一八〇・二六	關子	三・五八
甲仙	一七四・四九	鹿寮	三・五五
屏東	一七一・八八	甲仙	三・三三
玉井	一七一・四八	里	三・〇八
六龜	一五九・〇二	壽	三・〇三
臺東	一五八・五六	潮州	二・八四
蘇澳	一四〇・二八	龜州	二・六六
枋寮	三三・〇二		
萬丹	四五・七七		
馬稠後	四五・七七		
吉野	四五・八二		
關廟	四七・一〇		
關子	六二・〇二		
旗寮	六五・三七		
北投	七二・二二		

右表に依れば、轉入の多き地方は従つて原蟲保有率高く、又轉入の寡き地方は原蟲保有率低き傾向ありと雖も、併かも異例なき能はず。即ち花蓮港、屏東、臺東、蘇澳等は移動夥多なるに反し原蟲率低し、是れ本病防退の見地より觀て成績の良好なりとする證左と爲すべく、之に反し關子嶺、城子寮等は移動寡少なるに拘はす原蟲保有率高し。即ち、防退成績の不良なるを物語ものにあらすして何ぞや。

更に考察眼を轉して分量的に之を觀察するの要あり、即ち如上は轉入寡き地方は保有率も亦低率にありとせしは、是れ當然の歸結にして、眞の成績にあらす、其の成績を判せむには原蟲保有率に移動轉入率を配さざるを得ず、次に原蟲保有率一に對する轉入者を算出して、防退成績の良否を觀察すべし。

4. 原蟲保有率一に對する轉入率五十人迄の地方成績不良の地域

關子嶺	一七・三二	鳳山	二九・三七
旗子寮	一八・四一	枋寮	三一・八七
竹山	二四・七五	雙溪	三三・一九
萬丹	二六・五九	關廟	三三・六四
吉野	二七・七七	馬稠後	三三・六五
竹子門	二七・八四	鹽水	三四・二七

口、原蟲保有率一に對する轉入率百人迄の地方(成績中位にある地域)

歸來	五〇・五四	成廣澳	六五・二三
甲仙	五四・〇二	嘉義	六八・五七
六龜	五九・四九	玉井	七七・五九
白河	五九・七八	玉里	八五・八五
蘇澳	一一・三三	鳳林	九三・四六
蘇澳	一一・三三	花蓮港	一三六・四六
蘇澳	一一・六六	北投	二二・三八
蘇澳	一一・六六		
蘇澳	一一・六六		

ハ、原蟲保有率一に對して轉入率百人以上の地方(成績良好の地域)

前叙の移動率のみに依りたるものと、移動對原蟲保有の兩率より觀察したる事實とを綜合するに、就れも大體に於て其歸嚮の同型なるを省察するを得へし。

次に原蟲保有率對移動率と、現住人口對轉入轉出の詳細とを表章すへし。

□原蟲保有對移動兩率

地方	原蟲保有率	人口の移動		原蟲保有率一に對する移動率
		現住人口	轉入轉出	
蘇北	〇・四七	二八〇	三五	三三・六
蘇北	〇・四七	二八〇	三五	三三・六
蘇北	〇・四七	二八〇	三五	三三・六

地方	大正七年		大正八年		大正九年		平均	
	人口	転入	人口	転入	人口	転入	人口	転入
北投	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
蘇澳	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
石碇	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
成福	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
双溪	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
大寮	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
竹塹	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
馬山	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
關後	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
馬寮	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
嘉新	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100
白河	3,522	100	3,522	100	3,522	100	3,522	100

□ 現住人口と轉入、轉出 (各年末別)

地方	人口	轉入	轉出
北投	3,522	100	100
蘇澳	3,522	100	100
石碇	3,522	100	100
成福	3,522	100	100
双溪	3,522	100	100
大寮	3,522	100	100
竹塹	3,522	100	100
馬山	3,522	100	100
關後	3,522	100	100
馬寮	3,522	100	100
嘉新	3,522	100	100
白河	3,522	100	100

地方	人口	轉入	轉出
北投	3,522	100	100
蘇澳	3,522	100	100
石碇	3,522	100	100
成福	3,522	100	100
双溪	3,522	100	100
大寮	3,522	100	100
竹塹	3,522	100	100
馬山	3,522	100	100
關後	3,522	100	100
馬寮	3,522	100	100
嘉新	3,522	100	100
白河	3,522	100	100

備考 大正九年の輸入、輸出の各年に比し少数なるは十月一日より年末迄の三箇月の移動なるに依る。

品名	大正九年	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年	大正十六年	大正十七年	大正十八年	大正十九年	大正二十年
鹽	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
玉	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
鳳	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
吉	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
花	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
成	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
里	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
蕪	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
鳳	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
甲	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
湖	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
六	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
歸	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
萬	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
屏	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
枋	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
竹	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
關	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
玉	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
鹽	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

大正十五年三月十日印刷  
大正十五年三月十三日發行

臺灣總督府警務局衛生課

印刷人 江里口利三郎  
印刷所 江里口商店印刷工場



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

498
235

昭和十一年（一九三六年）

# 臺灣ノ阿片制度

附 麻藥取締ノ概要

臺灣總督府警務局

